

令和7年度
障害者等による
文化芸術活動推進事業
事例集

はじめに

文化庁では、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」に基づく「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」や「文化芸術基本法」に基づく「文化芸術推進基本計画」を踏まえ、障害者等による文化芸術の鑑賞や創造の機会の拡大や作品等の発表機会の確保など、文化芸術による共生社会の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進に取り組んでいます。令和5年度から第2期の計画期間が始まった両計画では、障害者等による幅広い文化芸術活動の推進や、障害の有無等にかかわらず誰もが文化芸術に親しみ、多様な活動に参加する機会の促進、地域における推進体制の構築に取り組むこととされています。

令和元年度から始まった「障害者等による文化芸術活動推進事業」では、両計画に基づく施策を国として着実に推進していくため、障害者等による文化芸術の鑑賞や創造機会の拡大、発表機会の確保に係る先導的・試行的な取組、支援人材の育成、文化芸術へのアクセスの改善・鑑賞サポート等、共生社会を推進するための様々な取組を、各団体等に委託し、実施しているところです。

こうした取組を進めることは、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」の改正による合理的配慮の提供の義務付け（令和6年施行）や、「障害者による情報の取得及び利用並びに意思疎通に係る施策の推進に関する法律（障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法）」（令和4年施行）の趣旨にも適うものです。

昨年度に引き続き、令和7年度の本事業における各団体等の皆様の創意工夫による取組の成果について、関係者間で共有し、更に各取組の改善に繋げていただくため、事例集としてとりまとめました。本事例集が、共生社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず誰もが文化芸術に触れ、その豊かさを享受する活動が一層広がる一助となることを願っております。

文化庁参事官（生活文化創造担当）

参考

障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画（第2期）
（令和5年3月策定）（計画期間：令和5年度～令和9年度）

URL

https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shogaisha_bunkageijutsu/1415475.html



もくじ CONTENTS

01	『文化の扉を開こう!』～障害児等の文化体験活動と支援人材の育成～ 公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会	4
02	宮城野区子ども舞台芸術祭フラットシアターフェスティバル vol.4開催事業「劇場からまちへ、そして人へ」 NPO 法人アートワークショップすんぶちよ	6
03	日本台アジア太平洋 国際交流事業～認知症者・高齢者と介護者をつくる「アートのような、ケアのような《とつとつダンス》」 一般社団法人 torindo	8
04	やってみようプロジェクト 公益社団法人日本劇団協議会	10
05	新国立劇場主催演劇公演等における観劇サポートと関連事業 公益財団法人 新国立劇場運営財団	12
06	舞台手話通訳者の人材育成および実践普及、観劇サポート啓発 特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク	14
07	国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業II～作品の制作・発信と国際交流～ 社会福祉法人トット基金 日本ろう者劇団	16
08	プロの音楽家を介在したインクルーシブ体験と地域ネットワークの構築 公益財団法人新日本フィルハーモニー交響楽団	18
09	声の力プロジェクト 株式会社朝日新聞社	20
10	ミュージアム運営に資する社会包摂・アクセシビリティ研修の開発と普及 独立行政法人国立美術館	22
11	「バレエによるインクルージョン促進事業」リラックスパフォーマンス 公益財団法人スターダンサーズ・バレエ団	24
12	楽しくつながるプロジェクト～共生社会実現のために～ 一般社団法人 日本演出者協会	26
13	地域における障害児等による芸術家ワークショップへの参加を通じた包摂的社会環境づくりの推進 特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち	28
14	DanceSyndrome によるダンスリーダー育成プログラム― 障がい者のファシリテーターを増やすプロジェクト 特定非営利活動法人 LAND FES	30
15	ホスピタルシアタープロジェクト2025―すべての家族に優しい多感覚演劇の創造・巡演、アウトリーチの展開 特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク	32
16	東京子どもアンサンブル～視覚障害のある子どもたちを中心としたインクルーシブなコーラス隊～ 一般社団法人エル・システムジャパン	34
17	手話のまち東京国際ろう芸術祭2025 一般社団法人日本ろう芸術協会	36
18	劇場・音楽堂等による共生社会実現のための人材養成講座 公益社団法人全国公立文化施設協会	38
19	障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞のための講座とワークショップ研修事業 株式会社 precog	40
20	いつでも、だれでも、どこへでも「ミュージアム・アクセス・センター」モデル普及事業 特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン	42
21	文化芸術鑑賞の相談窓口、および鑑賞サポートの取組 Palabra株式会社	44
22	障害者等の文化芸術活動の推進体制の構築に関する業務 株式会社文化科学研究所	46
23	障害者の文化芸術活動の実施状況調査 株式会社シタシオンジャパン	48

24	あらゆる人に“みなと”がひらくー横浜美術館 多様性に対応した社会包摂プログラムー 公益財団法人横浜市芸術文化振興財団	50
25	目でみて楽しむろう者の思い出と伝統人形芝居 公益財団法人現代人形劇センター	52
26	精神障害当事者の経験に基づいたオリジナル演劇の公演及び地域を超えた交流、普及啓発活動 OUTBACK プロジェクト	54
27	地域の医療現場と公立文化施設で支える医療的ケア児や重度心身障害児者の参加するインクルーシブな創作環境モデル展開事業 医療法人社団オレンジ	56
28	「表現未満、プロジェクト」～浜松市中心市街地から始まる新しい価値創造の実践及び「表現未満、センター」共創事業 特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ	58
29	大学から地域の障害児者に音楽を普及するモデルの構築―オーダーメイド・アウトリーチを通して 国立大学法人滋賀大学	60
30	「美術館」と「障がい」の再検討と実践の共有 一般社団法人 HAPS	62
31	令和7年度「CONNECT ㊦」こちこちの こちを こちあう 株式会社京都新聞ホールディングス	64
32	鑑賞支援サービス地域スモールモデル構築事業 一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構	66
33	みんなでダンス in Ibaraki プロジェクト 公益財団法人茨木市文化振興財団	68
34	障がいのある児童や成人の身体的芸術活動（ブレイクダンス等）の創造と発表の機会を確保・充実させる取り組み 一般社団法人日本アダプテッドブレイキン協会	70
35	医療リハ施設や支援学校に訪問して身体的芸術活動の体験と発表の機会を提供し・充実させる活動 川村義肢株式会社	72
36	日本センチュリー交響楽団特別支援学校コンサート 日本センチュリー交響楽団	74
37	こんにちは、 ^{ぐちゃぐちゃのジャゴチャ} 共生社会 特定非営利活動法人ダンスボックス	76
38	Art for Well-being 障害福祉の現場におけるアート×テクノロジー活用人材の育成プログラム開発と普及 一般財団法人たんぼぼの家	78
39	令和7年度 戯曲表現が開く障害者の表現と障害理解＜劇作家による伴走支援と各地公演＞事業 特定非営利活動法人鳥の劇場	80
40	地域と共につくる島根インクルーシブシアター・プロジェクト2025 公益財団法人しまね文化振興財団	82
41	四国・中国・近畿ブロックの重度障害児者を対象とした文化芸術活動「クレッシェンド@愛媛大学」 国立大学法人 愛媛大学	84
42	太陽が笑うからねプロジェクト NPO 法人シアターネットワークえひめ	86
43	PD ダンス®の普及事業～地域拡充編 一般社団法人バラカダンス	88
44	共生社会へチャレンジ IN FUKUOKA 特定非営利活動法人アートマネージメントセンター福岡	90
45	「ゆいまーる ミュージックプロジェクト」 一般社団法人 琉球フィルハーモニック	92
46	音楽体験を通した不登校児童生徒の社会的接点を作る音楽プログラムの開発と実践、及びその検証 一般社団法人 楽友協会おきなわ	94

『文化の扉を開こう!』 ～障害児等の文化体験活動と支援人材の育成～

団体名

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会

所在地：北海道札幌市

団体URL：https://koguyama.jp/

事業URL：https://youtu.be/bmKeFyolwCo

事業概要

誰もが豊かな体験機会や舞台芸術を享受できる社会を目指し、障害のある子どもたちの活動が主となる文化体験、自ら足を運ぶことが困難な子どもたちに向けた鑑賞・体験プログラムの拡充等、支援人材の育成、多様性への理解につなげるための取組みを進める。

本事業で実施した内容

インクルーシブ文化祭『まぜこぜフェスティバル』

開催日：令和7年10月12日(日)～13日(月・祝) 2日間
場所：札幌市こども人形劇場こぐま座・中島児童会館・中島公園
参加人数：1,194名
対象：すべての人、障害のある人と家族、子ども・福祉に携わる人、支援者、外国人
協・スタッフ：まぜこぜフェスティバル2025実行委員会 他 45名

実施内容

パフォーマンスステージ、舞台手話通訳付き人形劇公演、視覚障害者のための上演前解説、ワークショップ、ごちゃまぜパレード、あそびの広場、こぐマルシェ(作品販売等)、アール・ブリュット企画展示、相談・情報コーナー等



インクルーシブ文化祭『まぜこぜフェスティバル』

地域交流プログラム：①人形劇体験②人形浄瑠璃体験

開催日：①令和7年11月13日(木)～12月12日(金) 全6回
②令和7年7月4日(金)・11月27日(木)・12月23日(火) 全3回
対象：①札幌市元町北小学校すぎの子学級4～6年生・12名
参加人数 ②札幌市立北翔支援学校 21名・千歳市学校適応指導教室おあしす12名・自立訓練事業所チャレンジキャンパス15名

実施内容

- ①作品創造をとおして、子どもたちの表現力や他者と関わろうとするコミュニケーション力を引き出す。
- ②身体的、精神的、社会的な理由等により自ら参加することが困難な子どもたちと、人形浄瑠璃人形や鳴り物等の音楽、伝統芸能に触れる機会を創出しワークショップと観劇会を行う。

パペットアートヴィレッジ：舞台表現プログラム

開催日：令和7年6月29日(日)～12月21日(日) 全12回
場所：札幌市こども人形劇場こぐま座・中島児童会館
対象：障害等のある子ども・障害のある子どもとともに表現活動することに興味がある子ども(小学生～高校生)
参加人数：16名・スタッフ35名
アドバイザー：矢吹 英孝(公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会)

実施内容

「共にあそぶ・共につくる」ことをテーマに、障害の有無に関わらず子どもから大人までさまざまな人たちが混ざり合い共に楽しめるコミュニティを創出する。人形劇を中心に、音楽やダンス、工作や絵画、野外活動等のあそびを通じた表現活動。子どもたちの自由な発想を活かした創作活動を行う。



パペットアートヴィレッジ：舞台表現プログラム

舞台手話通訳付き人形劇及び人形劇巡回公演

開催日：令和7年10月31日(金)・11月29日(土)・令和8年1月23日(金) 全3回
場所：札幌市新琴似児童会館70名・苫小牧市東開文化交流サロン79名・札幌市東部児童相談所17名

実施内容

聴覚障害、子どもの居場所、児童相談所(一時保護下にいる子どもたち)に向けた人形劇鑑賞会を行う。

本事業で得られた成果

いろんな人たちが文化を通してひとつになる

「インクルーシブ文化祭まぜこぜフェスティバル」は、文化に触れながら「ちがっていい」「みんなでつくるって楽しい」を感じることができるインクルーシブな企画です。障害のある子どもたちが生き生きとステージで活躍

する姿、多くの来場者が作品に触れる機会となりました。障害の有無、国籍、文化的背景、年齢などを超えて、すべての子どもとその家族が楽しみ、みんなが主役になれる、いろんな個性がまぜこぜになって、いままで観たこと

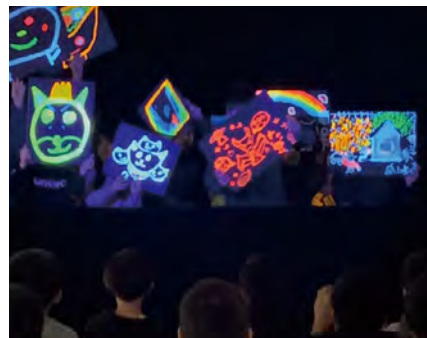
がない新しい宝物をみんなで作りあげることができました。そして、何より嬉しいことは当劇場において障害当事者の方々の観劇や参加が増えつつあります。この輪が回を重ねることに広がっていくことを目指します。

子どもたちの順応力、対応力、そして何より子どもたちの無限の才能

3年目となった「パペットアートヴィレッジ」は、参加者も19名(うちスタッフとしての参加、卒業生3名)、下は年長から上は高校3年生まで幅広い年齢層の中で活動を行っています。宣伝や口コミなどで少しずつ広がり、支援学校や支援級の子どもの参加が少しずつ多くなってきました。少な

らず、これらのインクルーシブ事業が徐々に浸透してきた成果と考えています。それは私たちにとっては非常にありがたいことです。障害のある子どもたちの活動の場を創って、障害の有無に関わらず誰もが参加でき、みんなでごちゃまぜになっていることに挑戦していくこと、そしてソーシャ

ルインクルージョンという考え方が広まり、表現活動の場や社会全体に理解が広がっていくことが大きな目標です。今後も、もっと多くの子どもたちに体験活動の機会を届けられるよう活動の幅を広げていきたいと思っています。



地域交流プログラム：①人形劇体験



地域交流プログラム：②人形浄瑠璃体験



舞台手話通訳付き人形劇及び人形劇巡回公演

事業実施における工夫

劇団や関係団体との連携からもう一步踏み込み、多くの人々の興味・関心、理解を進めるため、初の試みとなる「インクルーシブ文化祭」を開催しました。実行委員会という形を取ったことで、自分たちだけでは到底実現しなかったアイデアやつながりが広がり、とても良いカタチで、新しい文化祭を創り上げたと思っています。また、札幌の中心部にある中島公園(屋外)を会場としたことで、多くの市民の目に触れ、いろんな人たちが文化を通してひとつになれるそんな企画になりました。個性という自分らしさを思いっきり表現できる。そして、その個性がぶつかり合うのではなく、混ざり合ってひとつのものを創り上げる。1,000人を超える来場者を笑顔にすることができたと自負しています。

重度の障害を持った子どもたちを対象とした「ワークショップ」では、肢体不自由に加え知的障害や視覚障害など重複した障害を持っています。車椅子やバギーでも外に出て劇場で観劇をする体験をさせてあげたい、視力は弱くても光や音で臨場感のある体験をすることで何か感じてもらえるのではないかと、実際に何ができるか綿密に打合せを持ちました。まだまだ知識も不十分で改善の余地はありますが、これまで行ってきた経験を活かしたプログラム構成、子どもたちの個性やその時の状況に合わせた臨機応変な対応など、事業に理解があり協力をしてくれる劇団、アーティスト、スタッフのみなさんの力も大きく、子どもたちが楽しく体験ができるような進め方ができています。

宮城野区子ども舞台芸術祭フラットシアターフェスティバルvol.4開催事業 「劇場からまちへ、そして人へ」

団体名

NPO 法人アートワークショップすんぷちょ

所 在 地：宮城県仙台市

団体 URL：https://sun-pucho.com/

事業 URL：https://sun-pucho.com/fes2025

事業概要

本事業は、宮城県仙台市において、障害のある子どもを含む市民が、障害の有無を超えて舞台芸術の創作および上演に参加することを目的に実施した。従来の鑑賞型中心の芸術祭から発展し、本年度は創作段階から障害当事者と非当事者が混在して関わり、出演者として舞台上に立った点が大きな特徴である。特にソーシャルサーカスの手法を取り入れ、プロのアーティストと協働しながら作品を創作・上演することで、相互理解と創造性の向上を図り、文化芸術を通じた共生社会の実践的な事例を創出した。

本事業で実施した内容

宮城野区子ども舞台芸術祭 フラットシアターフェスティバルvol.4

実施内容

開催期間：2025年9月13～14日(土・日) 10:00～15:00

開催場所：宮城野区文化センター、宮城野区中央市民センター

観客動員数

有料プログラム動員数：597人(4プログラム)

無料プログラム動員数：570人(5プログラム)

総 動 員 数：1167人

【チケット予約者障害種別内訳】

肢体不自由：6人 知的障害：27人 発達障害：6人

内部障害：2人 自閉症：2人 精神障害：3人

聴覚障害：22人 視覚障害：1人 合計66人

※当日券入場、無料エリアへの来場者の障害者数はカウントされていない

チケット料金：おとな：2000円、高校生以下・障害者手帳保持者：500円、2歳以下・ガイドヘルパー：無料
有料観客数の11%が障害のある人の来場となった

【アーティスト参加人数】

48人(うち障害者10人)

・上演する側にも障害のあるアーティストが全体の20%を占める結果となった。

【ボランティア参加人数】

26人(うち障害者3人)



ソーシャルサーカスに出演する子ども

プログラム

- ・ソーシャルサーカスプロジェクト「Witty Look の Life's a CIRCUS!!!!」／Witty Look、ほか
- ・演劇「なきむしのうみ」／くろひげ
- ・手話ワークショップ「体と顔をたっぷり使って楽しむ手話!」／手話エンターテイメント発信団 oioi
- ・人形劇「ももたろう」「ねねね」／ひとみ座 ※字幕タブレット付き
- ・大道芸「DoDoおじさんのにんぎょうマジック座」／DoDoおじさん
- ・体験「とにかくまっくら」／宮城県障害者福祉センター
- ・工作「ダンボールパーティー」／羽賀崇子
- ・工作とパレード「たこぼ!」／人形劇団ボンコレラ、でもトラ!

主 催：文化庁、NPO 法人アートワークショップすんぷちょ

共 催：公益財団法人仙台ひと・まち交流財団 宮城野区文化センター、仙台市教育委員会

協 力：一般社団法人宮城県聴覚障害者協会／東北生活文化大学高等学校 保育コース／特定非営利活動法人みやぎ県子ども・おやこ劇場[仙台若林子ども劇場／岩沼おやこ劇場／石巻子ども劇場／大崎おやこ De 劇場]／認定NPO 法人冒険あそび場ーせんだい・みやぎネットワーク／D-smile TOHOKU／原町東部商店会／宮城県聴覚障害者情報センター／みやぎデフキッズクラブ／仙台市聴覚障害者協会／NPO 法人エイブル・アート・ジャパン



視覚障害者との準備

本事業で得られた成果

東北初のソーシャルサーカスプロジェクト始動、出演する喜びを多様な子どもたちへ

本事業では、東北地域では初の試みとなるソーシャルサーカスプロジェクトを始動させ、障害のある子ども5人を含む市内の小中学生11人が、プロのサーカスアーティストと協働して創作および上演を行った。参加者は全員サーカス未経験者であり、6月の募集開始後、7月から約3か月間にわたり稽

古場でのワークショップや自宅練習を重ねた。作品全体の構成や演出はアーティストが担いながらも、どの技に挑戦するかは子ども自身が選択し、互いに技を教え合い励まし合う関係性が育まれた。エアリアルや玉乗りなど大人でも習得が難しい技にも挑戦し、夏休み期間中に自主練習に励む姿も

見られた。2公演はいずれも満席となり、千秋楽では立ち見が出るほどの盛況であった。参加した子どものうち不登校気味だった子どもが自信をつけて登校日数が増えた、学校内で自主的にサーカス部を立ち上げたといった変化も確認され、創作体験が生活や行動の変容につながる成果が見られた。

障害当事者と協働してブラッシュアップした体験・鑑賞プログラム

視覚障害者と共に実施した体験プログラム「とにかくまっくら」では、宮城県障害者福祉センターのスタッフおよび視覚障害当事者2名と協働し、完全遮光空間で五感をを用いた体験を提供した。2日間で延べ130人が参加し、今年度は「お月見」をテー

マに紙粘土で団子を作るなど、触覚や嗅覚を重視した内容に発展した。また舞台美術家が新たに関わることで、空間演出や声かけに演劇的要素が加わり、芸術祭に適したプログラムへと深化した。加えて、聴覚障害者と協働した字幕タブレット付き人形劇

では、当事者の助言をもとに字幕の内容や表示方法を検討し、終演後の座談会やアンケートを通じて改善点を整理した。障害当事者を企画段階から担い手として位置づけたことにより、来場者との対話や相互理解が生まれた点が大きな成果である。

地域に根づき始めた共生型フェスティバルとしての成果

4回目の開催となる本フェスティバルでは、多くの公演が当日満席となり、過去最大規模の観客動員数を記録した。有料チケット予約者の居住区分析では、会場所在地である宮城野区民の割合が最も高く、地域住民にとって身近な文化行事として認識されつつあることが示された。また、無料エリアに

は小学生が友人同士で来場する姿が多く見られ、子どもだけでも安心して訪れられる地域のお祭りとして定着し始めていることがうかがえた。障害のある人も運営や出演に関わり、年齢や立場を超えて同じ空間で感動を共有する光景は、これまで積み上げてきた取り組みが可視化された象徴的な成

果であった。今後も本フェスティバルでは、年に一度、多様な人々と舞台芸術を共有する原体験を子どもたちに届ける地域文化として、共生社会の文化的基盤を着実に育んでいきたい。



字幕タブレットを使用する観客



地元紙への掲載

事業実施における工夫

ポイント

本事業では、第3回のテーマ「劇場からまちへ」を継承しつつ、第4回となる今回は「劇場からまちへ、そして人へ」を掲げ、取り組みを発展させた。これまで障害のある人は主に観客として関わる場面が多かったが、今回は運営や出演といった創り手の立場でも参画してもらうことで、共に芸術祭を形づくる実践を行った。障害のある人の芸術活動を、障害のない人が一方的に支える構造ではなく、環境づくりの段階から障害当事者と協働することは、社会状況の変化に応じた持続的な事業展開において重要である。企画運営において当事者の声に丁寧に耳を傾けることで、合理的配慮にとどまらず、創造性を高める工夫が生まれ、多様な視点が重なり合う文化芸術ならではの価値創出につながった。



満席の観客

団体名

一般社団法人 torindo

所在地：埼玉県さいたま市

団体 URL：https://torindo.net/

事業 URL：https://torindo.net/project/jp-my-totsu2/

事業概要

<とつとつダンス>は、ダンサー・振付家の砂連尾理と一般社団法人 torindo が、認知症のある高齢者や障害のある人、介護者と共に、17年間にわたり国内外で約450回実施してきたダンスワークショップです。今年度は、文化芸術活動を通じた認知症者・高齢者の Well-being 向上と、芸術表現と介護福祉の接続による新たな価値創出を目的に、マレーシアの認知症者・介護者・アーティストと共同制作を行いました。その成果をマレーシア最大級の芸術祭「ジョージタウン・フェスティバル」で発表し、大きな反響を得ました。さらに、実践の再現性と普及性を高めるため、英語ベースのマニュアルブックをシンガポールのアーティストと協働で制作しました。

本事業で実施した内容

シンガポールでの活動

開催日：2025年7月30～8月1日

会場：アリワイ・アーツ・センター、Kwong Wai Shiu Hospital(シンガポール)

対象：アーティスト、認知症高齢者、介護者、介護・医療関係者、

参加人数：47名 ※参加費はすべて無料

実施内容

- ①認知症高齢者、介護者との福祉施設でのワークショップ
②アーティストとのツールキット作成に向けたワークショップ
③関係者との振り返りレクチャー・ワークショップ



シンガポールでのワークショップ・torindo

マレーシアでの活動

開催日：2025年8月3～8日

会場：Hin Bus Depot(マレーシア ペナン)

対象：認知症高齢者、介護者、介護・医療関係者

参加人数：270名 ※参加費はすべて無料

実施内容

現地の認知症高齢者、介護者、アーティストと共に制作したダンス公演



マレーシアでの公演の様子・torindo



マレーシアでの公演の様子・torindo

舞鶴での活動

開催日：2025年9月16日～11月3日

会場：グレイスヴィルまいづる、寿荘

対象：認知症高齢者、介護施設職員、介護・医療関係者

参加人数：85名 ※参加費はすべて無料

実施内容

- ①認知症高齢者、介護者との福祉施設でのワークショップ ②アーティストとのマニュアル作成に向けたワークショップ ③関係者との振り返りレクチャー・ワークショップ



舞鶴でのワークショップ・torindo

<とつとつダンス>2025年度活動交流会(実施予定)

開催日：2026年1月24、25日

会場：水性(東京都中野)

対象：一般参加者

参加費：無料

実施内容

2025年度の活動内容を共有するための東京中野でのワークショップとレクチャー・トークセッション。

本事業で得られた成果

認知症ケアと芸術をつなぐ国際的実践モデルの確立と波及

本事業では、ダンサー・振付家の砂連尾理と一般社団法人 torindo がこれまで積み重ねてきた実践を土台に、マレーシア、シンガポール、日本(舞鶴)において、認知症のある人や高齢者、介護者、アーティストが共に参加するダンスワークショップや国際共同制作を行いました。異なる文化や社会背景をもつ認知症ケアの現場において、身体を通じた表現活動を重ねることで、参加者同士の相互理解が少しずつ深まり、芸術と福祉を横断する取り組みの可能性を具体的に示すことができました。

今年度はその集大成として、令和4年度以降交流を続けてきたマレーシア・ペナン州のバガン病院高齢者ケアセンターの認知症者や家族、介護者に加え、現地のダンサーやサウンドアーティストと協働し、国際共同制作によるダンス公演を実現しました。本公演は、マレーシア最大級の芸術祭の一つである「ジョージタウン・フェスティバル」において2日間上演され、想定を超える多くの観客が来場しました。半野外の会場という特性もあり、通りがかった人々が足を止めて鑑賞する場面も見られ、活動の内容や意義を幅広い層に自然なかたちで届けることができました。

この公演は、昨年度大阪で行ったダンス公演を基盤としながら、マレーシアの新たなアーティストの参加によって発展させたものです。これにより、これまでの事業成果を舞台作品として共有し、他者に伝えていく一つの方法を形づくることができた点も大きな成果でした。

あわせて本事業では、人材育成の観点から、海外での展開を見据えたファシリテーター向けツールキット(マニュアル)の開発に取り組みました。昨年度から参加しているシンガポールのアーティストを中心に、新たに関わるファシリテーターがワークショップを進める際の手引きとなる内容を、英語ベースのマニュアルに整理しました。開発過程で実施したシンガポールおよび日本の福祉施設でのワークショップでは、利用者や職員から前向きな反応が寄せられ、本活動への関心や手応えを確認することができました。

2022～2024年度にわたる継続的な取り組みにより、マレーシアやシンガポールでは、本活動の趣旨に共感する認知症者や介護者、福祉関係者、アーティストが着実に増えています。マレーシアでは、受入先であるバガン病院高齢者ケアセンターを中心に、本事業をきっかけとした自主的なアー

トプログラムの立ち上げや人材交流が始まっています。今年度の公演に参加した現地ダンサーが、その後も高齢者との芸術活動に継続的に関わることが決まるなど、新たな連携も生まれています。シンガポールでもツールキットを利用した人材育成の動きが展開しています。

こうした成果から、本事業は一過性の取り組みにとどまらず、地域や国を越えて人と人がつながり、継続して育っていく実践の土台を築くことができたと考えています。今後は、ツールキットを活用しながら国内外での実践をさらに広げ、芸術と福祉を結ぶ取り組みとして、より多様なかたちで展開していく予定です。



マレーシアでの公演の様子・torindo

事業実施における工夫

①成果共有のための〈活動報告〉手法(再現性の確保)

本事業では、成果共有の方法を「パフォーマンス」と「ツールキット(マニュアル)」の二層構造とし、実践の再現性を高めました。パフォーマンスでは、昨年度の大阪公演を基に、認知症のある人や介護者で行ってきたワークショップのプロセスを、日本・マレーシア両国のアーティストが舞台上で再現する形式を採用しました。これにより、蓄積してきた実践知を観客と共有すると同時に、他地域でも応用可能な公演フォーマットとして整理することができました。

また、ツールキットの作成により、ワークショップの考え方や進行手順を言語化・可視化し、新規のファシリテーターでも実施しやすい環境を整えました。

②ネットワーク形成による持続性の確保

本事業では、マレーシア、シンガポール、舞鶴の現地コーディネーターと連携し、継続的な実施体制を構築しています。定期的なミーティングを通じて事業の方向性や手法を共有・調整することで、特定の個人に依存しない運営を可能とし、事業の持続性と発展性を支える基盤を形成しました。

団体名

公益社団法人日本劇団協議会

所在地：東京都新宿区

団体URL：https://gekidankyo.or.jp/

事業URL：https://gekidankyo.or.jp/service/yatte/

事業概要

さまざまな社会課題をもつ人々を対象に、演劇によるコミュニケーションワークショップを通して他者とのつながりを持ち、生きづらさを感じることはない「共生社会の実現」を目指すのが当プロジェクトです。地域の劇場やNPO・福祉施設・教育機関などと連携し、多様な「社会包摂型プログラム」を展開しています。高齢者、不登校にある児童や青少年、在日外国人、支援学校の生徒、精神疾患をもつ方などを対象に秋田県から沖縄県まで11ワークショップにて、計104回実施しました。

本事業で実施した内容

シアターエデュケーション

開催日：2025年6月～12月(全11回)
場所：秋田県立支援学校天王みどり学園・大曲支援学校・せんぼく校(秋田県湯上市、大仙市、仙北市)
対象：特別支援学校の生徒
参加人数：延べ232名

こどもスキルアッププロジェクト

開催日：2025年8月～2026年2月(全12回)
場所：日光市公設民営学童、放課後デイサービス・トムソーヤ(栃木県日光市)
対象：学童の小学生、障害がある小中学生
参加人数：延べ208名

若者自立支援ルーム演劇プログラム

開催日：2025年6月～2026年1月(全20回)
場所：さいたまユースサポートネットさいたま市若者自立支援ルーム(埼玉県さいたま市)
対象：自立支援施設利用の青少年
参加人数：延べ163名

からだであそぼう

開催日：2025年6月～2026年3月(全19回)
場所：高齢者施設(はるびの郷、あきつの里)・地域公民館、阿佐ヶ谷児童館(東京都東村山市、杉並区)
対象：高齢者、学童の小学生
参加人数：延べ263名

演劇っぽいことやってみない？

開催日：2025年11月～12月(全2回)
場所：スーパー・エキセントリック・シアター稽古場(東京都品川区)
対象：社会参加が困難な若者
参加人数：延べ31名

コミュニケーションワークショップ

開催日：2025年10月～2026年2月(全12回)
場所：名古屋市緑児童館、フリースクールまなび場(愛知県名古屋市)
対象：居場所を必要としている小学生、青少年
参加人数：延べ78名

ワークショップ にほんごであそぼう！

開催日：2025年5月～9月(全3回)
場所：小野市うるおい交流館エクラ、加東市社福祉センター(兵庫県小野市・加東市)
対象：在日外国人の方、地域の方
参加人数：延べ64名

特別支援学校での演劇教育を活用した就労に向けた教育支援ワークショップ

開催日：2025年6月～12月(全10回)
場所：愛媛県立宇和特別支援学校(愛媛県西予市)
対象：特別支援学校の生徒
参加人数：181名

避難所における共助のあり方を考える演劇ワークショップ

開催日：2025年7月～2026年2月(全8回)
場所：沖縄県立嘉手納高校・中部農林高校・若狭小学校・名桜大学(沖縄県中頭郡・うるま市・那覇市)
対象：地域の小学生、高校生
参加人数：135名

メンタルヘルスを知るワークショップ

開催日：2025年9月～2026年2月(全5回)
場所：ソーシャルハウスあごら、市立宮城小学校(沖縄県那覇市、浦添市)
対象：精神疾患を抱える青少年、地域の小学生
参加人数：延べ141名

本事業で得られた成果

ともに関わることで得る精神疾患への理解

精神疾患当事者と地域の小学生が共に行う参加型演劇ワークショップ「メンタルヘルスを知るワークショップ」を沖縄県那覇市のNPO法人あごらびあとTEAM SPOT JUMBLEのメンバーとともに実施しました。宮城小学校での実施に向け、「困っている・落ち込んでいる友達がいる場面」を題材としたシーン創作を当事者メンバーとファシリテーターが協働し、子どもたちに提示する構成や展開を検討しました。

実施では、観ている子どもたちの意見によって展開が変わる参加型の形式を取

り入れ、当初は自由な発想も見られましたが、やりとりを重ねる中で「相手が安心する声がかけてなんだろう」「自分にはなにができるんだろう」と考える様子が見られました。疾患を抱える当事者と、子どもたちが直接関わり合うことで、「心の病」に対する偏見がやわらぎ、「心の不調は誰にでも起こりうること。そうなったときは信頼できる大人に相談する」という理解が広がりました。また、「自分にできる関わり方は何か」を考えるきっかけとなるなど、他者への向き合い方についての気づきが生まれるワークショップとなりました。当

事者アンケートでは、「自分に自信がもてるようになった」60%、「失敗をしても大丈夫と思うようになった」60%(複数回答)となり、安心して自らの経験を伝え、相互理解につながる成果が見られました。



メンタルヘルスを知るワークショップ

ワークショップが“居場所”になるとき ～つながる演劇のチカラ～

学校や社会との距離を感じている子ども・若者を対象としたワークショップの成果報告会を行いました。報告会では、不登校の小学生、フリースクールの中高校生、自立支援施設を利用する青少年、引きこもりがちな青年などを対象とした3事例が報告され、演劇を通じた場がどのように人と人をつなぎ、「居場所」となっていくのかということに参加者と共有しました。近年の孤立・孤独調査では、「孤独を感じている」は約40%にのぼり、とりわけ20～30代で孤独感が高

いという結果がでています。若者の孤独・孤立は決して特別な問題ではなく、関係や環境の中で生まれるものであり、そのため安心していられる場や人とのつながりが重要とされています。講演では、子ども・若者の孤立の現状や、なぜ孤立が生まれるのか、社会の中でそれを阻む要因についてお話いただきました。特に、支援が途切れる18歳以降の状況の厳しさを認識するとともに、演劇を通じて安心して過ごせる居場所が生まれていることの意義を再確認しました。



コミュニケーションワークショップ



子どもスキルアッププロジェクト



からだであそぼう



ワークショップ にほんごであそぼう！

事業実施における工夫

安心して参加できる場づくりの工夫

参加者が安心してその場にいられることを最も大切にし事業を行いました。実施前には、協働団体や支援員、地域の関係者と打ち合わせを行い、参加者の生活状況や心身の状態、障害特性、宗教的背景、日本語の理解度、配慮が必要な点などを事前に共有しています。言葉でのやり取りが難しい場合には、動きや表情、絵や掲示物を用い、誰も取り残されない進行を心がけています。また、名札、事前の動画メッセージを活用し、初参加の方や久しぶりの参加でも安心して関われる雰囲気をつくりました。

変化を引き出し、次につなげる関わり

ワークショップ中は、参加者一人ひとりの反応や関わり方を丁寧に観察し、必要に応じて進行や声かけを調整しました。言語表現が難しい場合や、日本語に不安のある参加者に対しては、動きや表情、絵や身体表現を用いた関わりを取り入れ、理解しやすい進行を工夫しています。終了後には必ず協働団体やスタッフと振り返りの時間を設け、進行や時間配分、関わり方について課題を整理し、次のプログラムに反映しています。

新国立劇場主催演劇公演等における観劇サポートと関連事業

団体名

公益財団法人 新国立劇場運営財団

所在地：東京都渋谷区

団体URL：https://www.nntt.jac.go.jp/

事業URL：https://www.nntt.jac.go.jp/guide/accessibility/

事業概要

新国立劇場主催の演劇公演にて、視覚・聴覚に障がいのあるお客様へ向けた舞台情報の保障として、各種サポートを無料で提供しています。障がいの有無に関わらず、良質な舞台を楽しめる機会の拡充を目指し、チケット購入から来場、観劇、帰宅に至る全工程を支援しています。本年度は新たに演劇研修所公演でのサポートを実施し、次世代の人材育成を図りました。また、セミナー「Open Theatre Project」を開催し、当劇場のノウハウを広く関係者へ共有することで、業界全体のアクセシビリティ向上を目指しました。

本事業で実施した内容

視覚に障がいのある方向けの観劇サポート

開催日：①「ザ・ヒューマンズ」：2025年6月25日、28日
②「焼肉ドラゴン」：2025年10月13日、16日
③「スリー・キングダムス」：2025年12月11日、13日

場所：新国立劇場小劇場、中劇場

対象：当該日の公演を鑑賞されるお客様

参加人数：105名（うち障がいをお持ちの方45名）

参加費：無料（別途公演チケットが必要）

実施内容

ア)公演前の舞台説明会開催

舞台上がって、本番で使用する大道具や小道具に触る体験をご提供

イ)「声のプログラム」、また点字版あらすじのご提供

ウ)触る模型の作成および模型を用いた舞台セットの解説

エ)劇の進行と同時に物語を理解できるリアルタイム音声解説

オ)最寄り駅改札口と劇場間の案内係による付添



視覚：舞台説明会『焼肉ドラゴン』舞台上での説明

聴覚に障がいのある方向けの観劇サポート

開催日：①「ザ・ヒューマンズ」：2025年6月20日、21日
②「焼肉ドラゴン」：2025年10月23日、24日
③「スリー・キングダムス」：2025年12月11日、13日

場所：新国立劇場小劇場、中劇場

対象：当該日の公演を鑑賞されるお客様

参加人数：24名（うち障がいをお持ちの方14名）

参加費：無料（別途公演チケットが必要）

実施内容

ア)ポータブル字幕表示機貸出による、文字化したセリフ、音響情報の送出

イ)会場内の掲示および案内サインの強化

ウ)手話通訳、要約筆記者の配置

エ)手話、字幕入の宣伝動画作成

オ)あらすじのご提供

カ)電子台本の貸出し

演劇研修所における観劇サポートおよび教育プログラム

開催日：2025年6月6日、7月10日、8月2日

場所：新国立劇場 演劇研修所、新国立劇場小劇場

対象：演劇研修生、当該日の公演を鑑賞されるお客様

参加人数：教育プログラム受講者延べ46名、サポート参加者8名（うち障がいをお持ちの方4名）

参加費：無料

実施内容

ア)研修生を対象とした、視覚障がい者とのコミュニケーションを学ぶワークショップおよびレクチャーの実施

イ)研修生による『触る模型』製作および公演での視覚障がい当事者の方の案内誘導（朗読劇『少年口伝隊一九四五』）

ウ)日英の専門家による、劇場アクセシビリティに関するトークイベントの開催

セミナーイベント「Open Theatre Project」

開催日：2025年12月13日、14日

2026年1月18日

場所：新国立劇場 中劇場、オペラパレスホワイエ

対象：劇場・音楽堂などの関係者、舞台芸術の企画・制作・運営関係者、および関心のある一般の方

参加人数：12月13日18名、12月14日37名

1月18日44名

参加費：無料

実施内容

ア)字幕・音声ガイド等の観劇サポート体験会

イ)当劇場の実例紹介や、障がい当事者の方を交えたパネルディスカッションを行うセミナーの開催

ウ)（一社）日本舞台美術家協会との共催による「触る模型」の取り組みに関する国際的な活動報告および知見共有



『Open Theatre Project』12月13日の開場前舞台説明会見学の様子

本事業で得られた成果

専門家との連携と「核心」を伝える言語化技術の継承による、質の高い情報保障の提供

視覚障がい者向けサポート（舞台説明会、音声ガイド等）では、限られた時間で真に必要な事項を厳選し、的確に言語化する技術を重視しています。各担当者は稽古や本番を何度も見学し、制作関係者への取材を重ねて表現を磨きました。舞台美術を触覚で把握する「触る模型」は、演出意図を効果的に伝えるものであり、参加者からも「舞台の奥行きが手に取る

ようにわかった」と高く評価されました。聴覚障がい者向けサポートでも、直感的に理解しやすい字幕（文字の太さ、色、役名略記の工夫等）の改良を継続しました。これらの質を担保するため、本番前のリハーサルに当事者が参加し、そのフィードバックをもとにブラッシュアップを行うプロセスを本年度も徹底しました。



視覚：『焼肉ドラゴン』触る模型

研修所公演でのサポート実践を通じた、鑑賞サポートの担い手育成と環境整備の推進

本年度の新たな取り組みとして、演劇研修所公演『少年口伝隊一九四五』において、将来の演劇界を支える研修生自身が観劇サポートの運営に携わりました。実施に先立つワークショップでは、ブラインド体験等を通じて障がい当事者が直面するバリアや必要な情報を深く理解し、当事者の視点に立ったサポートのあり方を学びました。実際の公演では、研修生が自ら

段ボールで「触る模型」を製作し、当事者のお客様の案内誘導を担当しました。現在、当劇場の舞台説明会を支えるチームは主に研修所の修了者で構成されています。本年度、研修カリキュラムに本実践を組み込んだことは、障がいへの深い理解を持つづくり手を継続的に輩出し、新国立劇場のみならず全国で質の高い情報保障を支えていくための、確かな人材育成の場

となりました。



演劇研修所でのワークショップの様子

「Open Theatre Project」での知見共有による、身近なところから始める観劇サポートの推進

これまで蓄積してきたノウハウを外へ開き、共に考える場として「Open Theatre Project」を始動しました。12月の第1回イベントでは、「最初から完璧を目指すのではなく、まずは現場でできる一歩から始める」というコンセプトを掲げ、各劇場がそれぞれの状況に応じた無理のない形で一歩を踏

み出すためのヒントを共有できました。また1月には、継続してきた「触る模型」の取り組みを国外の舞台美術関係者に紹介した際の反響や、現地での対話から得られた視点を報告しました。これらの活動により、バリアフリーを制作の延長線上にあるものとして捉え直す機会を提供し、業界内での緩

やかな知見の共有と意識の醸成に寄与しました。



『Open Theatre Project』12月14日の講演の模様

事業実施における工夫

ポイント

第一に、「当事者の実感」を指針とした、重層的な情報収集と検証です。音声ガイド等の台本作成において、稽古場への訪問に加え、最新の稽古映像の共有やテキレジ（台本修正）の細かな提供を受けるなど、制作現場と密な連携ラインを確保する工夫をしました。その上で、本番前の当事者リハーサルでのフィードバックを反映させ、表現を磨き上げています。この「制作現場との連携＋当事者検証」のプロセスは、情報の精度と安心感を高める上で極めて有効なノウハウとなっています。

第二に、「Open Theatre Project」を通じた、実践知の段階的な共有です。成功事例のみならず、具体的な準備手順や直面した課題をありのままに共有する工夫を凝らすことで、他団体がそれぞれの状況下でアクセシビリティに取り組む際の心理的ハードルを下げ、業界全体で持続可能な一歩を踏み出すための対話の場を創出しました。

舞台手話通訳者の人材育成および実践普及、観劇サポート啓発

団体名

特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

所在地：東京都世田谷区

団体 URL：https://ta-net.org/

事業 URL：https://ta-net.org/symposium/2025/

事業概要

舞台手話通訳導入に関わる専門人材の育成や観劇サポート充実に向けた啓発を行い、聴覚障害者を取り巻く創造環境の整備に寄与する。

取組1 シンポジウム事業

取組2-1 観劇サポート手話通訳出前講座

取組2-2 舞台手話通訳者・手話監修者集合研修

取組3-1 啓発(大会等でのブース出展)

取組3-2 啓発(SNS、メルマガ、アクセシビリティ公演情報サイトでの発信等)

取組3-3 観劇アクセシビリティガイドブックの大幅改訂

本事業で実施した内容

取組1 シンポジウム事業

開催日：2026年2月7日(土)、8日(日)

場所：東京大学先端科学技術研究センター

対象：会員及び観劇アクセシビリティに関心のある方

参加人数：分科会62名、全体会71名

実施内容

設立当初からの事業と文化庁委託事業を振り返り、『観劇アクセシビリティとは何か』を共に考える機会の創出。

・1日目：分科会(連携、実践、啓発をテーマにレポート発表とディスカッション)

・2日目：全体会(今年度の事業報告、分科会を踏まえたパネルディスカッション、観劇アクセシビリティ機器の展示)

取組2-2 舞台手話通訳者・手話監修者集合研修

①集合研修 in 岡山

開催日：2025年12月14日(日)

場所：岡山国際交流センター

対象：手話学習者、手話通訳者、ろう者、難聴者、演劇や劇場関係者

参加人数：50名

実施内容

「舞台手話通訳…どうということじゃろう?」をテーマに、劇作家(岡山県在住)と当団体理事長によるトーク、絵本を用いた翻訳ワークショップ。

②集合研修 in 岩手

開催日：2026年1月17日(土)、18日(日)

場所：イーストピアみやこ

対象：宮古市在住のろう者、手話学習者、演劇関係者

参加人数：106名(研修40名、観客66名)

実施内容

「ろう者が見たくなる演劇とは?」をテーマに、講演、作品づくり、発表会、アフタートーク。

③集合研修 in 札幌

開催日：2026年2月15日(日)

場所：札幌市中島児童会館、札幌市こども人形劇場こぐま座

対象：手話サークル員、通訳者、ろう者

参加人数：会場33名、オンライン23名

参加費：会場1,000円、オンライン500円

実施内容

「やまびこ座・こぐま座のインクルーシブ舞台の取り組み〜これからの舞台芸術を考える上で〜」、「舞台手話通訳が出来るまで」をテーマとした講演、人形劇の舞台手話通訳に挑戦するワークショップ。

取組2-1 観劇サポート手話通訳出前講座

①

開催日：2025年12月12日(金)

場所：沖縄県総合福祉センター

対象：沖縄県登録手話通訳者

参加人数：25名

実施内容

「アクセシビリティ公演における手話通訳」をテーマに講演とロールプレイ

②

開催日：2026年1月10日(土)～12日(月・祝)

場所：金沢歌劇座

対象：全国聴覚障害者情報提供施設協議会(第2ブロック)及び石川県登録手話通訳者

参加人数：54名

実施内容

講演とロールプレイ、課題の共有、及び文化施設におけるアクセシビリティについての情報提供とディスカッション。

取組3-1 啓発(ブース出展)

①第73回全国ろうあ者大会 in いわて

出展日：2025年6月13日(金)～15日(日)

②第29回全国中途失聴者・難聴者福祉大会 in 函館

出展日：2025年11月1日(土)、2日(日)

③第37回東京都中途失聴・難聴者の集い

出展日：2026年2月15日(日)

④第55回耳の日記念文化祭(東京都)

出展日：2026年2月21日(土)、22日(日)

取組3-2 啓発(情報発信)

・SNS、メルマガ、アクセシビリティ公演情報サイト運営：通年

・啓発チラシの配布：12,000枚

取組3-3 観劇アクセシビリティガイドブック

作成部数：3,000部

実施内容

2018年初版、20年一部改訂した「観劇サポートガイドブック」を名称変更し、大幅改訂。

本事業で得られた成果

実践や課題を踏まえ、『観劇アクセシビリティ』について今後の在り方を提示

6年ぶりに成果報告会(シンポジウム)を対面開催し、『観劇アクセシビリティとは何か』を様々な立場から共に考える機会を創出しました。

「工夫」や「課題」を共有し、今後の

在り方や指針づくりのきっかけとなりました。アーカイブ配信や報告集作成も行い、遠方にも情報を届け、課題である地域格差解決の一助となることができました。

また、ガイドブックを現状に合わせ大幅改訂し、今後の指針につながる制作物を提供できました。

報告書作成、アーカイブ配信を行い、今後につながる機会も提供しました。

地域の実情と課題に合わせたオーダーメイドの研修実施

全国聴覚障害者情報提供施設協議会と協働し、近年増えている「観劇アクセシビリティ」への対応について「各地

域の実情や課題」をヒアリングし研修内容を組み立て、それぞれのニーズに合わせて実践形式で実施できました。

各地域で継続するために「提供」ではなく「伴走」での研修実施

実行委員会形式とし、一方的な提供ではなく、実行委員会が自身の希望、地域のニーズや活動内容に適した内容で研修

を企画し、実施することができました。事務局が伴走し、今後地域で開催していくために必要なノウハウや地域の劇場

等との繋がりを提供することで、「観劇アクセシビリティ」の広がりにもつながりました。

全国での情報発信と情報へのアクセスのしやすさの提供

当事者団体主催の大会でのブース出展、SNS、メルマガ、サイト運営等で情報発信し、正確さは元より、読者が「情報への辿り着きやすさ」を年間

を通して意識し実施しました。

また、観劇アクセシビリティに取り組んでいる団体に対し、サイトへの情報掲載の促しや頻回な情報発信を行

い、適切なタイミングで当事者へ情報が届けることができ、「情報発信」や「情報開示時期」の在り方を提示しました。



観劇サポート手話通訳出前講座 in 沖縄 (ロールプレイ)



舞台手話通訳者・手話監修者集合研修 in 岡山 (グループワーク)



第73回全国ろうあ者大会 in いわて (アンケート結果)



第29回全国中途失聴者・難聴者福祉大会 in 函館 (みんなの声)



第73回全国ろうあ者大会 in いわて (ブースの様子)

事業実施における工夫

＜作品を届ける取り組みから、次の一步へ＞

当団体は観劇サポートについての様々な相談対応や人材派遣、協働等の実績があります。

ここ数年、観劇アクセシビリティ付き公演の増加と喜ばしい状況の一方で、「継続する難しさ」や「裾野を広げることの必要性」を感じています。また、東京等の都市部と地方都市との格差は広がっており、「各地域が抱える課題」「継続した取り組み」を意識し、事業の構築を行いました。

全国に舞台手話通訳者や手話監修者がいること、そして各地域の当事者団体との繋がりを強みとし、共に考え、ニーズに沿った研修や発信、啓発を行うことができています。

国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動 推進事業Ⅱ～作品の制作・発信と国際交流～

団体名

社会福祉法人トット基金 日本ろう者劇団

所在地：東京都品川区

団体URL：http://www.totto.or.jp/

事業概要

初回のパリ大会より100年目となる「東京2025デフリンピック」と、文化庁本事業により準備をすすめてきた「第一回東京国際ろう芸術祭」が開催された2025年、日本のデフアーティストによる質の高い演劇作品を世界に発信しました。併せて手話狂言の映像ドキュメンタリーを製作、公開。またろう・重複障害者の作品を「ギャラリー・トット」で展示し、芸術活動のすそ野を広げました。

さらに国内外のろう者が手話で集い、安心して対話できるプラットフォームを目指した「国際コミュニケーション・サロン」を継続し、交流の輪を広げています。

本事業で実施した内容

①デフリンピック・スクエア(選手村)特別公演「世界に咲く笑いの華～手話狂言」

開催日：2025年11月14日(金)・25日(火)マチネ・ソフレ 計3回公演

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 小ホール

対象：プレス(14日)/デフリンピック参加選手・役員、一般来場者

【公演内容】

演目：『墨塗』

解説：五十嵐由美子、江副悟史

出演：砂田アトム、長谷川翔平、鈴まみ

実施内容

英語字幕を付し、聞こえる人と聞こえない人のみならず国籍の違いを超えて誰もが楽しめる日本の伝統文化を世界に発信。

②第一回東京国際ろう芸術祭参加公演「100年の眠り」

開催日：2025年11月8日(土)～9日(日) 4回

場所：座・高円寺1

対象：一般観客、文化芸術関係者/秋篠宮皇嗣妃殿下ご臨席

実施内容

演出：小野寺修二(カンパニーデラシネラ)
日本ろう者劇団/デフパペットシアター・ひとみ/カンパニーデラシネラ 合同創作

出演：数見陽子、中江央、榎本トオル、崎山莉奈、雪境、那須映里、守屋水結、小野寺修二

概要：本事業において2019年よりワークショップ等を重ねてきた集大成として、身体表現による質の高い演劇作品を、第一回東京国際ろう芸術祭において発信しました。(完全無音)

③手話狂言映像ドキュメンタリーの製作・発信

仕様：総尺80分、カラー 日本語・英語字幕付

実施内容

2024年手話狂言パリ公演を中心に、デフリンピック東京大会の開催に合わせて日本が世界に誇る手話狂言のドキュメンタリー作品を製作し、一般公開しました。

出演：黒柳徹子/三宅近成/江副悟史/
井崎哲也ほか

公開日：2025年11月28日

場所：映画美学学校試写室

④国際コミュニケーション・サロン及び「ギャラリー・トット」の開設

【ギャラリー・トット】

開催日：2025年11月10日(月)～11月21日(金)

場所：トット文化館 2階

実施内容

展示：公募および選出された合計47点の美術作品を展示。

特別企画：世界のろう文化や作品販売をテーマとしたトークイベントを計2回実施

登壇者：【11月10日】デイビッド・ド・カイザー氏、小倉和夫氏、栗栖良依氏
【11月16日】小笠原新也氏、八木道夫氏、森せい子氏

情報保障：日本手話、国際手話、UDトーク
☆記録映像は、日本語字幕・手話ワイプ付きで制作予定。

【国際コミュニケーション・サロン】

概要：国内外のろう者が手話で集い、対話できるプラットフォームとして開設しました。

本事業で得られた成果

①日本のろう文化の世界発信

デフリンピック開会式では、日本ろう者劇団代表の江副悟史が、秋篠宮両殿下、同内親王殿下並びに親王殿下ご臨席のもと、国歌「君が代」を手話で披露しました。これにより手話の

持つ表現力の豊かさと、すぐれた言語性をアピールしました。また一般社会に手話の魅力を示し、印象付けることができました。

手話狂言公演では、40年超におよ

ぶ狂言師の指導と演者たちの研さんにより、日本の古典芸能の素晴らしさをあますところなく世界に発信することができました。

②劇団の枠を超えた共同制作と人材育成

小野寺修二演出「100年の眠り」では、日本ろう者劇団、デフ・パペットシアターひとみ、カンパニーデラシネラ

の3団体が連携。劇団の枠組みを超えたらう者と聴者のコラボレーションができました。またろう児の出演者を

迎え、次世代の育成にもつとめました。

③手話狂言映像ドキュメンタリーの製作・一般公開

40余年におよぶ手話狂言の活動を映像にまとめ、手話やろう者の世界を

知らない観客層や映像関係者に披露しました。令和8年度以降も有効活用

していきたいと考えています。

④手話のプラットフォーム「国際コミュニケーション・サロン」

デフリンピック東京大会において明らかになった国際手話のできる人材の不足をふまえ、日本ろう者劇団の劇団員が講師をつとめる手話教室に

併設して、国際手話教室を開講、国際手話、アメリカ手話、日本手話などを駆使してコミュニケーション能力を高める集いの場としました。

国際交流に積極的なろう者たちが楽しく集える国際間のプラットフォームとして、国内外に開放していきたいと考えています



手話狂言「初の会」蟹山伏 © Totto Foundation



手話狂言「初の会」井杭 © Totto Foundation



手話狂言「初の会」成上り © Totto Foundation

事業実施における工夫

多言語及びクリエイティブな情報保障

日本手話・国際手話・フランス手話・日本語字幕・英語字幕・手話ワイプなど、多言語によるアクセシビリティを各事業において確保しました。また各事業において専門性の高い情報保障(手話狂言公演・映像➡国立能楽堂所蔵英語字幕の借用など)につとめました。

プロの音楽家を介在したインクルーシブ体験と地域ネットワークの構築

団体名

公益財団法人新日本フィルハーモニー交響楽団

所在地：東京都墨田区

団体URL：https://www.njp.or.jp

事業概要

本事業は、新日本フィルのメンバーが特別支援学校や福祉施設などを訪問し音楽体験を届け、地域ネットワークを構築することを目的としています。

これまで拠点である墨田区を中心に東京都内および伊豆地方の特別支援学校、小中高等学校で活動を行ってきました。昨年度からは筑波技術大学、特定非営利活動法人東京都中途失聴・難聴者協会と連携し、視覚障がい者・聴覚障がい者に向けた活動も開始しました。

さらに今年度は公益財団法人群馬交響楽団とも連携し、群馬県内の特別支援学校へと活動を広げています。

今後も本活動を通じて、音楽が多くの方々の心に潤いと生きる力をもたらすよう、継続的な実践と検証を重ね、伝達スキルの向上を図っていきます。

本事業で実施した内容

【取組1】

開催日：2025年6月9日(月)～6月10日(火)

場所：南伊豆町立南中小学校体育館、
南伊豆町立南伊豆東小学校

対象・参加人数：南中小学校、南伊豆東小学校 全校生徒
合計約400名

(計4回の授業を開催、1回約100名参加)

参加費：無料

実施内容

NPO 法人豆游義塾が教育委員会および参加校との調整を行い、今期は東伊豆町、下田市を訪問しました。継続して参加している学校では、生徒たちの楽器への理解も年々深まっています。

今回の訪問メンバーはフルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの奏者4名です。毎回1つの楽器に焦点を当てており、一昨年はチェロ、昨年はオーボエ、今年はフルートを紹介しました。

体験コーナーではプラスチック製の横笛を用い、希望する生徒に音出し体験を実施しました。鑑賞コーナーではモーツァルトのフルート四重奏曲やジブリ作品など、ジャンルを越えた名曲を演奏しました。



【取組1】三鷹市北野ハピネス

【取組2】

開催日：2025年8月4日(月)

場所：三鷹北野ハピネスセンター(東京都三鷹市)

対象：障がい者就労支援施設の利用者、ご家族、教職員

参加人数：1公演約60名×2回

募集定員：特に無し

参加費：無料

実施内容

フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ各1名の4名で訪問し、60分のワークショップを2回実施しました。内容は鑑賞中心で、この施設では毎年開催しており利用者の方々に親しまれています。

クラシック、ポップス、童謡など幅広いジャンルを演奏しました。ジブリ音楽では映画を知っている方々が特に盛り上がり、会場は大きな拍手に包まれました。普段は静かに過ごすことが難しい方々も、集中して音楽に耳を傾けていました。後日施設からは「目の前で演奏される音を直接感じる体験の素晴らしさを改めて実感した。」との感想をいただきました。

【取組3】

開催日：2025年8月4日(月)

場所：多摩カルチャーセンター・スタジオクイン(東京都多摩市)

対象：東京都中途失聴・難聴者協会に属する中途失聴者

募集定員：20名

参加費：1,000円(要約筆記・ヒアリンググループ設置費)

実施内容

フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ各1名の4名で訪問し、45分×2回のワークショップを開催しました。鑑賞中心の内容です。本ワークショップは前年度に開始したもので、今年度は「新しい「聴こえ」のための集い」と題し発展させました。会場にはスクリーンを設置し、4名の要約筆記者が演奏者の説明をリアルタイムで入力し、文字を投影しました。ヒアリンググループも設置しています。

中途失聴・難聴者の聴こえ方は個人差が大きいので、ゆったりした曲、速い曲、低音中心、高音中心など音の特徴を分けた選曲を行いました。参加者の中には普段からYouTubeで音楽を聴いている方やコンサート参加を目標にしている方もおり、生演奏による音の違いを体験する有意義な機会となりました。本企画が社会参加のきっかけになることを期待しています。

本事業で得られた成果

楽器を知ることによって音楽を立体的に体験する

本事業では楽器体験や電子黒板による解説を通して、音楽鑑賞をより立体的な体験にする工夫を行っています。

楽器体験では鉛筆によるヴァイオリン弓体験、ストローによるオーボエ・クラリネットの吹き口体験、横笛によるフルート体験、さらにハーブや弦楽

器の演奏体験を実施しました。音が出た瞬間、生徒たちは驚きと喜びの表情を見せてくれました。

鑑賞ではクラシック作品を中心に、背景説明やクイズを交えながら演奏を聴いてもらいました。楽器体験と解説が理解を助け、音楽が「立体的な体

験」として記憶に残った様子でした。

今後はこの事業で得たノウハウをオーケストラ公演にも活かし、より多くの方に音楽の魅力を伝えていきたいと考えています。

視覚・聴覚障がい者への取り組みの第一歩

昨年度開始した2つのワークショップを発展させることができました。

①筑波技術大学の視覚障がい・聴覚障がい学生向けワークショップ

②東京都中途失聴・難聴者協会の中途難聴者向けワークショップ

①視覚障がいの方には楽器に触れていただき、形や大きさの違いと音色の関係を体験していただきました。聴覚障がいの方には音を視覚化するシステムを用い、視覚的に音楽を感じて

もらいました。

②中途難聴者の方には人工内耳、補聴器、ヒアリングループなどを活用して音楽を体験していただきました。また要約筆記により演奏者の説明をスクリーンに表示し、理解を助めました。

今後も筑波技術大学および東京都中途失聴・難聴者協会と協議を重ね、障がい者の社会参加につながる企画として発展させていきます。



筑波技術大学



【取組3】中途難聴者協会 新しい聴こえのための集い



【取組1】南中小学校

事業実施における工夫

弊団はオーケストラであり、多様な楽器を活かした編成で訪問できることが強みです。毎年異なる楽器を紹介することで、訪問先の方々に新しい音との出会いを提供できます。

また墨田区の小中学校や福祉施設で毎年室内楽コンサートを行っており、楽員は様々な立場の方に音楽を伝えるノウハウ(プログラム構成や言葉の工夫)を蓄積しています。

新日本フィルハーモニー
交響楽団の皆さんへ



立花香嬢の森小学校なのはな学級一同



墨田区内のアウトリーチ 墨田区立 立花香嬢の森小学校 アウトリーチの後で記念写真

団体名

株式会社朝日新聞社

所在地 東京都中央区

団体 URL <https://www.asahi.com/corporate/>事業 URL https://www.asahi.com/sdgs/brand/voice_power/

事業概要

声のカプロジェクトは、視覚障害のある高校生をはじめとした子どもたちが、声による伝え方の多様性を学ぶことで、自分自身の可能性を再発見し将来の選択肢が広がることを目指しています。

視覚障害のある人が就く主な職業は、事務職や鍼灸師、音楽関係等が挙げられます。障害のない人と比べて、圧倒的に職業の選択肢が少なく、視覚障害のある子どもたちの将来の夢は限られているのが現状です。もちろん、見えない・見えづらいことによって目指すことが難しい仕事がある一方、社会の理解不足で「できるのに、できないと思われている仕事」がたくさんあるのではないのでしょうか。

声優やアナウンサー・ラジオパーソナリティ等、声の表現を担う職業は、まさにそのひとつであると思っています。点字や拡大文字等の原稿を用意する等、必要なフォローと工夫で、「できる仕事」になり得るのではないかと。そう考え、声優という職業体験を子どもたちにしてみたい、自分の表現する力に気付いてもらおうと本プロジェクトを始動しました。

声の表現のプロである人気声優を、講師として全国の盲学校に派遣し、特別出張授業を開催。声の演技の基礎体験を通じて、気持ちを声にのせることの大切さやその方法を学んでもらいます。自身の表現する力に気付くきっかけを創出します。

また、視覚障害のある高校生とない高校生約10名が参加するインクルーシブな集中講義を開催し、声の表現に「視覚障害は障害とならない」とことへの気づきや相互理解の場を創出いたします。

そして、プロジェクト全体を通した重層的な情報発信を、ウェブ・PODCAST、新聞媒体等のクロスメディアで行い、社会の視覚障害への理解、リテラシーの向上につなげます。

本プロジェクトを通じて、アニメが好きな視覚障害のある子どもたちが、見えないからとあきらめるのではなく、「いつか私も声優になりたい」と自由に夢を抱ける世の中を目指していきたいです。

- ①人気声優による盲学校への特別出張授業(全国3箇所)
- ②視覚障害児と晴眼児の高校生 約10名による「インクルーシブ集中講義」開催
- ③プロジェクト全体を通した重層的な情報発信

本事業で実施した内容

①人気声優による盲学校への特別出張授業 ②インクルーシブ集中講義

日程	開催校	参加生徒数	内容
2025/8/29(金)	筑波大学附属視覚特別支援学校	高等部1～3年生 5名	古川登志夫さんによる 特別出張授業 基礎編1コマ、応用編1コマ
2025/10/28(火)	茨城県立盲学校	高等部8名、中等部3名、 小学部1名	三上枝織さんによる 特別出張授業 基礎編1コマ、応用編1コマ
2025/12/22(月)	栃木県立盲学校	高等部7名、中等部5名 小学部8名、専攻科6名	山口由里子さんによる 特別出張授業 基礎編1コマ、応用編1コマ
岩佐財団助成 2026年2月	石川県立盲学校	中学部3人(中1:1名、 中2:1名、中3:1名)、 高等部6人(高3:2名、高2:4名)	岩田光央さんによる 特別出張授業 基礎編1コマ、応用編1コマ
岩佐財団助成 2026年2月	愛知県立名古屋盲学校	41名(小学5、6年生4名、 中学生15名、高校生22名)	水田わさびさんによる 特別出張授業 基礎編1コマ、応用編1コマ

<インクルーシブ 集中講義>

2026/1/31(土) 2/1(日)	・筑波大学附属視覚特別支援学校 ・筑波大学附属高等学校	高等部1～2年生 全10名	ラジオドラマの共同制作を行うインクルーシブ集中講義。 講師:古川登志夫さん&柿沼紫乃さん
------------------------	--------------------------------	---------------	---

③情報発信

- プロジェクトウェブサイト https://www.asahi.com/sdgs/brand/voice_power/
- 朝日新聞PODCAST 集中講義で共同制作したラジオドラマを、2026年3月に配信
- 朝日新聞 プロジェクトの今期総括として事業全体をまとめた広告を、2026年3月に掲載

本事業で得られた成果

自分の想いを声にのせて相手に届ける。その力は、子どもたちが生きていく上での武器になる。

この「声の力」プロジェクトは、視覚障害のある中学生・高校生たちが、声による伝え方の多様性・相手の心に届く伝え方を学ぶことで、自分自身の可能性を再発見することを目指し、2019年度に始動いたしました。声優プロダクションの最大手である青二プロダクションおよび声優養成所の最難関である青二塾の全面協力と、声優専門誌「声優グランプリ」編集部

のバックアップのもと、第一線で活躍する声優数名が講師として参加。ドラえもんやピッコロなど、誰もが知るアニメキャラクターが授業をしてくれるということは、視覚障害のある子どもたちにとって、想像以上にインパクトのある経験となり、著名な声優が自分の気持ちを声で相手に届ける方法を

教える授業は、子どもたちの一生物の財産になったと確信しています。

2023・2024年度は残念ながらプロジェクトを休止しておりましたが、全国の盲学校から復活を望む声を多くいただき、2025年度に再び助成をいただき再始動することができました。

今年度盲学校をまわるなかで、高校生の女の子が話してくれました。「小学生のときにYouTubeで声のカプロジェクトを知って、ずっとうちの学校に来てほしいと思っていました。今回授業を受けることができ、一生の宝物になりました」。

そして、担当の先生が興奮ぎみに話してくれました。「実は今回の参加生徒のなかには場面緘黙症の子どもがいました。声優さんのすばらしい

指導で、彼が感情をこめたセリフをしゃべることができ、本当によかった」。

子どもたちの感受性豊かな成長の過程に、本プロジェクトがまた関わることができ、再び助成をいただくことができたことに感謝しております。声による表現を学ぶことで、生徒ひとりひとりが「想いを相手に伝え、人と人のつながりをつくる」という声の力と

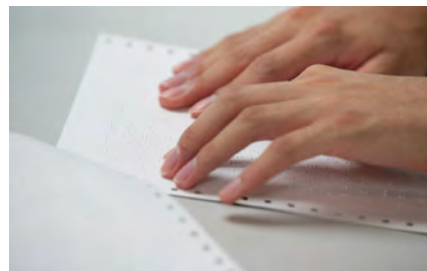
自分の可能性に気づくきっかけを創出することができました。今後も本プロジェクトを通じて、子どもたちが自分の想いを伝える豊かな表現を学び、自信を持って人生で自分の個性を発揮することができるようになることを目指していきます。



筑波大学附属視覚特別支援学校での授業 声優・古川登志夫氏が指導



茨城県立盲学校での授業 声優・三上枝織氏が指導



授業では点字や拡大文字等、生徒の状態にあわせて用意



筑波大学附属視覚特別支援学校での授業 セリフ読み挑戦している様子



茨城県立盲学校での授業 先生からの指導を熱心にメモする様子

事業実施における工夫

出張授業の授業計画のひな型を踏まえ、各学校のニーズに合わせて、プログラムをカスタマイズしています。具体的には、小学生・中学生の合同参加や、重複障害の生徒も一緒に学ぶことができる授業の組み立て等です。

また、集中講義では学校外のスタジオが会場となり、視覚障害のある方の移動負担を減らすため、盲学校の参加生徒については、車での送迎を行いました。

ミュージアム運営に資する社会包摂・アクセシビリティ研修の開発と普及

団体名

独立行政法人国立美術館

所在地 東京都千代田区

団体 URL <https://www.artmuseums.go.jp/>事業 URL https://ncar.artmuseums.go.jp/events/d_and_i/post2025-2682.html

事業概要

本事業では、独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター (NCAR) のナショナルセンターという機能を活かし、全国のミュージアム等で実施が可能な、社会包摂に資する文化芸術活動の拡充を促進する研修の教材の開発と普及(提供)を行う。本事業は、法改正や定義の変更の内容に準拠し、ミュージアムに関わる者が当該の法改正の理解を深め、社会包摂に資する活動を実際の現場に具体的に取り入れて、ミュージアム運営に反映させていくための研修の開発と普及を行う。

本事業で実施した内容

ミュージアム運営のためのアクセシビリティ研修

実施内容

ミュージアムで働く職員や関係者がアクセシビリティについて学ぶ研修。今後のミュージアム運営において求められるアクセシビリティ・社会包摂の取り組みを始めるために必要なキーワード「合理的配慮」と「情報保障」を軸に、学びを深められる内容となっている。オンライン学習システムを通じて動画教材により、基礎的な内容を学ぶ「eラーニング」と、対面にて関係者と共に議論する「対面ワークショップ」の2段階のプログラムを用意した。

受講対象者：・館長、副館長、課長等の経営監督者、管理職

- ・自治体等の行政系職員
- ・管理、総務等の事務系職員
- ・学芸員、司書等の専門職系職員 等

※ミュージアムの運営主体と、委託・連携等をしている団体(例:受付看視、レストラン・ショップ等の運営事業者や市民団体等)含む

1) 「eラーニング」プラン

実施内容

オンラインで受講可能な学習管理システム(LMS)に団体として登録、動画視聴と振り返りフォームへの回答をもって受講完了となる。「館長含む運営監督者コース」と「職員スタッフ等コース」の2種類を設け、職種に応じて選択可能とした。また、他館の担当者同士で交流できる「オンライン交流会」も開催した。

場 所：オンライン学習システム(LMS)

定 員：各期500名

参加費：無料

参加人数：3つの受講期間に分けて募集をかけた。

第1期：2025年10月10日～11月28日

・登録件数：17館／受講者人数：429人

第2期：2025年11月4日～12月26日

・登録件数：14館／受講者人数：303人

第3期：2025年12月5日～2026年1月30日

・登録件数：17館／受講者人数：593人



eラーニングプラン「館長等運営監督者層コース」

2) 「eラーニング+対面ワークショップ」プラン

実施内容

eラーニングの受講に加え、組織内で議論を深めたい団体が申込みことができるプラン。NCARより講師を現地へ派遣し、ワークショップ型の対面研修を実施した。

場 所：申込みがあった各ミュージアム

定 員：10件／各回20～50名

参加費：無料(講師1名分の旅費と会場の確保を負担)

参加館：・12月：三重県総合博物館、山形美術館、横浜市芸術文化振興財団

・1月：(北海道)むかわ町穂別博物館、水戸芸術館、富山県美術館、川崎市市民ミュージアム

・2月：福岡県立美術館(新美術館建設室)、国立西洋美術館、神奈川県立歴史博物館

参加人数：最小15～最大45名

本事業で得られた成果

オンライン学習システムの活用により、全国約50カ所から申込みがあり、多様な職種・職員が参加できた

当初は20団体、500名程度の受け入れを想定していたが、受講期間を3つに分けることで1000名以上の受講者を受け入れることが可能となった。職員数5名以下の小規模な館から100名近くの大規模な館まで、多様な

館種に参加してもらった。ミュージアム内外問わず、博物館運営に関わる幅広い層に対し、アクセシビリティを取り組む上で基本的な考え方や姿勢を学んでもらうことができた。参加団体の担当者からの感想：「三重県から

東京へ出るのは難しいので、オンラインで受講できる研修は、とてもありがたいです。本研修を受講したことにより、グループで話し合いを重ねて、合理的配慮、できうる限りの準備をすることができた」

対象別に教材を制作したことで、組織全体の意識向上と理解促進を促した

令和6年度に制作した動画教材「ミュージアム・アクセシビリティ講座 ふかふかTV」に加えて、新たに館長を含む運営監督者層向けの動画(1本30分)を制作した。博物館に従事するあらゆる職員・スタッフに向けては「障害の社会モデル」「合理的配慮」「情報

保障」「平等性と公平性」という4つのキーワードについて学ぶことができるコース(動画4本、総視聴時間85分)を用意した。対象別に分けたことで、組織全体において理解を促進することができた。eラーニング受講者からの感想：「担当者や部署任せにしない、

全職員の意識向上が大切であることを認識できた。当館では(中略)その点は不十分で、この研修が意識改革の第一歩になるのだということも認識できたのがよかった」「定義に基づき、背景や基本的な考え方についての丁寧な説明があり、改めて理解した」

全国10カ所のミュージアムに赴き、実装を目指した議論ができた

「eラーニングプラン」の受講を終えた団体の中から、NCARより講師を派遣しワークショップ型の研修を行った。北は北海道から、南は福岡県まで、全国10カ所のミュージアムへ赴いた。アクセシビリティにおいて取り組む内容を可視化するツール「ミュー

ジウム・アクセシビリティマップ」を開発し、多様な困りごとを解消するためのアイデアを書き出すグループワークを通して、ミュージアム関係者間での議論を活性化させた。また、各地域においてゲストを招聘し、利用者の立場から障害のある当事者の状況を

直接話し、議論に参加する設計とした。単館職員だけでなく、地域住民や大学関係者、福祉団体職員など、複数館の職員が参加するケースもあり、研修を通じてネットワーク構築にもつながった。



対面ワークショップの様子(横浜市芸術文化振興財団)



「ミュージアム・アクセシビリティマップ」を使用している様子

事業実施における工夫

<全国の取り組みを上げ、つなげる役割として>

独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター(NCAR)は、「アートをつなげる、深める、広げる」のミッションのもと、全国の美術館を含む博物館のネットワークの一つになることを目指している。その特性を活かして様々な研修教材や情報を提供することで、全国の取り組みや知見を可視化することができた。

さらに、同じくミュージアムのアクセシビリティについて、福祉業界、そして民間団体の立場から取り組むNPO法人エイブル・アート・ジャパンと連携することで、各地域の福祉団体と美術館をつなげる工夫も取り入れた。厚労省が進める障害者芸術文化活動普及支援事業における各地域のセンターとも連携する機会を設け、山形県、富山県においてその実例を作ることができた。

「バレエによるインクルージョン促進事業」リラックスパフォーマンス

団体名

公益財団法人スターダンサーズ・バレエ団

所在地：東京都港区

団体URL：https://www.sdballet.com/

事業URL：https://www.sdballet.com/rp/

事業概要

当団では、2017年度より「リラックスパフォーマンス」によるバレエ公演を継続的に実施しています。リラックスパフォーマンスとは、自閉症やコミュニケーション障害、学習障害等により通常の劇場環境での鑑賞に不安を抱える人やその家族が、より安心して舞台芸術を楽しめるよう配慮した公演形態です。設立60年を迎えるバレエ団として培ってきた創作・上演の専門性を基盤に、障害の有無にかかわらず同じ空間で芸術を共有できる環境づくりを目指し、鑑賞環境の工夫や事前情報の提供を通じて、舞台芸術鑑賞における心理的・情動的障壁の軽減に取り組みしました。

本事業で実施した内容

リラックスパフォーマンス公演

①池袋公演

開催日：2025年4月19日(土)(全2回)
会場：あうるすぽっと[豊島区立舞台芸術交流センター](東京都・豊島区)

対象：3歳以上

参加費：大人2,000円／子ども1,200円／おやこセット3,000円／介助者(1名)無料
※子どもは3歳～高校生

来場者数：506名

実施内容

公益財団法人としま未来文化財団との共同主催により、リラックスパフォーマンスによるバレエ公演を開催。世界中で愛されている童話「シンデレラ」のダイジェスト版を上演しました。

②立川公演

開催日：2026年1月25日(日)
会場：たましんRISURUホール[立川市市民会館]大ホール(東京都・立川市)

対象：3歳以上

参加費：S席大人5,000円／子ども2,500円、
A席大人4,000円／子ども2,000円
※子どもは3歳～高校生

来場者数：1,028名

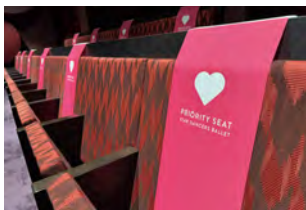
実施内容

公益財団法人立川市地域文化振興財団との共同主催により、リラックスパフォーマンスによるバレエ公演を開催。チャイコフスキー音楽による古典バレエの名作「白鳥の湖」と「くるみ割り人形」をストーリーはそのままそれぞれ1幕仕立てに再構成したプログラムを上演しました。

リラックスパフォーマンスとして、上記2公演においては以下の配慮を行い、鑑賞環境の柔軟化を図りました。

- 当日のタイムスケジュールや劇場の様子、よくある質問等をまとめた特設サイト及びご来場ガイドを制作しました。
- 照明や音響レベルの調整をしました。
- 上演中の客席の出入りを可能として、ホワイエには休憩エリアを用意しました。
- 体調や状況に応じて利用できる優先席を用意しました。
- 開演前に舞台上で解説を行い、リラックスパフォーマンス形態(上演中の出入り、照明について等)やバレエのあらすじの説明を行いました。

当日は、障害のある人とその家族を含む幅広い層が来場し、家族単位での鑑賞や、初めて劇場を訪れる来場者の参加が多く見られました。



優先席

ダンスワークショップ

開催日：2026年1月29日(木)
会場：神奈川県立麻生支援学校体育館(神奈川県川崎市)

対象：神奈川県立麻生支援学校 生徒

参加費：無料

来場者数：53名

実施内容

振付家とプロのバレエダンサー、ピアニストが学校に向き、バレエのワークショップを行いました。ピアノの生演奏による親しみやすいバレエ音楽に合わせて、身近なものを表現することから、徐々にバレエの要素を入れていき、自然な流れでバレエの身体表現へと誘うプログラム。今回は、白鳥の羽ばたきや波や風をモチーフに、それぞれの表現の特徴や違いを自然に感じながら、バレエの動きや表現を楽しみました。



特別支援学校ワークショップ

本事業で得られた成果

障害や特性のある人が家族と共に舞台芸術を享受できる鑑賞環境の構築

リラックスパフォーマンス公演は計3回実施し、合計1,534名にご来場いただきました(池袋での2公演は全席完売)。本事業を通して、知的障害、発達障害をはじめ、車椅子やストレッチャーを利用している方、視覚・聴覚障害のある方まで、様々な障害及び特性のある方が、家族と共に安心して舞台芸術を鑑賞できる環境を提供することができました。来場者からは、

「周囲を気にせず鑑賞できた」「家族で同じ作品を共有できた」といった声が寄せられ、心理的なハードルの低下が確認されました。

また、継続的な取組により、劇場側からリラックスパフォーマンス実施の相談や要望が寄せられるなど、鑑賞支援の取組自体が一定程度認知されてきていることも成果として挙げられます。



「くるみ割り人形」© Kiyonori Hasegawa

鑑賞支援における情報伝達の重要性和課題の可視化

一方で、リラックスパフォーマンスの環境や考え方の伝え方については、課題があることも明らかになりました。障害や特性により声が出てしまう人がいることも受け入れるという対応が、一部のお客様の間では「リラックスパフォーマンスでは話してもOK」と捉えられているケースが各公演で発生

しました。リラックスパフォーマンスと題した公演が増え、その対応方法も多様であることを前提に、当団の考え方を誤解のない形で分かりやすく伝えるための再検討が必要なが分かりました。今後は有識者の意見も取り入れながら改善につなげていきたいと考えています。



開演前の解説 © Kiyonori Hasegawa

障害のある人たちに芸術に触れる機会を提供

特別支援学校におけるワークショップでは、知的障害のある高校生たちを対象に行いました。踊りが大好きな生徒もいて、このワークショップをとても心待ちにしてくれていたようです。グループごとに分かれてお互いに会話

をするようにダンスの掛け合いをしたときには大変盛り上がり、先生方からも生徒たちがみな楽しそうだったと喜んでいただきました。前回実施したワークショップの内容に関して、支援学校の教員らから評価や助言を受けており、

その結果を今回の実施方法の改善につなげることができました。今回は単発の活動でしたが今後は鑑賞支援の一環としてワークショップを位置づけ、より複合的に芸術参加を促すプログラムへと発展させていきたいと考えています。

事業実施における工夫

一般的に多額の経費がかかるバレエ公演をリラックスパフォーマンスとして実施するためには、来場者の確保、つまりチケット収入の確保が大きな課題となります。そのため、手の届きやすい料金設定や、演目の選定・構成、またPRを工夫することで、来場者数の拡大に努めています。

- バレエを初めて鑑賞する方、特に子どもたちが無理なく楽しめるよう、継続してバレエを観る時間を約45分間に設定しています。これは学校公演等での経験から、子どもたちが集中を保てる時間として授業時間に合わせたものです。45分→休憩→45分という流れにすることで、子どもたちにとっては見やすく、また大人も満足できる内容のプログラムになるよう配慮しています。
- 障害や特性のある方やご家族にとっては、最後まで観られるかどうか分からない公演のチケット購入は“無駄になるかもしれない出費”であり、額が大きければ大きいほどリスクとなるものです。そのような心理的ハードルをできるだけ下げられるよう、価格の設定に努めています。具体的には、一般公演が10,000円前後のところ、リラックスパフォーマンスでは5,000円を上限にすることを目安にしています。
- 障害や特性のある方やご家族が「行ってみよう」と思える紹介の仕方を保ちながら、そういった方々だけが本公演の対象者だと思われないような広報を意識しています。

団体名

一般社団法人 日本演出者協会

所在地：東京都新宿区

団体URL：https://www.jda.jp/

事業URL：https://www.jda.jp/news-column/21474.html

事業概要

本事業＜楽しくつながるプロジェクト＞2025は、障害の有無や言語・文化的背景の違いを越え、多様な人々が演劇・身体表現を通して出会い、互いを知り、関係性を築くことを目的として実施しました。聴覚障害者と市民による公演、障害者同士の相互支援を促す継続的な活動、多文化背景をもつ人々が交わるワークショップ、重度知的障害者と技能実習生が参加する生活劇の制作など、地域や対象に応じた実践を行いました。あわせてシンポジウムを通じて全国のより多くの人と事例を共有し、演劇を通じた共生社会の具体的なモデルを社会に提示しています。

本事業で実施した内容

①聴覚障害者と市民による演劇公演 「手と体を使って表現しよう」(石川県かほく市)

実施期間：2025年7月～8月(計6回)8月31日(日)15時開演
聴覚障害者5名、一般16名 45分の公演

実施内容

ワークショップ5回と公演1回。
初めて手話に触れる子どもたちと、表現ワークショップから生まれたことを舞台上で表現し、それぞれの「大切なこと」を手話と音声言語で話した。入場料500円。入場者70名。

③さまざまな言語的・文化的バックグラウンドをもつ 人がまざりあう演劇ワークショップ(東京都豊島区)

実施期間：2025年7月～10月(計4回)

実施内容

VEC(Villa Education Center)の日本語活動参加者(海外ルーツの方・支援者・学生など)20名程が、共に身体を動かしながら演劇を使って交流し表現した。各回おおまかなテーマ(からだを使う・自分のことを動きで表現する・短い言葉でシーンをつくる・音を使う)を設定し、アクティビティの中で、交流し表現する場を創出した。



③東京都豊島区

②障害者同士がサポートしあい自発的活動を 促進するための場づくり(静岡県伊東市)

実施期間：2025年6月～9月(計7回)

実施内容

7回の活動で、2年目の活動となるB型支援作業所「すう」の利用者6名が、新規参加となる生活介護事務所「Side by Side」の利用者25名に、自分たちが行ってきたことを伝え、障害者同士が互いを知り、サポートしあえる関係を持ち、演劇を通して施設同士、人と人がつながる場を創出した。

④重度知的障害者と海外からの技能実習生を包括する 施設内での日常を基盤とした生活劇(長崎県諫早市)

実施期間：2025年8月～12月(計5回)

実施内容

生活介護施設内での日常生活を、それぞれの視点からの演劇として再構成し、東南アジア技能実習生に焦点を絞り、母国を紹介する演劇を即興で創作した。技能実習生3名はレゴや、色鉛筆を使用して母国のコマーシャルを作成。重度の障害を持つ利用者と彼らとのやりとりは、最終的に日常生活を基盤にすべてのワークショップを織り込んだ一本の戯曲「ハレとケ～ことばのいらない日～」を制作し、外部への発信ツールとした。

⑤シンポジウム＆ワークショップ

実施日程：2026年2月11日(水・祝)

実施内容

●ワークショップA インクルーシブ教育を意識したワークショップの在り方
●ワークショップB 居場所や居心地を意識したワークショップ
様々な障害のある人たちと多様な手法で長くワークショップを実践してきた小松原修氏、作業療法士の視点から演劇をコミュニケーションツールとして応用している川口淳一氏を講師に迎え、共生社会の活動に興味がある方を対象にしたワークショップを行った。
●シンポジウム「さまざまな人たちとつくる演劇の可能性」
＜楽しくつながるプロジェクト＞それぞれファシリテーターたちが、①～④の4つの取り組みを報告した。

本事業で得られた成果

演劇を通して多様な人が出会い、支え合う関係が各地に芽生えた！

①～④の各事例は地域や対象こそ異なるものの「ことばだけに依らない表現」「日常の経験を大事にした創作」「参加者同士の相互作用」を軸にして展開され、共生社会に向けた具体的な実践モデルとして、いくつかの成果がありました。

第一に、演劇は相互理解を促進する有効な手段であると改めて認識し、聴覚障害者と市民による公演(①)では、手話や身体表現を通して「伝わる体験」を観客と共有することで、障害

理解を「知識」ではなく「実感」として届けられました。また、多文化・多言語環境でのワークショップ(③)や、重度知的障害者と技能実習生が参加した生活劇(④)では、日本語の能力に左右されない表現の場が、参加者一人ひとりの存在にスポットを当てたと感じます。

第二に、当事者が受け手に留まらず、担い手・伝え手へ役割を広げていくプロセスが生まれた点が大きな成果で、伊東市での取り組み(②)は、2年目の

参加者たちが新しい参加者たちに活動内容を伝え、障害者同士が支え合いながら場をつくる関係性が育まれました。

第三に、諫早市で制作した戯曲「ハレとケ～ことばのいらない日～」(④)は、施設内の日常や異文化環境での気づきを一本の作品としてまとめることで、施設外の人々に現場の実情や価値を伝える手段になるという発見がありました。

社会に対する波及効果と今後

この取り組みは、「共生社会」を抽象的ではなく、公演・ワークショップなど具体的な行為によって示した点に社会的な意義があり、参加者・観客・関係者が「違いのある他者と共に何かをつくる体験」を共有し、障害や文化の



①石川県かほく市



②静岡県伊東市



④長崎県諫早市

事業実施における工夫

日本演出者協会はこれまで培ってきた演劇創作とワークショップのノウハウを生かし、第一に手話や動きを用いた表現によって、年齢や障害、言語背景の違いを越えて参加・鑑賞できる場を実現しています。

第二にシアターゲームの手法を活用し、「できる・できない」ではなく「やってみたい」という意志を起点にして他者との関係が自然に生まれる環境を創り出すことを大事にしています。

三つ目として、やさしい日本語とデモンストレーションを多くし、言葉より身体が先に動くプログラムにすることで、多文化の環境でも安心できる工夫を行っています。

さらに重度の知的障害者が参加する現場では、見通しを持てるよう基本構造を繰り返すプログラムを採用し、やりとりを逐語的に記録し、戯曲として公開する方法を探りました。

地域における障害児等による芸術家ワークショップへの参加を通じた包摂的社会環境づくりの推進

団体名

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

所在地：東京都豊島区

団体 URL：https://www.children-art.net

事業概要

本事業では、様々な場で支援を必要とし生きづらさを抱える子どもたちが、障害の有無にかかわらず文化芸術に親しみ、感動する心や自他の表現を認める心を育みながら、人と人のつながりを生み出すことを目的にしました。文化芸術活動を通じた子どもの個性と能力の発揮及び社会参加の促進、多様な価値観の形成と包摂的環境づくりを行うため、プロのアーティストによるワークショップを、多様な子どもたちの居場所で継続的に実施しました。

本事業で実施した内容

子どもの居場所でのワークショップと成果発表報告会

開催日：2026年1月20日～2月17日(計5回実施)
場所：子どもの居場所「そだちのシェアステーション・つばみ」(東京都清瀬市)
対象参加人数：ショートステイ利用中の子ども、子どもの居場所に通う子どもたち/小学2年生～20歳 延べ29人
[アーティスト]北川結(ダンサー・振付家・イラストレーター)
参加費：無料

実施内容

ワークショップに参加する子どもたちの「好き」や「得意」をもとに発案された遊びや身体表現等、心と身体の触れ合いを通して、自己肯定感を育む内容を実施しました。成果発表報告会では、施設職員や日頃利用している子ども、地域団体と一緒に一つ屋根の下で、今までの成果を共有しました。

児童相談所でのワークショップの実施

開催日：2025年8月29日～2026年2月12日(計3回実施)
場所：荒川区子ども家庭総合センター(児童相談所)(東京都荒川区)
対象参加人数：一時保護下にある子どもたち/小学3年生～高校2年生 延べ36名
[アーティスト]田畑真希(振付家・ダンサー)、中村大史(音楽家・作曲家)、塩川岳(美術家・アートコミュニケーションデザイン)
参加費：無料

実施内容

ダンスや音楽、美術のワークショップを実施し、身体表現や音楽、大きなエアドームを皆で制作するワーク等を通して、子どもたちが互いに関わり合い、様々な興味を広げる機会につながりました。

コラムの作成・発信

公開日：2026年3月19日

芸術家と子どもたちホームページに掲載

障害児入所施設でのワークショップと成果交流発表会の実施

開催日：2025年8月8日～2026年2月11日(青梅市5回、渋谷区4回、成果発表交流会1回、計10回)
場所：友愛学園児童部(東京都青梅市) 宮代学園(東京都渋谷区)
対象参加人数：障害児入所施設で暮らす子どもたち/小学3年生～高校3年生 延べ46名(青梅市)、小学3年生～高校2年生 延べ38名(渋谷区)
[アーティスト]松岡大(舞踏家)、城俊彦(ダンサー)
参加費：無料

実施内容

●友愛学園児童部、宮代学園(ダンス) 子どもたちに馴染みのある音楽で踊ることや、ペアやグループでの身体によるコミュニケーションを楽しみました。最終日は、施設内の他の子どもたちや職員、保護者に向けて、発表会を行いました。
●成果発表交流会 宮代学園の子どもたちが友愛学園児童部を訪れ、2施設合同でお互いに取り組んできたことを共有して交流する機会を設けました。

放課後等デイサービスでのワークショップの実施

開催日：2025年8月19日～12月25日(青梅市3回、渋谷区4回、計7回)
場所：友愛こどもクラブとことこ(東京都青梅市) 広尾てくてく(東京都渋谷区)
対象参加人数：施設を利用している子どもたち/小学3年生～高校2年生 延べ20名(青梅市)、小学2年生～高校1年生 延べ37名(渋谷区)
[アーティスト]松岡大(舞踏家)、ピスタチオ 小村歩(美術家)
参加費：無料

実施内容

●友愛こどもクラブとことこ(ダンス)、広尾てくてく(美術) 参加者の特性や興味関心に合わせたプログラムを実施しました。参加した子どもたちが自己表現を楽しみ、お互いの良さを認め合う空間づくりを目指しました。

実施内容

事業の成果だけでなく、実施前から振り返りまでのプロセスを公開することで、他地域で同様の事業を実施する際の参考モデルとなるWEBコラムを作成しました。

鑑賞
機会創造
機会発表
機会作品
評価権利
保護販売
支援交流
促進相談
体制人材
育成情報
収集連携
協力

本事業で得られた成果

子どもたちの生きる力を育む

障害の有無のみならず、様々な理由で支援を必要とし生きづらさを抱える子どもたちが、プロのアーティストと出会い、ダンス、音楽、美術などの創作活動を楽しむことを通じて、言葉以外の表現方法を体感的に知り、アーティストをはじめとする他者とのコミュニケーションを深めることで、人への信頼感を育むことができました。それは子どもたちの、人とつながることへの安心感、

社会に参加する意欲を生み出しました。



セネガルの民族楽器「サバル」の体験(ダンス・友愛こどもクラブとことこ)



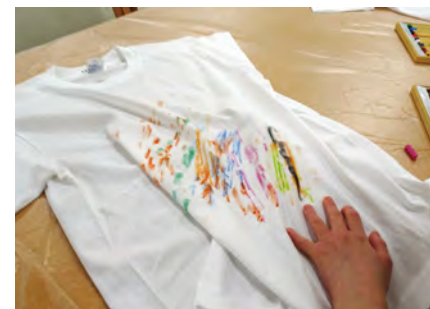
自然素材を使ったクリスマスツリーづくり(美術・広尾てくてく)

成果交流発表会による施設間の関係の強化

各施設で行ったワークショップとは別に、宮代学園(東京都渋谷区)の児童がバスに乗って友愛学園児童部(東京都青梅市)を訪れ、成果交流発表会を開催しました。当日は、それまでにそれぞれがやってきた内容を披露しあったり、一緒に踊ったりするだけで

なく、最後にお茶とお菓子でリラックスするフリータイムを設けました。子どもたちは初めての場所で、初対面の人との交流を楽しむことで、いつもの生活圏から外に世界を広げることができました。また、交流発表会に向けての打合せや、発表会後の振り返りで、

各施設の職員やアーティストを交えて、意見交換を行う中で、それぞれの施設の職員同士や、アーティストとの関係も深まり、子どもたちの育ちを支援する地域における包摂的な社会環境づくりにつながったと考えています。



Tシャツに好きな模様を描いて衣装を制作(ダンス・宮代学園)



お互いの手を合わせて動く(ダンス・宮代学園)



手をつないで呼吸を合わせて動く(ダンス・友愛学園児童部)

様々な地域や施設での活動

児童相談所(荒川区)や子どもの居場所(清瀬市)の他に、渋谷区、青梅市にある障害児入所施設と放課後等デイサービスに拡充したことで、施設

職員や地域で関わる大人たちが、ワークショップを通じて子どもたちの興味や関心、表現力について、理解を深めることができました。今後の彼らへの

支援の在り方の参考になるのみならず、地域社会で様々な困難を抱えている子どもたちへのサポートを考える一助になると考えています。

事業実施における工夫

ポイント

施設職員との事前の打合せにより、障害のある子どもやひとり親家庭、貧困家庭などの実態や興味や関心を丁寧に聞き取って内容を検討し、子どもたち一人一人のニーズに寄り添えるように、特別支援学級等でのワークショップの経験もあり、社会の中でのアートの役割について意識的に活動しているプロの現代アーティストを起用しました。施設間の交流に際しては、障害児にとって負担の少ない移動手段として、施設のバスを利用するなど、スタッフが職員と入念な打合せを行い、ストレスなく、安全に実施できるよう検討を重ねました。

DanceSyndromeによるダンスリーダー育成プログラム — 障がい者のファシリテーターを増やすプロジェクト

団体名

特定非営利活動法人 LAND FES

所在地：東京都港区

団体 URL：https://landfes.com

事業 URL：https://landfes.com/dancesyndrome2025

事業概要

英国で障がい者のためのコミュニティダンスを展開するDanceSyndromeの方法論をベースに、障がい者が主体的に関わることでできるインクルーシブダンスの実践と普及、人材育成を目的に事業を実施しました。前期(25年6～9月)は、当団体の育成プログラム修了者がチームに分かれてワークショップを組み立て・実践し、ファシリテーターとしての経験を積むとともに、参加者同士の交流を通じてコミュニティ形成を促進しました。各回、DanceSyndromeとオンラインで繋ぎ助言を受けました。後期(26年1月)は来日したメンバーより「振付」に焦点を当てた創作型ワークショップを実施し、最終発表では作品発表の場を設け、インクルーシブダンスの芸術的価値と可能性を追求しました。

本事業で実施した内容

<前期開催内容>DanceSyndrome ダンスリーダー育成プログラム実習生によるインクルーシブダンスワークショップ

実施内容

DanceSyndromeでは、障がいのある人が「ダンスリーダー」として、ダンスアーティストと共にワークショップを共同で実施しながら、リーダーシップを担うモデルを採用しています。今回は、昨年に日本で同プログラムを経験した実習生が、自らファシリテーションを行う全4回のワークショップを実施しました。

開催日：2025年6月14日(土)

ファシリテーター：岩川佳士乃、野村雅弘、原亜由子

会場：SHIBAURA HOUSE 5F

参加者数：13名

開催日：2025年7月12日(土)

ファシリテーター：天方真帆、高嶋柚衣、三木瑛里子

会場：SHIBAURA HOUSE 5F

参加者数：13名

開催日：2025年8月16日(土)

ファシリテーター：大川あじさい、戸松美貴博、待寺優

会場：赤坂区民センター 区民ホール

参加者数：18名

開催日：2025年9月13日(土)

ファシリテーター：金子聡、砂山典子、柳井美紀

会場：SHIBAURA HOUSE 5F

参加者数：13名

参加費：一般：1,500円/回

港区民割引：1,000円/回(港区在住・在勤・在学者対象)



前期ダンスリーダー育成プログラム実習生によるインクルーシブダンスワークショップ
第1回写真 2025年6月14日(土)開催

<後期開催内容>障がいの有無に関わらず共にダンス作品を創るためのワークショップ&ショーケース

実施内容

DanceSyndromeのメンバーを日本に招き、障がいの有無に関わらず、参加者が協働し、共にダンス作品を創作するための「振付」に焦点をあてたワークショップとリハーサルを合計7日間実施しました。また、8日目の最終日のショーケースでは、その過程で創作された成果作品を発表しました。

開催日：2026年1月17日(土)&18日(日)

コレオグラファーを対象としたワークショップ

ファシリテーター：DanceSyndrome 来日メンバー

会場：SHIBAURA HOUSE 5F

開催日：2026年1月19日(月)～23日(金)

参加者グループのリハーサル

会場：台場区民センターなど

開催日：2026年1月24日(土)

ショーケース仕込み&リハーサル

会場：SHIBAURA HOUSE 1F

開催日：2026年1月25日(日)

16:00 ショーケース開演

会場：SHIBAURA HOUSE 1F

ワークショップ：コレオグラファー

参加費：一般：12,000円 港区民割引：10,000円

ダンサー

一般：8,000円 港区民割引：6,000円

※ダンサーとして2グループ参加の場合は、+2,000円

ショーケース：一般：2,000円 港区民割引：1,500円

鑑賞費：※港区民割引は、港区に在住・在勤・在学の方が対象。

本事業で得られた成果

インクルーシブダンス人材育成とコミュニティづくりの成果

本事業を通して、障がいの有無に関わらずインクルーシブダンスに関わるクリエイターのステップアップを図るとともに、英国のDanceSyndromeの先進的なメソッドを基に、障がい者の多様な表現の可能性を引き出す具体的手法を獲得できたことは大きな成果です。前期のファシリテーター育成では、前年に同メソッドを学んだ人材が主体となり、チームでワークショップを組み立て、実践しました。関係性づくりや参加者が安心して表現できる環境設計も含め、ファシリテーションを実践的に学ぶ機会となりました。さらに、DanceSyndromeからのオンラインフィードバックにより、国際的視点を取り入れた改善サイクルを実施できました。

全4回終了後の総括ミーティングでは、制作上の工夫、アクセシビリティの評価、継続的なコミュニティ形成の重要性などについて、多角的な議論を行い、団体としての課題や改善点を

明確化しました。これにより、単発に終わらない持続的な実践基盤の重要性を関係者間であらためて共有認識しました。

後期のコレオグラファー育成では、4グループが協働し作品を創作しました。障がいのある人が主体的に創作に関わる場を提示できたことは、舞台芸術分野におけるバリアフリー推進の観点からも大きな意義があります。また、ダンスアーティストにとっても、多様な特性への理解を深める重要な学びの機会となりました。

さらに、港区の特色をリサーチし作品に反映させることで、地域の魅力や課題に目を向ける契機となり、アートを通じた地域理解の促進につながりました。ショーケースには近隣の福祉施設利用者也来場し、地域との新たな接点が生まれたことも社会的波及効果の一つです。

本事業を通して、福祉と地域、そして文化芸術が交わり合うインクルーシブ

ダンスの価値を提示することができました。また、得られたノウハウを教材化し、他団体への展開も進めていきたいと考えております。育成した人材が各地で実践を展開することで、学校や福祉施設等での応用も期待されます。DanceSyndromeとの連携を通して国際的ネットワークを強化し、日本の実践を発信するとともに、海外事例を国内に還元しながら、インクルーシブダンスの発展に取り組んでいきます。



前期ダンスリーダー育成プログラム実習生によるインクルーシブダンスワークショップ 第4回_オンラインで英国と繋ぐ様子
2025年9月13日(土)開催



前期ダンスリーダー育成プログラム実習生によるインクルーシブダンスワークショップ
第2回写真 2025年7月12日(土)開催



前期ダンスリーダー育成プログラム実習生によるインクルーシブダンスワークショップ
第3回写真 2025年8月16日(土)開催



前期ダンスリーダー育成プログラム実習生によるインクルーシブダンスワークショップ
第4回写真 2025年9月13日(土)開催

事業実施における工夫

本事業では、海外の先進事例を単に紹介するのではなく、当団体がこれまで培ってきたインクルーシブダンスの実践経験や関係者のノウハウを踏まえ、日本の文化的・社会的文脈に適した形へと再構築した点が大きな工夫です。障がいのあるファシリテーターや参加者が主体的に企画に関わる環境づくりに注力し、試行錯誤のプロセス自体を学びの機会として位置づけました。また、DanceSyndromeからオンラインで継続的にフィードバックを受ける仕組みを導入することで、国際的視点を取り込みつつ改善を重ねる循環型の運営を実現しました。さらに、創作テーマに地域性を積極的に取り入れることで、地域資源への理解を深め、地域の魅力を再発見する機会を創出するとともに、地域で福祉を支える人々との新たなコネクションの広がりにつながりました。

ホスピタルシアタープロジェクト2025 ーすべての家族に優しい多感覚演劇の創造・巡演、アウトリーチの展開

団体名

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

所在地：東京都多摩市

団体URL：https://tpn170.wixsite.com/mysite

事業URL：https://htpclearinginwood.wixsite.com/htp2025

事業概要

障害児、医療的ケア児とその家族のための多感覚演劇の創造と巡演です。リラックスパフォーマンスでも鑑賞が難しいと感じているご家族が、周囲に気がねなく鑑賞できるよう定員を限定するだけでなく、様々な配慮とクリエイティブな仕掛けを備えた公演です。7月の「国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ」での協賛公演を皮切りに、11月より首都圏ツアーを行いました。また、初めてアウトリーチ活動に着手し、沖縄療育園（浦添市）、貝取小学校（多摩市）、国立成育医療研究センターもみじの家（世田谷区）、田島支援学校桜校（川崎市）の児童・生徒らに寄り添うパフォーマンスを届けました。

本事業で実施した内容

多感覚演劇「月が旅する物語」の創造

実施内容

既存のメンバーに加え、新たなメンバーを公募し、多彩なバックグラウンドをもつ「カンパニー・オブ・ホスピタリティ2025」を編成しました。集団創造を通して、最も弱い存在である障がい児や医療的ケア児が享受でき、かつ、健常のきょうだい児や家族の誰もが楽しめる、音楽性豊かな多感覚のイマーシブでインタラクティブなインクルーシブシアターの作品を創造しました。



『月が旅する物語』（撮影：坂内太）（8） 沖縄公演

国際児童青少年演劇フェスティバルおきなわでの協賛公演の実施

日程：令和7年7月30日（水）11:00/15:00
31日（木）11:00（計3回）

会場：那覇文化芸術劇場なはーと小スタジオ
対象・定員：1公演当たり6～8組の障がい児とその家族と見学者。

参加費：子ども1名+大人1名 3,000円/
追加大人1,000円/追加子ども500円
見学者 3,000円

参加者数：（有料入場者） 29家族、追加大人5名、追加子ども8名、見学11名
但し、中国からの鑑賞教育のグループの13名の子どもと家族らが加わり、大賑わいになりました。また、国内外の多くのアーティスト、スタッフ、ジャーナリスト等にもご見学いただきました。

アウトリーチ活動の展開

日程：令和7年7月～11月（4日間）

実施内容

地元の団体、コーディネーターらの協力を得て、沖縄県浦添市の沖縄療育園（重度肢体不自由児・者 約20名+介護者）、東京都多摩市の貝取小学校の特別支援学級（情緒児 約30名と教員）、国立成育医療研究センターもみじの家（約20名の緩和ケア児と介護者、ゲスト）、神奈川県川崎市立田島支援学校桜校（約30名肢体不自由児・生徒と教員）に、多感覚の手法を駆使した寄り添うパフォーマンスをお届けしました。無償。

首都圏ツアーの実施

日程・会場：シャロームみなみ風（新宿区弁天町）11月9日（日）/パルテノン多摩クリエイティブラボ（多摩市）11月16日（日）/放課後等デイサービスブルーワン 11月30日（日）&12月7日（日）/川崎市国際交流センターレセプションルーム 12月13日（土）/なかはら障害福祉施設ひらま 12月21日（日）/（新規）デイサービスセンターしあわせ峯 1月17日（日）/島田療育センターはちおうじ 1月25日（日）

対象・定員：1公演当たり6組の障がい児とその家族、見学者。
参加費：子ども1名+大人1名 3,000円/
追加大人1,000円/追加子ども500円
見学者 3,000円



首都圏ツアー

本事業で得られた成果

作品の質と、鑑賞の質ー継続が培った成果をわかしあう

7月の「国際児童青少年演劇フェスティバルおきなわ」への協賛上演には、オーストラリアのインクルーシブシアターの第一人者で、著名な児童青少年演劇のカンパニーから、公演をみせて欲しい、またアウトリーチにも同行させて欲しいとの要望があり、受け入れました。また、中国の5都市から集まった鑑賞教育のグループが強く鑑賞を希望され、障がい児優先で対処するという条件付きで受け入れました。子どもたちのパワーが炸裂し、カーニバルのような状況となりました。尚、この子どもたちから「最も楽しかった作品賞」を頂戴いたしました。嬉しい反面、インクルーシブシアターが健常児に席卷される危険性も学びました。

インクルーシブシアターには足を向けることのなかった多くのメインストリームの芸術関係者（ジャーナリスト、日本芸術文化振興会 PO や専門委員等）が見学者席に連なりました。「障害

者等による文化芸術活動推進事業」等が広がりをもちはじめた証左でもあり、それぞれが私どものノンバーバルのインクルーシブシアターの公演に、驚きとともに、異なる解釈をもって評価されたことが印象に残りました。その関係者からの作品の芸術性に対する高い評価は、私どもに自信と力を与えてくれました。障がい児とその家族のためだからこそ、芸術性に妥協しない質の高い体験を届けたいと強く願っています。

継続した取組の実施は、参加する障がい児等とその家族にとって意味のあるものとなります。「だめ」を言わなくていい場には、ご家族もリラックスしてやってきます。初めての場や人が苦手な子どもには、安心できる既知の場所や人が必要とされています。また、子どもたちの社会性の向上に貢献するものです。最多鑑賞回数を誇るブ

ラダウィリー症候群の男の子は、冷静・沈着なリーダーとして初めての友達を助ける役割を果たしてくれます。鑑賞体験3年目の重い知的障がいをもつ女の子はカンパニーのためにお花をあげたいと自ら親に頼みプレゼントしてくれました。さらに、年に一度の再会を通して、障害児への支援は、孤立しがちな親たちへの支援でもあるのだと実感します。

親たちは、この一年にあったさまざまな出来事を報告してくれるのです。

令和7年度は初めてアウトリーチを実施し、異なる特性をもつ4つの施設・学校で寄り添うパフォーマンスを展開しました。公演と比較して、参加者数が多く、一人一人に寄り添う時間が短くなるのを考慮し、出演者数を増やして対応しました。



アウトリーチ



首都圏ツアー



首都圏ツアー

事業実施における工夫

1. 通常の作品をリラックスパフォーマンス等のように調整するのではなく、様々な障がいの特性を考慮したパフォーマンスを創造しています。
2. 申込の際に苦手なもの（大きな音、点滅する光等）、配慮の必要な事項を確認しています。なかには命にかかわるものもあり、必要に応じて、小道具や照明、楽器等、調整を行います。電源や吸引が必要等の要望にも応えます。
3. 事前資料（ソーシャルストーリー）のビデオとPDF版を作成し、ホームページに掲載します。
4. 公演1週間前に最終案内をお送りし、会場の特性や遅れそうな場合の対処などをお伝えしています。
5. 開場は開演30分前という暗黙の約束事には沿わず、早く到着されても受入れ、子どもが環境や人になじむように出演者らが対応しています。ミニコンサートに発展することもあります。
6. ご家族の写真撮影を認め、家族の記憶を醸成していただきたいと願っています。

団体名

一般社団法人エル・システムジャパン

所在地：東京都千代田区

団体URL：https://www.elsistemajapan.org/

事業URL：https://www.elsistemajapan.org/tce

事業概要

障害の有無に関わらず子どもたちが日常的に包摂的交流をおこなえる場が限られているという課題意識のもと、インクルーシブな合唱団として合唱ワークショップを継続開催しています。子どもたちが助け合い、主体的に芸術活動に参加できるコミュニティの醸成を目指し、各参加者のニーズにあわせた音楽教育を提供し、相互理解を深める機会を設けています。また、子どもたちの自立性と表現力の向上や、観客への共生社会への理解拡大を促す目的で、演奏会やイベントに出演し、多様な方々と共演・交流を重ねています。

本事業で実施した内容

合唱ワークショップ

開催期間：2025年4月～2026年3月に計45回（月4回程度）

場 所：東京芸術劇場、みらい館大明、板橋区立文化会館等

対 象：小学生～高校生

募集定員：なし

参加人数：30～40名

参加費：無料



合唱ワークショップ（撮影：エル・システムジャパン）



韓国芸術文化教育振興院 青少年交流プログラム「the Festival of Dreams」(主な演奏会への出演)（撮影：エル・システムジャパン）

③在日カナダ大使館「Canada LIVE! in Tokyo」

開催日：2025年9月25日

会 場：在日カナダ大使館

参加人数：出演者23名、観客約100名

④大阪・関西万博「いのち宣言フェスティバル」オープニング

開催日：2025年10月11日

会 場：2025年大阪・関西万博フェスティバル・ステーション(オンライン中継あり)

参加人数：出演者24名、観客約400名

主な演奏会への出演

①大阪・関西万博「Canada LIVE!」出演

開催日：2025年6月6日

会 場：2025年大阪・関西万博 EXPO ホール「シャインハット」、カナダパビリオン

参加人数：出演者約100名、観客約2200名

②韓国政府文化観光スポーツ省 韓国芸術文化教育振興院主催 青少年交流プログラム「the Festival of Dreams」

開催日：2025年8月5～10日

会 場：韓国・平昌 アルペンシア・ミュージックテント

参加人数：約500名（日本、タイ、マレーシアから各20名、韓国全土から約440名）

合唱団内外の相互理解を促すイベント

開催期間：2025年4月～2026年3月に計6回（2ヶ月に1回程度）

場 所：東京芸術劇場、みらい館大明、板橋区立文化会館等

対 象：東京子どもアンサンブルのメンバー、保護者、指導者、ボランティアスタッフ、ベルリン・フィルハーモニー奏者等

参加人数：30～100名

参加費：無料

実施内容

視覚障害者の手引き誘導の練習、メンバー同士の相互理解を深める会や、ベルリン・フィル奏者との交流会の開催

本事業で得られた成果

子ども主体の合唱活動と交流を通じた障害理解の深化と共生社会推進

子ども主体のインクルーシブな音楽活動の定着を目指し、合唱ワークショップを月4回、継続的に開催しました。新たに4声やアカペラの楽曲に挑戦する中で、練習や話し合いを子ども主体で実施する場面が増え、子どもたち同士が自発的に手引きや声掛けを行うなど、互いに支え合いながら活動する姿勢が育まれました。

メンバー間の相互理解を深める機会も定期的に設け、特別支援学校の教員による手引き練習や、子どもたち一人一人が自身について語る場を設けました。多くのメンバーが積極的に手を挙げ、自身の見えにくさの特徴や、嬉しい声掛け・傷つく言葉などを共有しました。同席した指導者やボランティア、保護者からは「発言が苦手な子が言葉を紡ぐ間、子どもたちが根気よく待ち、拍手で称える様子を見て感銘を受けた。短気だった自分も待てるようになった」との評価が寄せられるなど、周囲の大人の意識変容を促すことができました。

今年度は多くの演奏会や交流の機会に恵まれ、オーケストラとの共演、海外遠征、

海外アーティストとの交流など、初めての取組を重ねました。2025大阪・関西万博「CANADA LIVE!」や「いのち宣言フェスティバル」など、差別撤廃や共生社会を目指す、社会的意義の高いイベントにもご招待いただき、幅広い層と共演・交流できました。

こうした共演を通して、本事業の掲げる「障害の有無に関わらず、全ての子どもたちに無償で質の高い音楽教育を提供する」活動への理解が、上述の取組を通じて社会的に広がり、新たな参加や支援、連携の機会が生まれています。具体的には、9月25日に「Canada LIVE! in Tokyo」で共演した音楽家から楽曲制作への参加依頼、観客からの障害者支援施設利用者との共演依頼など、継続的交流へのご提案をいただき、実現に向け調整を重ねています。また、韓国エル・システムの事業を推進する韓国政府文化観光スポーツ省傘下の芸術文化教育振興院より、青少年交流プログラムに無料でご招待いただいた際には、障害者との関わりが少なかった各国の子どもやスタッフが、当団体の子どもたちと6日間生活を共にし、

手引きや視覚情報の解説を実践的に体験することで、障害理解を自分事として捉える契機となり、進路や将来像に影響を受けたという声が寄せられました。

障害者との協働経験を持たない主催者・共演者と、当団体が培ってきたノウハウを共有して協議を重ねる中で、イベント運営におけるアクセシビリティの向上が実現しました。想定外の事態や急な変更によって子どもたちの対応力や自立性が向上しました。家族や友人以外による手引きを拒否していたメンバーも、現在ではむしろ初めて会った人による手引きを希望し、「自分たち視覚障害者のことを、より多くの人に知ってもらいたい」と語るようになりました。

来年度以降も、経験とノウハウを活かして主催演奏会や出演イベントでの交流を主導し、インクルーシブな芸術活動のさらなる展開を目指します。



手引き誘導の練習（合唱団内外の相互理解を促すイベント）（撮影：エル・システムジャパン）



相互理解を深める会（合唱団内外の相互理解を促すイベント）（撮影：エル・システムジャパン）



2025年大阪・関西万博「CANADA LIVE!」(主な演奏会への出演)（©Curtis Perry）

事業実施における工夫

- 新曲を学ぶ際は、音源や点字版・拡大版歌詞カードを配布することで、視覚情報に頼らず、耳から楽曲を習得することを可能にしています。
- 音楽や福祉を学ぶボランティアに継続的にご協力いただき、子ども一人一人の特徴や性格を理解したうえで手引きや立ち座りのサポートを行っています。特別支援学校の教員とも連携し、障害を持つ子どもの音楽活動を支える知識や支援方法を学ぶとともに、定期的な研修を実施しています。
- イベント出演時は、主催者や共演者、会場スタッフと協議を重ね、照明・音響の調整や動線上の安全確保など、参加者のニーズに基づく要望を詳細に伝えています。
- 当団が海外のエル・システム団体との連携を通じて培ってきたネットワークと発信力を生かしながら、海外団体との交流や協働、情報発信を継続的にを行っています。
- 国内の関連団体においても、当団の取り組みが、より包摂的な活動の展開に波及効果をもたらしています。例として、当団と共演・交流経験のある舞鶴子どもコーラスでは、今後舞鶴市や地元合唱関係者を中心に、インクルーシブな音楽活動を強化していく予定とのことです。

団体名

一般社団法人日本ろう芸術協会

所在地：東京都台東区

団体URL：https://dasjapan.com/

事業URL：https://shuwanomachi.jp/

事業概要

手話のまち東京国際ろう芸術祭は、ろう者・難聴者が主体となり作品をキュレーションし、聴者と共に創り上げる芸術祭です。演劇や映画、ワークショップ、交流の場などを通して、ろう者・難聴者・聴者が交差し、相互理解を育むことを目的としています。また、手話を基盤とした「手話のまち」という空間そのものを創出し、視覚と言語、身体文化から生まれるろう芸術を可視化することで、多様な価値観や感覚に触れる機会を提供し、社会全体の発展に寄与することを目指しています。

本事業で実施した内容

手話のまち 東京国際ろう芸術祭

実施内容

手話のまち 東京国際ろう芸術祭は、11月6日から9日までの4日間、座・高円寺を中心に開催しました（※10月17日・11月22日にコラボ企画を実施）。高円寺1・2、阿波おどりホールのほか、高円寺駅周辺のマシタや空き倉庫等を活用し、まちなかへと展開しました。



「手話のまち 東京国際ろう芸術祭」(座・高円寺／東京都杉並区)

話即興バトルなども実施しました。

体験・ワークショップでは、手話の市や手話カードラリー、手話芸術や食品サンプル制作のワークショップを行いました。



手話の市

そのほか、トーク・パネル、展示、地域と連携したコラボ企画を通じて、手話を基盤とした「手話のまち」を体感できる芸術祭となりました。



クロージングセレモニー

プログラム総数は54で、映画、舞台芸術、体験・ワークショップ、展示、トーク・パネル、コラボ企画など多様な分野を横断して実施しました。参加費は無料から4,000円までとし、幅広い来場者が参加しやすい設定としました。

映画部門では、アジア初上映や日本未公開作品を含む、ろうにまつわるフィクション・ドキュメンタリー作品21プログラムを上映しました。舞台芸術部門では、国内外のろう者・聴者による13プログラムを上演し、ビジュアル・ヴァナキュラー (VV) 作品や異言語イマーシブシアター、公募フリンジ企画、手

本事業で得られた成果

多様な人々が交わる「手話のまち」を実現し、国内外へ波及した国際ろう芸術祭

本芸術祭の来場者アンケートでは、「大変満足」「満足」と回答した来場者が約86%にのぼり、また来場者数が述べ15,000人、参加国数が日本を含む23ヶ国と、初開催の国際ろう芸術祭として非常に高い評価を得ることができました。企画内容、プログラムの規模、会場全体の雰囲気いずれにおいても肯定的な評価が多く寄せられ、初の試みでありながら一定の成果を上げたといえます。

満足度の理由として特に多く挙げられたのは、「ろう者・聴者・外国人など多様な人々が同じ空間で共存し、共に楽しんでいる様子に感動した」「視覚言語や手話が自然に行き交う場そのものが新鮮で豊かだった」といった声でした。これらの意見から、本芸術祭が掲げた「手話のまち」というコンセプトが、来場者に具体的な体験として明確に伝わっていたことがうかがえます。

アクセシビリティの面においても、概ね高い満足度が示されました。特に、手話による案内やスタッフの柔軟で丁寧な対応に対する評価が目立ち、聴者の来場者からは「音声によるコミュニケーションが苦手だが、手話や身振りを交えた対応によって安心して参加できた」「受付や案内で工夫して伝えてもらえたことが助

けになった」といった声が寄せられました。これにより、情報保障がろう者のみならず、多様な背景を持つ来場者にとって有効に機能していたことが確認できました。

自由記述欄では、「観客が満員で盛り上がっていた」「活気があり、特別な場に立ち会っている感覚があった」といった肯定的な反応が多く見られた一方で、「人気公演のチケットが取りにくかった」といった課題も指摘されており、今後の開催に向けた改善点として受け止めています。

本芸術祭は、ろう者当事者が中心となって企画・運営を行い、聴者と協働する体制を明確に打ち出した点において、当該分野および社会に対して大きな意義を持つ事業となりました。来場者からは「ろう芸術に対するイメージが良い意味で変わった」「視覚言語を基盤とした文化芸術の可能性を初めて実感した」といった声も多く寄せられ、文化芸術を通じた意識変容や理解促進という波及効果が確認できました。

また、本芸術祭は他の区から参考にしたいという声や共催の杉並区から継続をお願いしたいという声をいただいており、ろう者主体の文化事業および聴者との協働モデルとして、一定の社会的評価を得るに至っています。さらに国際的な波及効果

も大きく、会期中には世界各国からろう者のキュレーターやプログラマーが来日し、日本作品への具体的な関心が示されました。舞台作品「100年の眠り」に関してはヨーロッパでのツアー公演の検討が進められており、2026年開催予定の台湾国際ろう芸術祭においては、手話のまち東京国際ろう芸術祭で上演された日本作品および海外作品の招聘提案もなされています。加えて、観客賞を受賞した日本のろう者太鼓パフォーマンス「夢ん鼓」には、アメリカ・オレゴン州のろう学校から、太鼓パフォーマンスの指導および新曲制作の依頼が寄せられているとのことです。

これらの成果は、本芸術祭が単発のイベントにとどまらず、日本のろう芸術が国際社会と接続し、継続的な国際交流へと発展していくための重要な起点となったことを示しています。今後は、本事業で得られた知見やネットワークを活用し、日本を拠点としてアジアのろう芸術を積極的に発信・共有するとともに、地域を越えた連携を深めながら、より持続的で開かれた国際ろう芸術の発信拠点として発展させていくことを目指します。

事業実施における工夫

ポイント

本芸術祭では、これまで継続的に実施してきた東京国際ろう映画祭で培った企画立案・運営・広報の実績を基盤とし、初開催の国際芸術祭でありながら安定した事業運営を行いました。特に、ろう者が主導するキュレーション体制を採用したことで、当事者性にとどまらず、表現の質や前衛性を重視したプログラム構成が可能となり、ろう者・聴者双方から共感を得る企画を実現しました。また、これまでに築いてきた国内外のろう芸術ネットワークを活用し、国際性の高い作品招聘や交流を実施した結果、作品の国際展開や次回招聘へと発展する具体的な成果も生まれています。さらに、デフリンピック開催時期に合わせた日程設定により、海外からの来場者や関係者の参加を促進し、国際的な注目と来場者数の大幅な増加につなげました。

令和7年度障害者等による文化芸術活動推進事業 「劇場・音楽堂等による共生社会実現のための人材養成講座」

団体名

公益社団法人全国公立文化施設協会

所在地：東京都中央区

団体URL：https://www.zenkoubun.jp/

事業URL：https://www.zenkoubun.jp/barrier_free/

事業概要

劇場・音楽堂等の職員を対象に、障害者等に対する取組の意義の周知、基礎知識の習得、事業の中核を担う人材の育成の三段階に分けて人材育成を実施しました。また、各施設が主体的に研修を実施できる体制や環境の整備を行い、共生社会に対する意識の醸成と専門性を有する人材の育成を図りました。

これにより、劇場・音楽堂等において障害者等の文化芸術活動への参加環境が整備され、施設が共生社会を育む拠点として機能することにより、障害者等による文化芸術活動の取組が活性化し、障害者のウェルビーイングの向上や地域における共生社会の実現に寄与することをめざしています。

本事業で実施した内容

1 研修会

Step1 ①都道府県別研修会

- 栃木県研修会（栃木県総合文化センター）
開催：令和8年1月15日
- 石川県研修会（金沢市アートホール）
開催：令和7年12月8日
- 大分県研修会（iichiko 総合文化センター）
開催：令和8年1月28日

参加者：85名

障害者等による文化芸術活動の意義や理解、合理的配慮について講義と事例発表を実施。



石川県研修会

Step1 ②合理的配慮に関するワークショップ（江東区文化センター）

開催日：令和8年1月19日

参加者：19名

障害のある方と一緒に模擬鑑賞体験等を行い、対話を通し合理的配慮について検討するワークショップを実施。

Step2 ①ベーシック講座（初心者向け） 研修動画の作成・公開

事業実施に向けた基礎的な内容の研修動画（7本）を作成し、公開。

公開：令和7年9月12日

公開URL：https://www.zenkoubun.jp/barrier_free/planning/movie.html

Step2 ②ベーシック講座（初心者向け）ワークショップ

開催・場所：令和8年1月14日（東京都中央区）

参加者：17名

研修動画の内容を踏まえ、障害のある方を対象とした事業を企画するワークショップを実施。

Step3 アドバンス講座（経験者向け）

開催日：令和7年8月8日～12月23日（全6回）

開催方法：オンライン（5回）、対面ワークショップ（1回）

参加者：11名

各自の課題解決や事業の向上を目的に講座及びワークショップを実施。

2 共通プログラム

①サマーセミナー in 代々木 （国立オリンピック記念青少年総合センター）

開催日：令和7年9月17日

参加者：176名

「聴覚障害と舞台芸術を考える」をタイトルに、講演や実践事例紹介、ディスカッションなど実施。



サマーセミナー in 代々木
手話ワークショップ 撮影：加藤甫

②実務研修・視察

対象：Step2、Step3講座受講者

実施回数：3回（江東区・吹田市・西宮市）

実施時期：令和7年10月、11月、令和8年3月

参加者：19名

障害のある方に向けた事業の視察及び事業担当者、出演者等と意見交換を実施。

③人材バンクの構築

有識者、劇場・音楽堂等の職員を中心に、障害者等の文化芸術活動推進に対し知見を持つ方を人材バンクとして登録し、専門性やプロフィール等をホームページで公開。

登録者数：個人14名

施設16施設

本事業で得られた成果

複数の研修機会を提供し、参加促進と意識醸成を図る

これまで実施してきた3段階の研修に加え、サマーセミナーや実務研修・視察など、参加者一人ひとりの関心や取組状況に応じて選択できる複数の研修機会を設定しました。これにより、参加者が都合に合わせて受講できる環境を整備し、研修への参加促進を図りました。

サマーセミナーでは、全国アートマネジメント研修会との合同開催としたことで、「これまで深く考えたことがないテーマについて学ぶことができた」「上司と共に参加し、共通認識を持つことができた」といった声が寄せられました。これまで関心の薄かった層にも参加

を促し、取り組みへの意識醸成につなげることができました。

また、初心者向け研修では研修動画を作成・公開した結果、昨年度の3倍以上の方にご受講いただきました。これにより、今後の取り組みの継続的な展開が期待されます。

理論と実践を組み合わせ、取組の具体化を促進

研修では、考え方や背景を学ぶ理論的な内容と、具体的な取組事例の紹介や視察などを組み合わせて構成し、理解の深化と実践へのつながりを重視しました。特にStep3研修では、当初の企画案をもとに講義を通じて理論と実践の両面から内容をブラッシュアップし、取り組みの掘り下げが行われました。

また、障害のある方を講師に招き、直接話を聞く機会を複数設けました。

「当事者の話を直接聞くことができ、とても貴重な経験だった」「一緒に取り組み、双方で環境をつくっていくことの大切さがよく分かった」といった声が寄せられ、取り組みに対する姿勢の変化が見られました。

さらに、他施設の事例紹介や見学会を通じて、「理想論ではなく、現場での工夫や悩みも含めて共有された点が参考になった」「実践的な理解を深めることができた」との評価があり、

それぞれの取り組みを再検討するきっかけとなりました。



Step3講座ワークショップ

研修の自走化と、主体的な情報取得を支える基盤の構築

昨年度に引き続き、研修会や実務研修・視察、専門人材バンクの整備などを通じて、劇場間のネットワークづくりを推進しました。サマーセミナー終了後には、講師や参加者がロビーに集まり、意見交換や取り組みに関する情報交換が活発に行われ、研修をきっかけとした新たなつながりが生まれました。

実務研修・視察では、過去の受講生も参加し、新たな関係性の構築につながりました。悩みの共有や共感

を通じて、「相談できる関係性ができたことが心強い」といった声が聞かれました。今後、このネットワークを活用して課題解決に取り組んでいくことが期待されます。

さらに、本年度は専門人材や実践を行っている施設に登録いただき、人材バンクを作成・公開しました。今後は、この人材バンクをハブとしてネットワークを発展させ、相互の関係性を深めることで、課題解決や協働の事業を来年度以降さらに推進していく予定です。



サマーセミナー in 代々木
特別対談 撮影：加藤甫

事業実施における工夫

ポイント

研修会の実施にあたっては、当協会の持つネットワークを活用し、公立文化施設協議会をはじめ、各地の劇場・音楽堂等と連携・協力のもと実施をしました。具体的には、講師の派遣や紹介、研修会の共同開催、事業の視察の受け入れなど、多岐にわたる協力を得ることができました。

その結果、当協会単独ではリーチしきれなかった層への周知や参加の促進が可能となり、研修会自体に広がりや多様性を持たせることができました。また、協力いただいた劇場・音楽堂等にとっても、自館の取り組みや事業の意義・成果を社会に向けて発信する機会となり、相互にメリットのある取り組みとなりました。このような共催・連携の仕組みは、今後の研修事業の継続的な発展においても有効であると考えられます。

障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞のための講座とワークショップ研修事業

団体名

株式会社 precog

所在地：東京都新宿区

団体 URL：https://precog-jp.net/about/

事業 URL：https://theatreforall.net/projects/stage-for-all/

事業概要

「障害と創作や鑑賞の場づくり」に関わる企画・制作者のための講座シリーズとして実施しました。全国から参加可能なオンライン講座(全4回)と東京と奈良で開催した合宿形式のワークショップ講座を実施。劇場職員、パフォーミングアーツの企画者やアーティストなど、さまざまな現場の実践者同士が集い、それぞれに活かせる視点や工夫を共有しあう場を目指しました。

本事業で実施した内容

オンライン講座(通し券1,500円/1回券500円)

実施内容

全4回の講座を通じて、障害当事者との創作現場や鑑賞にとって必要な環境、配慮、現状、歴史について学ぶ基礎講座。

①劇場のアクセシビリティを考える

～Modu Art Theaterの実践～

登壇：オセヒョン(韓国障害人文化芸術院 劇場運営部 部長)

聞き手：篠田栞、田澤瑞季(株式会社 precog)

参加者数：56名

②精神障害と創作～障害のある人との創作活動の現場～

登壇：中村麻美(OUTBACKアクターズスクール校長)

栗原和美・塚本さやか(特定非営利活動法人東京ソテリア)

聞き手：土門蘭(文筆家)

参加者数：55名

③ステージの手話通訳とはなにか～表現と鑑賞のあいだで～

登壇：江副悟史(株式会社エンタメロード 代表取締役)

田中結夏(となりのきのこ代表、舞台手話通訳者、手話通訳士、俳優、保育士)

長谷川恵美理(コンサート手話通訳プログラムマネージメント)

参加者数：137名

④舞台芸術のアクセシビリティを考える大会議

～たのしむ人と届ける人の対話～

登壇：山崎有紀子(アクセシビリティアドバイザー)

聞き手：関場理生(俳優、ナレーター)

王丸あすか(福岡県立ももち文化センター 事業責任者)

山川陸(アーティスト、Transfield Studio 共同主宰)

参加者数：48名

ワークショップ講座(一般 15,000円/U29 12,000円)

実施内容

オンライン講座の事前受講後、関心に応じて選べる1泊2日の合宿形式講座を実施。ワークショップ、視察などを通じて、障害のある人との表現や鑑賞について専門家や当事者と共に考え、対話を重ねました。座談会や感想シェアも行い、学びを現場に活かすことにも注力しました。

【コースA】

身体や心をつなぐ翻訳と対話。情報保障と鑑賞の先の対話を考える

会場：CINEMA Chupki TABATA、5005、エキラボ niri

ゲスト：平塚千穂子(CINEMA Chupki TABATA)

彩木 香里(ものがたりグループ☆ボランの会代表)

／合同会社 nubo 代表)

Sasa Marie(手話による「てことば」で詩を紡ぐ人、

ミュージック・アクセシビリティ・リサーチャー)

額田大志(作曲家・演出家・劇作家)

参加者数：16名

【コースB】

重度の心身障害のある人と創作すること、日常とケアのあわいの表現

会場：たんぼの家アートセンター HANA

ゲスト：佐藤拓道(たんぼの家アートセンター HANA 副施設長)

森田かずよ・福角幸子・三田宏美・KAZUKI(ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi)

参加者数：12名

特別視察プログラム(チケット代3,500円)

実施内容

ワークショップ講座参加の希望者を対象に、国際芸術祭「あいち2025」パフォーミングアーツ部門オル太『Eternal Labor(エターナル・レイバー)』の「見えない・見えづらい方のためのオル太鑑賞サポート DAY」、リラックスパフォーマンズの公演日を視察。通常の公演とは異なる環境設計・音声ガイドを利用したの観劇、当事者との感想シェア会、アクセシビリティ運営スタッフの現場での様子の視察を通して、リアリティをもって文化芸術のアクセシビリティを体感することを目指しました。

会場：愛知県芸術劇場 小ホール(B1F)

ゲスト：参加者数：8名

報告リーフレット・WEBレポートの作成(3月末公開予定)

実施内容

両講座の学びをWEBレポートとリーフレットで網羅的にまとめました。リーフレットはキーワードやポイントを中心にまとめ学びの入口として設計し、WEBレポートは講座内容の詳細と交わされた議論をまとめ、より深く学びたい人にとっての有益な資料となるように作成しました。

本事業で得られた成果

多様な人との創作・鑑賞を学び合い、実践へとつなぐ場の創出

オンライン講座では、4つのテーマを設定し、各領域や現場での創作プロセス、制作者や鑑賞者による取り組みを紹介し、クロストークを行いました。オンライン形式のため、地域や所属を問わず幅広い人が参加しやすくなり、参加者が100名を超える回もありました。これにより舞台芸術のアクセシビリティに関心を持つ人々の新たな入口をひらくことにもつながりました。合理的配慮の提供が民間事業者にも義務化されてから2年が経ち実践者が増え、

より具体的な課題に向き合う人が増えたからか、講座の中では踏み込んだ課題についての質問が多かったと感じます。ワークショップ講座には、舞台芸術のアクセシビリティやインクルーシブな創作に問題意識を持つ人々が集まりました。Aコースでは、演劇カンパニーストミックの作品を題材に、鑑賞サポートのあり方を考えるグループワークを行い、参加者はそれぞれの視点から作品と観客の関係性をどのようにひらいていけるのか具体的に構想しました。

このプロセスを通じて、鑑賞サポートを後付けで考えるのではなく、作品とともに設計する創造的なプロセスとして捉え直す視点が共有されました。Bコースでは、重度の心身障害のある人との演劇のワークを行い、異なる身体性や流れる時間に着目して、創作の種を見つけたたり、作品として紡いでいくということ、また創作や発表の場に介助、医療的ケアの視点が加わることを学びました。継続して創作活動を行うために必要な環境や体制、現場での課題について、実践者の経験を通して理解を深める機会となりました。



オンライン講座①【第1回】劇場のアクセシビリティを考える～Modu Art Theaterの実践～



ワークショップ講座Aコースの様子(会場:5005 撮影:縣健司)



ワークショップ講座Aコースの様子(会場:5005 撮影:縣健司)



ワークショップ講座Bコースの様子(会場:たんぼの家 撮影:山神美琴)



ワークショップ講座Bコースの様子(会場:たんぼの家 撮影:山神美琴)

事業実施における工夫

知見をひらき多様な視点で学ぶ講座プログラム

precogがこれまで経験してきた事例や気づきから重要だと感じるテーマを設定し、舞台芸術におけるアクセシビリティ、インクルーシブとはどのようなことなのか、各領域の実践者の話を聞き視野を広げるきっかけとなる多角的なプログラムとしました。

鑑賞サポート付き公演の現場体験を通じた理解の深化

国際芸術祭あいち2025において、precogがアクセシビリティ運営に関わるプログラムがあったことから視察が実現しました。実際の鑑賞サポート付き公演を体験し、内容について共有を受けたり、ツアーに同行することで、講座内だけでは気づくことのできない学びを提供することができました。

いつでも、だれでも、どこへでも「ミュージアム・アクセス・センター」モデル普及事業

団体名

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

所在地：東京都港区

団体URL：https://www.ableart.org/

事業URL：https://minmi.ableart.org/

事業概要

本事業は、障害のある人をはじめ、ミュージアムに行きづらさを感じる人々が安心して訪問し、豊かな鑑賞体験を得られるよう、人材育成と基盤整備に5年計画で取り組むものです。令和7年度は、相談窓口への対応や、全国の文化施設におけるアクセス環境の改善や鑑賞サポートの伴走支援、必要に応じた企画協働、ミュージアムアクセスパートナー・コーディネーターなどの専門人材の派遣を行いました。また、実践の共有と学びの場として、オンラインプログラムの定期開催も継続しています。さらに、本事業の機能を全国的に運用していくことを見据えた手引書を作成するとともに、月1回のオンライン相談会の実施、専門家と連携した情報発信にも取り組み、事業の周知とコミュニティの拡充を図りました。

本事業で実施した内容

オンライン みんなのゆるっとカフェ(相談窓口対応)

開催日：毎月第3木曜日

対象：ミュージアム・アクセスに関心のある人全般

参加人数：延べ52名

実施内容

月に一回、ミュージアムのアクセスに関することを気軽に相談・共有できる場として開催。オンライン上で全国から異なる分野の参加者が集まり、参加者同士の交流やコミュニティが生まれる機会となりました。

北海道立函館美術館《つくる冒険》展における鑑賞プログラム実践(相談対応から企画、協働)

開催日：2025年8月24日、8月26日

場所：北海道立函館美術館

対象：視覚に障害のある人、聴覚に障害のある人、活動に関心がある地域の人、美術館ボランティアの人、美術館スタッフ

参加人数：延べ39名

協力者：北海道立函館美術館、
日本財団DIVERSITY IN THE ARTS

実施内容

北海道立函館美術館「つくる冒険 日本のアール・ブリュット45人ーたとえば、「も」を何百回と書く。」の関連イベントとして鑑賞プログラムを2回実施。美術館を楽しむ体験の第一歩として企画し、道内や市内に住む障害のある人、ない人、美術館で活動するボランティア、学芸員など多様な人が参加しました。地域住民と美術館の新しいつながりを生む交流会も行い、垣根を越えて美術館の楽しみ方を共有しました。

令和7年度埼玉県博物館連絡協議会南部地域研修会への企画協力(相談対応)

開催日：2025年11月6日

場所：埼玉県立近代美術館

対象：埼玉県博物館連絡協議会加盟館職員

参加人数：22名

協力者：埼玉県博物館連絡協議会、コーディネーター4名(視覚障害2名、聴覚障害2名)

実施内容

埼玉県博物館連絡協議会から相談を受けて、博物館職員が障害のある人(視覚・聴覚に障害のある人)への対応について学ぶ研修の実施に協力しました。研修参加者とコーディネーターがともに作品をみる鑑賞体験ワークショップを実施。ミュージアムや作品のかかわり方や楽しみ方を体験し、その後、埼玉県内のミュージアムで行われている取り組み事例の紹介が行われました。



令和7年度埼玉県博物館連絡協議会南部地域研修会への企画協力実施写真

モデル普及に向けた手引書制作

発行日：2026年3月

実施内容

ミュージアム・アクセス・センター(的機能)の全国展開や本格的な運用を見据え、本事業で培った経験をもとに、活動に役立つヒントや仕組みをまとめた手引書を制作・発行。実際に協働した文化施設やコーディネーターの声も取り入れ、具体的で実践的な内容に整理しました。

本事業で得られた成果

地域につながりを生み、条件に応じた支援体制を共につくる地域モデルの構築

令和7年度は、地域に応じて関係者を柔軟に組み合わせる仕組みづくりを進め、全国での実践を広げました。静岡・函館・奈良など新たに取り組みを開始した地域も含め、地域特性に合ったミュージアム・アクセスの形を模索しながら活動を展開しました。また、埼玉や東京では、令和6年度に続き、手話通訳のコーディネートや、障害のある人となない人が共に参加できる鑑賞

ワークショップを継続し、地域に根ざした活動を発展させました。

年間の実践は合計35件(対面18件＝静岡・北海道・埼玉・東京・宮城の5都道府県/オンライン17件＝主に東京・奈良の5都道府県が企画主体)で、延べ495名が参加しました。そのうち障害のある人は延べ122名でした。特に埼玉や北海道・函館地域では、障害のある人、手話通訳者、障害者芸術文化活

動センター等障害者団体、文化施設スタッフが連携できるよう、準備段階から意識的に協働の仕組みを組み込み、地域ごとに持続できる「地域モデル」を検討しました。結果、地域で活動する人同士のつながりが生まれ、文化施設が主体的に取り組みを継続するための基盤が整いつつあります。今後は、この地域モデルの共有と活用を進め、地域での実践の広がりを目指します。

広報の工夫から広がった、多様な人が関われる文化参加の土台づくり

令和7年度は、広報の段階から専門家の意見を取り入れ、「どんな人に、どのように伝えるか」を整理しながら情報発信方法を工夫しました。その結果、これまでミュージアムや文化施設になじみのなかった人にも活動が届き、参加者の幅が広がりました。企業関係者や地域住民、学生など、さまざまな立場の人が関わるきっかけにもな

りました。新たに始めた「オンラインみんなのゆるっとカフェ」や、継続しているオンラインの学びの場「みんなの“わ”」、函館や埼玉など各地で進めてきたミュージアムの環境づくりや鑑賞サポートの協働企画には、障害のある人やその家族、支援者、文化施設スタッフなど多様な参加者が集まりました。ともにミュージアムの楽しみ方や

利用しやすい工夫を考える機会が生まれました。誰もが利用しやすいミュージアムづくりは、特定の人のための支援にとどまらず、社会全体の価値観を広げる取り組みでもあります。今後も多様なつながりを大切にしながら、より多くの人が文化に関わり続けられる環境づくりを進めていきます。



みんなのゆるっとカフェメインビジュアル画像



みんなで美術館を楽しむ体験の第一歩―北海道立函館美術館《つくる冒険》展における鑑賞プログラム実践実施写真

事業実施における工夫

ポイント

本事業では、「障害のある人のために」ではなく「障害のある人とともに考え、ともにつくる」という姿勢を大切にし、障害のある人が主体的に関わる場づくりを重視してきました。令和7年度はこれに加え、地域の状況や参加者の条件に応じて関係者を柔軟に組み合わせる体制づくりを進めました。各地域の障害者芸術文化活動支援センターと連携し、地域に根ざした障害のある人や手話通訳者、支援者などに参加を呼びかけ、関わる機会を整えました。また、必要に応じてミュージアム・アクセス・コーディネーターを派遣しつつ、相談者が外部支援に依存しすぎない方法を検討し、地域が自走できる基盤づくりを意識して取り組みました。さらにオンライン上で自由に発言しやすい環境を整えたことで、地域を越えて支援者や障害のある人同士がつながり、情報交換や学び合いが生まれ、継続的なネットワークとして育つことが期待されます。

令和7年度 障害者等による文化芸術活動推進事業 文化芸術鑑賞の相談窓口、および鑑賞サポートの取組

団体名

Palabra株式会社

所在地：東京都新宿区

団体URL：http://palabra-i.co.jp/

事業URL：https://udcast.net/feature/accessibility-support-center25/

事業概要

障害者等に対する文化芸術活動の支援・拡充は、共生社会を目指すうえで欠かすことができない事業です。芸術的表現への参加もさることながら、文化芸術活動へのアクセスにおける情報格差の解消と、作品理解のための「鑑賞サポート」が必要です。しかし、障害当事者も私たちの社会全体も、まだこうした「鑑賞サポート」の認知度は低い状況であると言えます。本事業では、4年目となる鑑賞サポート相談窓口による当事者及び事業者支援と、その情報発信や同行鑑賞を通じて認知をすめ、「合理的配慮」義務化導入後の課題を調査し、より理想的な「鑑賞サポート」を提案、障害者が気軽に文化芸術活動に参加する機会が拡充することを目的としています。

本事業で実施した内容

鑑賞サポート相談窓口

開催日：通年実施

対象：文化芸術鑑賞に困りごとをかかえる当事者、鑑賞サポート提供を検討する事業者

実施内容

東京・大阪の2か所において、障害者の文化芸術活動へのアクセスや情報保障について相談や必要に応じて支援する窓口として開設した相談窓口(UDCast サポートセンター)を継続。2025年4月～12月の相談件数は149件。昨年の同時期に比べ1.3倍の件数となっています。相談者の内訳は、聴覚障害者が最も多く105件、視覚障害が15件、身体障害や重複障害が11件でした。また、事業者からの相談が18件ありました。また、情報取得が困難な視覚障害者の高齢者層の文化芸術鑑賞機会の拡充に向けての鑑賞支援事業では、2025年4月～12月で、クラシック音楽コンサート4公演4日、その他演劇・演芸・朗読・美術展24公演27日をサポート。総参加人数(同伴者含)は169名となりました。



鑑賞サポート相談窓口 イベント出展の様子

「合理的配慮」のスタートBOOKを利用した情報発信

対象：イベントや全国の文化芸術関連施設への配布、動画での拡散

実施内容

文化芸術分野における「合理的配慮」の考え方を広く周知する必要があると考え、昨年度の事業では冊子を作成しました。この冊子は文化芸術関連施設やイベント出展にて配布し、さらにショート動画を制作して動画配信サイトやイベントで公開することで、認知拡大に努めました。

こうした情報発信を通じて、他の文化芸術支援団体や、これまで「合理的配慮」に関心を持っていなかった層との交流が促進される取り組みとなりました。

鑑賞サポートに関する調査 (字幕の鑑賞方法に関する意識調査)

開催日：2025年11月

会場 オンライン

対象 聴覚障害者 参加人数127名

実施内容

現在、日本語字幕で映画を楽しむ方法には、日本語字幕付き上映、メガネ型端末での字幕表示、スマートフォンやタブレット端末での字幕利用の3種類があります。相談窓口には、日本語字幕付き上映に関する要望が多く寄せられていますが、事業者の判断によって実施されない場合もあります。この課題を踏まえ、当事者の声を可視化するために調査を行いました。調査では、127名から回答をいただき、具体的な意見を集約することができました。これらの結果は、事業者に向けた理想的な「鑑賞サポート」の提案に活用していきます。

さらに、本事業では、外国語映画や音楽ライブにおける鑑賞サポートについてもモデル事業を通じて調査を進め、障害者が文化芸術活動に参加する機会を広げるために必要な課題を整理していきます。

本事業で得られた成果

相談の質的高度化と中間支援機能の深化が進んだ一年

今年度の鑑賞サポート相談窓口では、相談総数は149件となり、「合理的配慮」の事業者による義務化がはじまった昨年度と比較して件数が増加しました。相談内容に関しても、身体障害・重複障害による相談が増え、「要望」が前年より増加していることから、相談の質が変化した一年であったといえます。これまでの取り組みにより、当事者が自ら事業者へ問い合わせや要望を行う機会が増えた結果、窓口にはより具体的で高度な調整を必要とする相談が寄せられるようになりました。これは、当事者の自走が進んだことに加え、窓口が単なる相談先から、専門的な知見をもつ中間支援としての役割を求められる段階へ移行していることを示しております。

また、事業者からの相談内容は、「合理的配慮」の義務化を背景に、実務的な検討や具体的なサポート内容に関

する問い合わせが増加いたしました。これにより、当事者と事業者の双方に寄り添い、「建設的対話」を促進する

調整役としての機能が一層重要となりました。



「合理的配慮」のスタート BOOK 画像

新領域での鑑賞サポートに不可欠となる「建設的対話」の基盤形成

今年度も、情報発信・同行鑑賞・調査事業・モデル事業を通じて、鑑賞サポートの質を高めるための実証的な取り組みを進めました。高齢の視覚障害者への情報提供や申し込み代行、冊子・動画による合理的配慮の啓発、さらに音楽ライブや外国語映画といった、公式での鑑賞サポートがまだまだ始まっていないジャンルでのモデル事業は、これまで個別対応で十分に支援が届かなかった層や領域に対し、

具体的なニーズを把握する貴重な機会となりました。これらの成果から浮かび上がったのは、鑑賞サポートを推進するうえで、慣例による思い込みや一方的な支援の押し付けではなく、当事者と事業者が作品の楽しみ方や互いの状況を理解してすすめる「建設的対話」の重要性です。特に、新しいジャンルにおいては、双方が前例のない状況に向き合うため、誤解や負担が生じやすく、

対話を仲介し調整する中間支援の役割が一層重要となりました。

今年度の調査・実証を通じて、中間支援が果たすべき機能は、単なる情報提供にとどまらず、当事者の声を可視化し、事業者と共有し、双方の理解を深める橋渡しであることが明確になりました。こうした基盤を整えることこそが、今後の鑑賞サポートの質向上につながると考えています。

事業実施における工夫

弊社は、映画・演劇を中心とした字幕・音声ガイド制作の実績を基盤に、作品提供者・障害当事者・制作者が直接意見を交わす「モニター検討会」を長年継続してきました。この三者協働のプロセスは、単なる意見収集ではなく、互いの前提や課題を共有しながら最適解を探る「建設的対話」の場として機能しています。このノウハウを活かし、ライブや外国語映画など、鑑賞サポートが未整備のジャンルにも積極的に展開しました。

「障害者等の文化芸術活動の推進体制の構築に関する業務」

鑑賞
機会創造
機会発表
機会作品
評価権利
保護販売
支援交流
促進相談
体制人材
育成情報
収集連携
協力

団体名

株式会社文化科学研究所

所在地：東京都渋谷区

団体URL：https://www.ifa.co.jp

事業URL：自治体ヒアリング調査結果(文化庁サイト) https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shogaisha_bunkageijutsu/1415475.html

有識者会議(文化庁サイト) https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsu/shokan_horei/geijutsu_bunka/shogaisha_bunkageijutsu/shogaisha_yushiki/index.html

事業概要

文部科学省及び厚生労働省では、障害者文化芸術推進法に基づく「第2期障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」を令和5年3月に策定しています。

本事業は、この基本計画に則り、計画等を策定し施策を推進している地方公共団体の具体的な事例についてヒアリング調査を行い、地域における計画等策定の経緯や策定に当たった課題、推進体制や推進状況などの実態を把握するものです。収集した事例については、主に地方公共団体を対象とした普及啓発・理解促進に役立てるため、まとめ資料を作成し、文化庁ウェブサイトにて公開します。また、「第2期基本計画」の推進を図るために国が開催する有識者会議の事務局業務を行います。

本事業で実施した内容

地方公共団体へのヒアリング調査

① 2025年8月22日 札幌市

計画名：札幌市文化芸術基本計画

ヒアリング対象：1：札幌市文化振興課

2：札幌市芸術文化財団

② 2025年9月9日、10日 福岡県

計画名：福岡県文化芸術振興基本計画

ヒアリング対象：1：福岡県文化振興課

2：福岡県障がい者文化芸術活動支援センター(FACT)

3：NPO法人アートマネージメントセンター福岡

③ 2025年9月30日

計画名：岐阜市文化芸術推進基本計画

ヒアリング対象：1：岐阜市文化振興課・障がい福祉課

2：岐阜市文化センター、ぎふしんフォーラム

3：岐阜市障害者生活支援センター

実施内容

地域計画を策定した自治体の担当部署に、計画の内容、計画策定の契機・目的、策定の体制、策定における調査、策定の作業内容、策定による好影響や今後の課題などについてヒアリングを行いました。合わせて、連携する支援センターや障害者文化芸術活動を行うNPO団体にもヒアリングを行い、計画策定による好影響や自治体との連携の状況を聞き取りました。調査対象の自治体は規模別(都道府県、政令指定都市、中核市)に1つずつ取り上げました。

障害者文化芸術活動推進有識者会議の事務局業務

開催日：2026年2月18日

会場名：TKP上野駅前ビジネスセンター(東京都台東区)

対象：有識者会議構成員約20名

実施内容

障害者文化芸術活動推進有識者会議の会場設営、運営業務を行いました。

本事業で得られた成果

地方公共団体の障害者の文化芸術推進計画策定時に参考となる事例の収集と公開用コンテンツ化

全国の各地域において、障害者がハードルなく文化芸術を鑑賞し、活動に参加し、作品を作り、それを発表していくにあたっては、地方公共団体側の効果的な支援が欠かせません。そのために必要なのが、障害者の文化芸術推進に関わる計画づくりと、その計画に則った推進体制の構築です。しかし、障害者の文化芸術推進についてのノウハウが必ずしも全ての地方公共団体に普及しているとは言い切れない現在、こうした計画づくりや推進体制の構築をどのように行っていくか見通しが持てないところも多いのが実態です。今回業務は、この点の改善を行うため、ノウハウ・知見不足で計画づくりや推進体制づくりに踏み切れない、あるいは思うように実施できていない地方公共団体に、その解決のヒントとなるわかりやすい事例を提供することを目的としています。

この目的を達成するため、今回は、規模別(都道府県、政令指定都市、中核市)に1つずつ、他の地方公共団体の参考となる計画づくりや推進体制づくりをしている地方公共団体を選び、実効性の高い計画・推進体制をつくるためのポイントについてヒアリングを

行い、事例集にまとめました。また、事例ヒアリングの実施に先立ち、地方公共団体の障害者文化芸術推進に詳しい有識者に、ヒアリングのポイントなどについての意見を聴取しています。事例の主な内容は下記の通りです。

①都道府県事例「福岡県文化芸術振興基本計画」

福岡県では障害者の文化芸術に関わる事業は障がい福祉課から文化振興課に移管されており、それを踏まえて文化芸術の推進計画の柱の一つに障害者の文化芸術活動推進を立てています。特徴ある取組として障害のある人が創作したアート作品のレプリカや作品画像データをレンタルや販売する「まごころアートFUKUOKA GALLERY 事業」があります。これについては、当初補助金事業として開始、その後、民間の事業として収益化するところまでの育成に成功しています。

②政令指定都市事例「札幌市文化芸術基本計画」

札幌市では、障害者の文化芸術活動推進について、文化振興課の文化芸術基本計画を、障がい福祉課の障

がい者福祉プランと連携をとって計画・推進しています。代表的な事業のひとつに少人数のワークショップである「子どものためのKitara 参加型音楽会」があり、令和7年度には大型のユニバーサル・コンサートも行われます。こうした事業を、地元の音楽家や社会福祉を学ぶ学生も見学しており、地域で社会包摂型事業が広がる動きに繋がりがつあります。

③中核市事例「岐阜市文化芸術推進基本計画」

岐阜市では、障がい福祉課の事業として、障害者週間に長年「オンリーワンわたしたちの芸術祭」を開催し、障害者による作品の展示と舞台公演を実施してきました。こうした経緯を踏まえ、障害者・高齢者の活躍の充実を重点施策とした新たな文化芸術推進基本計画を令和3年に策定、障害者に対する文化芸術についてのアンケート調査等の実施や、市有のホールの自主事業での音声ガイドアプリの導入、聴覚障害者劇団の手話劇への支援等の事業が始まっています。

障害者文化芸術活動推進有識者会議の円滑な開催

障害者文化芸術活動推進についての会議の開催支援を行いました。会議実施にあたっては、全国からの出席

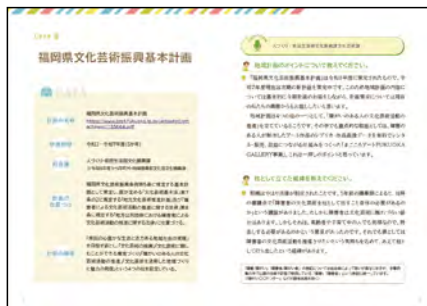
ができるようにウェブ会議を併用しつつ、そうした環境下でも、障害をもっておられる委員のコミュニケーション

に不自由が生じないよう、適切な情報支援を行いました。

事業実施における工夫

- 全体像を把握するため、計画の担当者だけでなく、関連部署や、事業実施において連携している文化芸術関係、障害者関係の団体など、複数の対象からのヒアリングを行いました。
- ヒアリング対象の選定と質問項目の作成に際して、地方公共団体の文化芸術に関わる計画に豊富な知見を持つアドバイザー2名(前年度より継続)より事前に助言を受けました。
- 有識者会議において、前年度、前々年度の事業実施の経験を生かし、チーム編成、システム構築と運営、手話通訳や点字翻訳、字幕などの情報保障対応を行いました。

ポイント



ヒアリング調査結果公開PDFより



令和7年度障害者等による文化芸術活動推進事業 障害者の文化芸術活動の実施状況調査

鑑賞
機会創造
機会発表
機会作品
評価権利
保護販売
支援交流
促進相談
体制人材
育成情報
収集連携
協力

団体名

株式会社シタシオンジャパン

所在地：東京都中央区

団体URL：https://www.citation.co.jp/

事業URL：https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shogaisha_bunkageijutsu/pdf/94361501_01.pdf

事業概要

本事業は、障害者等による文化芸術活動推進事業の一環として、「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」に基づく施策の推進に必要な基礎資料を整備することを目的に実施しました。全国の障害当事者等を対象とした定量調査を行い、文化芸術活動への参加状況や認識、情報取得、環境面に関する実態を把握しました。令和3年度調査との比較を通じた変化の把握に加え、専門家の助言を踏まえた新たな視点を取り入れることで、施策の到達度や課題を客観的に整理し、今後の施策検討に資する基礎情報の提供を図りました。

本事業で実施した内容

Webアンケート

取組名：障害者による文化芸術活動の実施状況等に関するWebアンケート調査

開催日(期間)：令和7年8月～10月

場所：全国(オンライン実施)

対象：全国の障害当事者(本人回答)および代理回答者

参加人数：2072名

実施内容

本調査では、全国の障害当事者等を対象にWebアンケート調査を実施し、文化芸術活動への参加状況や鑑賞・創作等の活動内容、情報の入手状況、合理的配慮や環境面に関する認識等を把握しました。障害種別や年齢等に配慮した設問設計とするとともに、本人による回答が難しい場合には代理回答も含めることで、回答者属性による偏りを抑え、幅広い当事者の実態を把握できるよう工夫しました。また、令和3年度調査との比較が可能となる設問を一部踏襲しつつ、新たな視点を加えることで、施策の到達度や変化を定量的に把握することを目的としました。

専門家ヒアリング

取組名：障害者による文化芸術活動の実施状況等に関する専門家ヒアリング

開催日(期間)：令和7年7月10日／11月11日

場所：オンライン実施

対象：障害のある人の文化芸術活動への参加や表現活動の可能性を広げるための研究・開発に取り組んでいる人物

参加人数：2名

実施内容

Webアンケート調査の速報結果をもとに、障害者文化芸術分野に知見を有する有識者へのヒアリングを実施しました。調査結果の解釈や分析の方向性について意見交換を行い、数値結果の背景にある要因や留意点について専門的な助言を得ました。その後、分析結果および報告内容についても継続的にディスカッションを重ね、有識者による指摘や補足的な視点を踏まえてレポート内容のブラッシュアップを行いました。これにより、定量データの客観性を担保しつつ、施策検討に資する示唆の整理を図りました。

本事業で得られた成果

障害当事者の文化芸術活動の実態と課題を定量的に可視化した基礎調査

本事業では、障害当事者の文化芸術活動に関する実態を、全国規模の定量調査として体系的に把握しました。これまで個別事例や印象論として語られることの多かった当事者の声を、数値データとして整理・分析することで、文化芸術活動への参加状況や認識、情報へのアクセス、環境面に関する課題を客観的に可視化した点が大きな成果です。

調査の結果、文化芸術活動の推進に向けた取組が一定程度進展している一方で、当事者の実感としては、十分に施策が届いていない層が存在することが明らかになりました。特に、活動に参加していない理由として、情報を得る機会が限られていることや、会場環境や合理的配慮に対する不安

が挙げられており、参加の可否が個人の意欲だけでなく、情報や環境といった構造的要因の影響を受けている可能性が示唆されました。

また、本人回答に加えて代理回答を含めた調査設計としたことで、年齢や障害特性等により直接回答が難しい層の実態も把握することができ、偏りの少ないデータ整備につながりました。これにより、障害種別や属性の違いに着目した分析も可能となり、文化芸術活動の推進における現状と課題を多面的に整理する基礎資料を提供することができました。

さらに、調査の速報結果および分析過程において有識者ヒアリングを実施し、数値結果の解釈や分析の方

向性について専門的な助言を得た点も、本事業の成果です。定量データと専門的知見を組み合わせることで、結果の妥当性を高めるとともに、施策検討に資する示唆の整理を行うことができました。

本調査で得られた成果は、今後の障害者文化芸術活動推進に向けた施策の到達度を確認し、課題を整理するための基礎情報として活用が期待されます。全国規模での実態把握を通じて、より多様な当事者に文化芸術活動が届く環境整備や情報提供のあり方を検討するための共通基盤を提示した点に、本事業の社会的意義があります。

事業実施における工夫

本事業では、障害当事者の声を印象論や個別事例として扱うのではなく、全国規模の定量データとして収集・分析することを重視しました。調査設計においては、障害種別や文化芸術活動の内容を体系的に整理し、鑑賞・創作・発表・情報認知・合理的配慮といった複数の観点から実態を把握できるよう設計した点が特徴です。

また、本人回答に加えて代理回答を含めることで、直接回答が難しい層の実態も把握可能とし、回答者属性による偏りを抑える工夫を行いました。

さらに、速報データの段階から有識者ヒアリングを実施し、分析の方向性について意見交換を行ったうえで、その後もレポート内容をたたき台とした継続的なディスカッションを重ねました。有識者による専門的な助言や補足的な視点を分析・報告内容に反映することで、定量データの妥当性を高め、施策検討に資する整理を行いました。

これらの取組は、特定の地域や分野に依存せず、調査設計と専門的知見の組み合わせにより全国規模で再現可能な手法であり、今後、他団体が類似の基礎調査や施策検討を行う際のモデルとなることが期待されます。

ポイント

あらゆる人に“みなと”がひらく ー横浜美術館 多様性に対応した社会包摂プログラムー

団体名

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団
所 在 地：神奈川県横浜市
団体 URL：https://pyafjp.org/
事業 URL：https://yokohama.art.museum/

事業概要

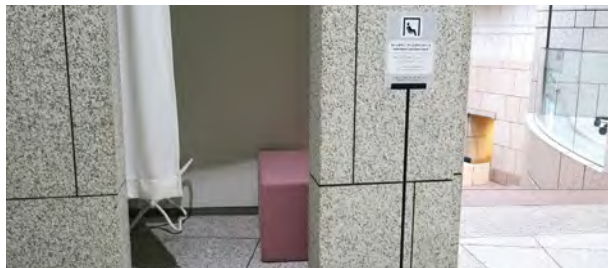
約3年間の改修工事を経て2025年2月に全館オープンした横浜美術館では、再開後の指針となる新たなミュージアムメッセージ「みなとが、ひらく」のもと、年齢、性別、出身、障害の有無に関わらず、多様な人々が集い、美術を通してさまざまな価値観や表現に出会う場をつくることを目指しています。長年の実績を基盤としながら、多様な来館者のさらなるニーズに応えるため、以下の4項目を軸とし、多岐に渡る事業を展開しました。

本事業で実施した内容

来館や鑑賞を支援する環境の整備

- ①カームダウン・クールダウンスペース設置
- ②センサリーキット貸出
- ③アクセスアドバイザー委嘱

感覚過敏や発達障害の方の来館サポートとして①②を整備。障害のある子どもたちの活動に立会い、助言を行うアクセスアドバイザーを委嘱。



カームダウン・クールダウンスペース

情報保障、主体的な鑑賞をサポートするコンテンツやツールの制作

- ①さわる建築模型(仮)試作
 - ②さわる建物鑑賞ツール(仮)制作に向けたリサーチ
 - ③「ソーシャルストーリー」配布
- 視覚障害者を始め、様々な方の来館体験を充実させる2つの「さわるツール」制作に向け、試作やリサーチを実施。主に発達障害の方に来館の流れをわかりやすく示した冊子(③)を配布。



さわる建築模型(仮)の試作検討会

多様な来館者のための造形・鑑賞プログラム

- ①ことばで一緒にみる鑑賞会

開催日：2025年9月7日(日)、2026年2月21日(土)
対 象：関心のあるすべての人、視覚や聴覚に障害のある人
参加人数：のべ49名

視覚障害者、晴眼者のナビゲーターと共に、視覚障害がある人となない人が会話を通じて企画展を鑑賞。

- ②手話/英語通訳付きギャラリートーク

手話通訳：2025年8月30日(土)、2026年2月14日(土)
英語通訳：2025年8月2日(土)、2026年1月24日(土)
コレクション展ギャラリートークを手話または英語通訳付きで開催。

- ③オンライン鑑賞会

開催日：2025年5月18日(日)、9月21日(日)、2026年3月14日(土)
対 象：関心のあるすべての人、来館が難しい人、発達障害・精神障害の人など

参加人数：のべ29名

来館が難しい方をオンライン(Zoom)で繋ぎ、交流しながら作品を鑑賞。

- ④のびのび造形じかん

開催日：2025年5月～2026年3月 各月1回土曜日
対 象：個別支援学級、特別支援学校等に通う小学生と保護者、きょうだい

参加人数：のべ419名

障害のある子どもたちが家族と共に自分のペースで創作。

- ⑤その他事業

- ・アウトリーチワークショップ 3回(高齢者施設、こども医療センター、青少年支援機関)
- ・学校対象の造形・鑑賞プログラム 22回(特別支援・養護学校、個別支援級を含む)

取組みの発信

「アクセスプログラム」チラシ配布、メールニュース新設、SNSによる発信等

本事業で得られた成果

最初の一步から始まる循環。多様な人の交流が生まれることの意義

本事業の対象は、身体・精神障害のある方、外国語を母語とする方、社会的自立に困難をもつ若者、子どもから高齢者まで多岐に渡ります。それぞれが感じる来館のハードルを軽減することで、誰もが平等に有する美術館を楽しむ権利を保障し、美術館があらゆる人の居場所となることを目指して各事業に取り組みました。

ニーズが不明瞭な中でのスタートでしたが、思わぬ反応を得たものもあります。例えば、センサリーキット(イヤーマフ、フィジエットイ等)の貸出を試行したところ、1か月で8件の利用があり、「忘れたので助かった」など利用者の声が寄せられました。他にも、主に発達障害の方への来館案内「ソーシャルストーリー」が大変役立つとSNS上で反応があるなど、心身の安心・安全は人間の最優先事項であり、これらのツールが安心材料となることが実感されました。また、主に身体・精神障害により来館が困難な方を念頭に企画したオンライン鑑賞会では、育児や

介護中の方、イヤホンなら声が聞き取れる難聴の方など参加理由は様々でした。「誰かのため」は「みんなのため」になるという普遍性を内包する気付きは、今後の指針になり得る可能性が感じられるものでした。まずは最初の一步を踏み出して相手に受け止めてもらい、そのフィードバックを細やかに捉えて次へと還元する――事業の効果は一方向の波及ばかりでなく、この循環をもって成立することが見えてきました。

一方、プログラム参加機会の拡充は、多様性への対応を目指す美術館の姿勢を利用者にキャッチしてもらい、美術館や美術との接点を広げる確実な成果となっています。また、日常で出会う機会が少ない人々の間に交流が生まれることも大きな効用として挙げられます。「学校のためのプログラム」では、外出機会が限られる重度の障害児や不登校児童とボランティアが笑顔でコミュニケーションしながら活動し、「ことばで一緒にみる鑑賞

会」では、視覚に障害のある人となない人が、互いの異なる視点に導かれ活発に言葉を交わして鑑賞を深めました。あるいは、プログラムを契機に連携した青少年支援機関やアクセスアドバイザー、医療関係者等との関わりは、美術館スタッフが異業種の現場について学ぶ機会にもなっており、よりよい社会をつくるという大きな使命のもと、互いを知り、協力し合う意識が醸成されました。参加者側、スタッフ側、関係団体など、プログラムに関わった人々が新たな気付きを得て、その意義を伝え合う様子は、社会への波及効果そのものと言えます。

活動を通じて、これらの事業は必要とする方に届けることはもちろん、公的機関としてその取り組みや情報を適切に発信し、社会での認知を広げること自体にも大きな意義があることが一層認識されました。共生社会の成熟に貢献できるよう、今後もその役割を意識しながら活動を継続、発展させていきます。



ことばで一緒にみる鑑賞会



手話通訳付きコレクション展ギャラリートーク 撮影：加藤南



のびのび造形じかん 撮影：加藤南

事業実施における工夫

ポイント

教育普及グループの造形(子ども、大人対象)、鑑賞の3チームが各々の専門性を発揮し、幅広い取組みを展開しました。障害のある人を対象とする事業に関しては、学校団体の受入れを長年継続してきた実績もあり、ある程度の活動基盤はある一方、福祉・介護等の専門性不足が課題でした。そのため、市内の社会福祉法人の協力を得て「アクセスアドバイザー」を委嘱し、障害のある子どもたちのためのプログラムに継続的に立会っていただきました。障害の特性やコミュニケーションの取り方、必要な配慮、家族や教員との意思疎通など、参加者募集から当日対応まで包括的な視点のもと助言を受け、悩み相談や意見交換を行うことで、より適切で安心・安全なプログラムを提供できました。

目でみて楽しむ ろう者の思い出と伝統人形芝居

団体名

公益財団法人現代人形劇センター

所在地：神奈川県川崎市

団体URL：http://www.puppet.or.jp/

事業URL：http://deaf.puppet.or.jp/

事業概要

取組み1では、全国の高齢ろう者向け施設やサロン活動を芸術家チームが訪問し、ボックスアートとビデオカメラを用いたワークショップを実施しました。ギフトボックスを土台に、思い出の風景や、風景の中の自分(人形)を造形。また、参加者相互に手話や身振りをつかってボックスアートの紹介を行いました。

取組み2では、一人遣いの伝統人形芝居「乙女文楽」をろう者・難聴者の観客がより楽しむための工夫を検討し、一般のろう者を対象とした交流公演を実施しました。内容はレクチャー、体験、「寿式二人三番叟」実演鑑賞によって構成。映像による非言語的な視覚表現を導入し、義太夫や鳴物のもたらす感覚を表現しました。

本事業で実施した内容

取組み1 ボックスアートとビデオを用いた高齢ろう者向け普及ワークショップ

芸術家チーム：花崎攝、榎本トオル、やなせけいこ、鈴木文、足立沙樹、中嶋秀人(手話通訳)

実施内容

以下の各会場にてボックスアート創作・発表のワークショップを実施。
7月20日(日)

会場：竹の塚障がい福祉館(東京都)
対象：デフケア・クローバー利用者20名

1月9日(金)

会場：宅ろう所 太陽と月(新潟県)
対象：太陽と月利用者18名

2月16日(月)

会場：西部ろうあ仲間サロン(鳥取県)
対象：西部ろうあ仲間サロン利用者20名



取組み1 ワークショップ風景



取組み1 ボックスアート作品(参加者作)

取組み2 アクセシビリティ技術を導入した 伝統人形芝居「乙女文楽」のろう者向け交流公演

技術協力：MATHRAX

操演：ひとみ座乙女文楽

◇試作実験

日程：11月11日、12月26日、1月28日

実施内容

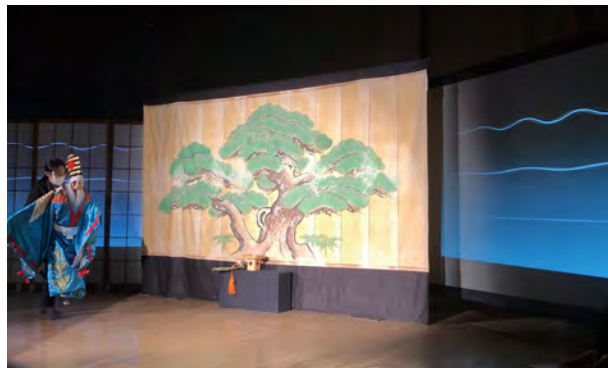
操演者、技術者、ろう者モニターが集い、義太夫と囃子、鳴物の視覚表現について実験し、意見交換を行いました。

◇交流公演

日程：2月28日(土)
会場：障害者スポーツ文化センター
横浜ラポール(ラポールボックス)
対象：ろう者、難聴者、中途失聴者40名

実施内容

- ・乙女文楽の紹介
- ・ミニ体験
- ・新たな工夫の紹介
- ・「寿式二人三番叟」上演
- ・質疑応答



取組み2 実験風景。スクリーン素材の検討

本事業で得られた成果

取組み1 ワークショップメソッドの簡略化・普及版化

本取組みは2021年度以来の「高齢ろう者×アートプロジェクト」の延長にあります。このプロジェクトでは高齢のろう者の個人史を題材に、当事者と芸術家チームが様々な手法を用いて表現活動に取り組んできました。今年度はそうした手法のエッセンスを抽出し、より多くの方に体験してもらえようパッケージ化と、パンフレッ

トの作成を目指しました。

実際にワークショップを複数回実施しながら、「有効なときもあるけれど、場合によっては参加者の創造性を限定してしまう要素」や、「事前に取り決めておくことで参加者がイメージを広げやすくなる要素」を見極めることができました。特に視覚情報を介して進行するワークショップにおいては、参

加者に渡す工作材料の選定や発表の方法は重要となるため、芸術家チーム内でも議論を重ねることとなりました。

さらに各施設のスタッフからも意見を収集することで、高齢ろう者向けワークショップのひな型として現時点で意義のあるものにまとめられたと考えま

取組み2 ろう者向け伝統人形芝居公演についての意見収集

本取組みではろう者・難聴者の観客が伝統人形芝居「乙女文楽」に親しむきっかけを創出しました。

ろう者モニターを交えた試作実験では、ろう者ならではの観点から乙女文楽の楽しみ方についての意見が挙がり、また音情報の視覚化についてはろう者どうしてもそれぞれに異なる立場をとった議論も交わされました。た

例えば、義太夫や囃子に使われる楽器の種類ごとの情報を求める立場と、それらが一体となった状態の雰囲気や抑揚の視覚表現を求める立場とは大きな違いがあります。さまざまなろう者・難聴者の意見を収集することで、具体性と抽象性のバランスを意識しながら、多くの人に納得感をもって受け入れられる表現を模索すること

ができました。

今後の課題として、こうして得られた知見を活用しながら、今よりも門戸を広げてゆくことがあげられます。また現在では聴覚障害を持つ実演者もあり、操演者の身体感覚にもより深く着目してゆく必要もあると考えます。

事業実施における工夫

取組み1 材料選定について

高齢のろう者が取り組む本ワークショップにおいては、「人形を作る」という大切な要素があります。ここで人形は、自立することができ、なおかつ手で持って操演もできることが求められます。しかし、身体機能や認知機能がそれぞれに異なる高齢の参加者にとって、一般的な劇人形のような造形は、それだけで大仕事になりかねません。また、一般施設にとっては材料の入手も大きなハードルとなります。

こうした課題を解消するため、芸術家チームのデフ・パペットシアター・ひとみ劇団員が割りばしとクリップで作ることのできる自立人形を考案しました。最小限の素材で最大限の創造性を引き出す工夫にあたっては、人形劇団としての知見が大きく活かしています。

取組み2 音情報ばかりにこだわらないこと

交流公演で取り組んだのは音情報の視覚化だけではありません。ろう者モニターからの意見を受けて、配布資料やレクチャー、舞台装置を通じて情報を補足しました。それぞれの観客が、人形の動きや視覚化された音情報以外の部分からも情報を得て、芸能についてのイメージを多面的に立ち上げられることを目指したためです。

たとえば、音情報を投影するスクリーンには障子タイプのパネルを使用しました。普通のスクリーンの方が投影像は美しいのですが、障子独特の格子構造もまた、ろう者の視角に和の雰囲気をもたらす具体的なモチーフとして有効だと考えられたからです。

そのほかにも、詞章の意味、振付が含みもつイメージなどを丁寧に共有することで、多様な観客がアクセスしやすい公演形態を実現することができました。

精神障害当事者の経験に基づいたオリジナル演劇の公演及び地域を超えた交流、普及啓発活動

団体名

OUTBACK プロジェクト

所在地：神奈川県鎌倉市

団体URL：http://outback-jp.com/

事業概要

2023年度、2024年度と継続して本助成を受け、精神疾患・精神障害当事者たちの実体験をもとにオリジナルの演劇を創作し、その作品を全国の様々な地域で上演する活動を「旅するOUTBACK」と称して今年度も実施しました。今年度は(1)これまでの創作メソッドをベースにしつつ、新たなテーマ「ひきこもり」をテーマに作品を創作し、(2)札幌及び本拠地のある横浜で公演を行い、(3)これまで交流を続けてきた松山の障害当事者との交流プログラムを行いました。

本事業で実施した内容

(1)「ひきこもり」をテーマとした作品創作のためのワークショップ

実施内容

「ひきこもり」は、精神疾患、精神障害当事者にとっては切っても切り離せないキーワードです。ひきこもっているからといって、必ずしも病気を発症しているわけではありませんが、精神疾患、精神障害当事者の多くは「ひきこもり」経験を持っています。そして、その経験は実に多様であり、家族、学校、会社のことなど、社会(他者)との関係の中で生じるさまざまなエピソードがそこには絡んでいます。ワークショップ参加者の「ひきこもり」経験を丁寧にシェアしながら作品を立ち上げ、最終的には「ひきこもっていいとも!～押入れからごきげんよう～」という、昭和のバラエティ番組のフレームを使い、誰にとっても親しみやすく、またユーモアをもってメッセージを届ける工夫を心がけました。

開催時期：2025年4月～8月(計24回)

ワークショップ場：反町地域ケアプラザなど

対象：精神疾患・精神障害当事者

人数：1回あたり約10名(延べ134名)

参加費：500円(1回あたり)

(3)松山の障害当事者との交流プログラム

実施内容

12月7日(日)に行った横浜公演に、松山で精神疾患・精神障害当事者及び支援者によって構成されているプロジェクト「太陽が笑うからねプロジェクト」のメンバーの数名を招き、朗読パフォーマンス、及びトークを行いました。

開催日程：2025年12月7日(日)

会場：あかいくつ劇場

対象：精神疾患・障害当事者、その家族、支援者など、一般市民

観客数：58名

(2)札幌、横浜での演劇公演+トーク

実施内容

ワークショップで創作した作品「ひきこもっていいとも!～押入れからごきげんよう～」を、札幌と横浜で上演。札幌では、「ひきこもり」を長年研究し続ける加藤隆弘先生と連携し、公演前日に札幌で開催された学会(集団精神療法の国際学会「IAGP2025」)で活動紹介をする機会を得て、当事者、家族、支援者のみならず、医療関係者にも鑑賞してもらうことができました。また、横浜では、札幌公演を経ての再演となりましたが、出演メンバーが多少入れ替わった事情から作品を手直しして上演。アフタートークに、精神科医・松本俊彦先生をゲストに招き、幅広い観客層に劇を届けることができました。

<札幌公演>

開催日程：2025年8月24日(日)

会場：ターミナルプラザこにパトス

トークゲスト：加藤隆弘先生(北海道大学)

対象：精神疾患・障害当事者、その家族、支援者など、一般市民

定員：演劇公演51名(有料43名、関係者8名)

入場料：2,000円

<横浜公演>

開催日程：2025年12月6日(土)、7日(日)
(2回公演)

会場：あかいくつ劇場

トークゲスト：松本俊彦先生(国立精神神経医療研究センター)

対象：精神疾患・障害当事者、その家族、支援者など、一般市民

観客数：演劇公演166名

(両日合わせて有料121名、関係者45名)

入場料：2,000円

本事業で得られた成果

「特別な物語から普遍的な物語へ」

精神疾患、精神障害のある人たちがつくった演劇というと、特殊な人たちの、自分とは遠い存在の物語であると受けとめられがちです。今回、「ひきこもり」というテーマを設定することで、

普遍的な、広く受けとめやすい作品として提示することができました。実際、観に来てくださった方からも、「自分(もしくは家族)にも似たような経験があった」という感想を多く聞くことができた。

また、そういった経験が必ずしもネガティブなものではなく、今の自分につながるもの、さらには未来へつながるものとして(前向きなものとして)提示することができたように思います。

「精神医療との新しい関係づくり」

精神医療における医療者と患者の関係は、医療者が「治す」という能動的な立場で、患者が「治してもらう」という受動的な立場におかれがちです。そのような中で、OUTBACKの当事者たちによる演劇作品を医療者に観てもらふことにより、患者が必ずしも

受動的な存在としてではなく、能動的、主体的な存在として、1人の表現者として出会うことの可能性を示唆することができました。札幌では加藤隆弘先生、横浜では松本俊彦先生に公演を鑑賞していただき、アフタートークにも登壇していただきました。両者の

おかげで、様々な医療関係者たちが鑑賞してくださり、改めて当事者の持つ力強さを知ってもらうことができ、当事者にとって表現活動がいかに重要なものであるかを知ってもらう機会をつくることができたと思っています。

「当事者同士によるエンパワメントあってこそ」

松山の当事者との交流は2023年から継続していますが、今年度の交流により、改めて直接出会うことの重要性を感じました。昨今オンラインを使えば、簡単に人と人はつながれるようになりました。けれども、本当の意味で刺激を与え合い、次への一歩を踏み出すための力、勇気ある一歩を踏み出させるエンパワメントの力は、直接出会うことでしか生み出し得ないものであることを確信することができ

ました。病気、障害を抱えながら旅をすること、演劇活動をする苦労、そして喜びを分かち合う姿には、確実に「次なるもの」を目指そうとする意思の力を見ることができました。当事者同士のエンパワメントあってこそ、障害当事者による芸術文化活動の普及であることを、横浜の会場にいられた全ての人に知ってもらうことができたように思います。



(2) <横浜公演>1 横浜公演の様子



(2) <横浜公演>2 横浜公演の様子



(2) <札幌公演>1 札幌公演の様子



(2) <札幌公演>2 札幌公演の様子

ポイント

事業実施における工夫

当事者の個別性の高い体験を尊重しながらも、観に来てくださる多種多様な背景を持った人たちと共有できるテーマ(物語)を設定することの重要性を感じました。それを実現させるためには、当事者、そしてそのプロジェクトに関わるアーティスト、スタッフの間での丁寧なコミュニケーションが必須です。また、当事者同士が出会い、刺激を与え合うことでエンパワメントできる環境を設定し、整えることを意識的にやっていくことも心がけました。

地域の医療現場と公立文化施設で支える医療的ケア児や重度心身障害児者の参加するインクルーシブな創作環境モデル展開事業

団体名

医療法人社団オレンジ

所在地：長野県北佐久郡軽井沢町

団体URL：https://hotch-l.com/

事業URL：https://note.com/hotch_lodge/n/n08895f9bffd1

事業概要

本事業では、人々の多様性を認め、つながりを回復する「ソーシャルサーカス」の活動を地方に根付かせるため、次の3軸を一体とした取り組みを長野県内2拠点、福井県、富山県、岐阜県で推進した。

- ①アーティスト養成プログラム…地方で活動するアーティストがインクルーシブな活動の意義を理解し、自ら計画・実践できるようサポートする。
- ②ワークショップ形式による一般公募型オーディション…サーカス公演「ムーンナイトサーカス」に向けたオーディションを行う。①で育成されたアーティストも企画運営に関わる。
- ③公演の制作と上演…公共文化施設の主催または共催事業として公演を制作・上演し、多様な人と取り組むためのノウハウを共有していく。

本事業で実施した内容

①アーティスト養成プログラム「つながるサーカスキャラバン in ぎふ」

開催期間：2025年11月25日～27日

場 所：医療法人かがやき(岐阜県岐南町)、
可児市文化創造センター ala・可茂学園
(岐阜県可児市)

参加人数：6名

参加費：実費負担のみ

実施内容

座学による事例紹介とソーシャルサーカス体験ののち、ワークショップを制作、障害者支援施設で実践。



アーティスト養成ワークショップの様子

③公演の制作と上演

開催期間：2025年8月31日～(稽古)、2026年2月
21日・22日(上演)、3月21日(上演)場 所：茅野市民館(2月)、松本市波田文化セン
ター アクトホール(3月)入 場 料：(会場により変動)大人3,000円～4,500
円、小人・障害のある方1,000円～2,500
円等

実施内容

②一般公募型オーディションで選出された一般公募キャストも参加するサーカス公演「ムーンナイトサーカス」の上演。

②一般公募型オーディション「サーカスをつくろう！」&公開ワークショップ「ドキドキ★サーカスたいけん！」

〈オーディション〉

開催日と場所：2025年8月1日～2日・10日(塩尻市総合
文化センター、おやか総合福祉センター)、
10月26日・11月1日～2日(佐久市生涯学
習センター、佐久市コスモホール)、10月
12日(サンドーム福井)対 象：年齢不問、からだの状態や能力不問。障
害や病気、医療的ケアと共に生きている、
またはそうした人との活動に興味と共感
をもっていること。参加人数：12名(長野県塩尻市・岡谷市)、
15名(同佐久市)、17名(福井県越前市)

参加費：1,800円～5,500円

実施内容

ワークショップ形式で進行し、最終的に短いパフォーマンスを制作。公演に出演するキャスト・演目候補を決める。

〈公開ワークショップ〉

開催日と場所：2025年10月11日(エンゼルランドふくい)、
11月22日(富山県こどもみらい館)・23日
(おおの天空パーク OSORA)

参加人数：各150～200名

参加費：無料

実施内容

空中芸エアリアルとジャグリングの体験ワークショップ、ミニパフォーマンス



オーディションの様子

本事業で得られた成果

自由な創作の現場が確保されることで、芸術的・創造的・社会的価値が生まれる

3日間の連続ワークショップや半年間の稽古期間など、例年よりじっくりと実験や模索の時間を設けることで、アーティスト同士で触発し合ったり、これまで舞台経験のない参加者からも個性的なパフォーマンスが引き出されたりと、作品の芸術的・創造的価値にとって不可欠な活動にじっくり取

り組むことができました。

それだけでなく、障害の有無にかかわらず、本人も知らなかった自分の個性や新しい可能性に出会うことは生きる喜びにつながるものであり、互いへのリスペクトも生み出していくことも再認識されました。特に学童期にある10代までの若者にとって、特別支

援学校や支援学級の拡充で多様性にふれる機会が限られている中、お互いへのリスペクトをベースにしたコミュニケーションやニーズ理解が自然な形で進んでいく様子が見られています。このことは、障害当事者の自立生活を支えていく上で重要な社会的寛容を育てているといえるでしょう。

医療的ケア児をはじめとする障害当事者とその家族の自立支援

医療的ケアや重度の障害があり、学校以外の課外活動には保護者の同席が求められるケースに対しては、法人内の看護師やケアワーカーを配置し、ご家族の見学を一律お断りしました。参加者が一人で参加するからこそ引き出される表情が見られ、ふだん関わっていない介助者から医療ケア

の頻度や介助方法についてフィードバックを行うことで、生活上の工夫や挑戦にもつながりました。

また、アーティスト自身も参加者それぞれのニーズを理解し、食事の見守りやトイレの声掛けなど、できる部分はケアにも関わりました。こうしたケアの体験を専門職以外の人にも共有

することで、助けを求め、助けに応じることの心理的ハードルがお互いに下がっていきます。本来の意味での自立とは、このように助け合いながら自己実現を叶えていくことであるという実感が得られました。

公共文化施設へのノウハウ伝達

今年度は、地域の公共文化施設とともに企画運営していくネットワークづくりにも取り組みました。「合理的配慮や環境整備を進めたいが、事業的・予算的制約で、自分たちだけでは

取り組みが進まない」という会館に対し、企画広報・接遇上のノウハウを伝達し、顧客開発、事業評価を行っています。今後、多くの地方の公共文化施設では予算縮小が予想されますが、

都心からイベントを買い取る既存の興行モデルではなく、地域で循環する文化環境づくりに重点を置き、私たちの活動を長く続けられるような基盤を拡充していきたいと考えています。



一般公開ワークショップの様子



稽古の様子



「ムーンナイトサーカス」上演の様子

事業実施における工夫

医療福祉ケアを包括的に扱うほっちのロッヂでは、参加者募集の段階から法人内外の訪問診療や児童発達支援・放課後等デイサービスのチームと連携し、医療的ケアがあり、外出にハードルを感じている本人や家族・きょうだいに積極的に声がけを行いました。ワークショップ中はなるべく本人の力を引き出すため、ご家族の見学はお断りし、医療ケアに不安のある参加者については看護師を配置したり、任意のできる範囲でアーティストもケアに参加したりしました。

「表現未満、プロジェクト」～浜松市中心市街地から始まる新しい価値創造の実践及び「表現未満、センター」共創事業

団体名

特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ

所在地：静岡県浜松市

団体URL：https://cslets.net/

事業URL：https://cslets.net/wp/project/chimatabunkasai2025 https://cslets.net/wp/project/100htour-top (一部事業抜粋)

事業概要

当法人が提唱する「表現未満、」は一人一人にある自分を表す行為を「表現」ととらえ大切にしてい文化を育て、人の存在そのものを認めていく活動です。2016年より行っている「『表現未満、』プロジェクト」は、重度知的障害者を核としながら文化的手法を通して既存の価値観を揺さぶり、地域コミュニティを再構築し、社会に問いを投げかけています。本事業では浜松のまちなかの3つの拠点を地域に開き共生社会を体感するアートイベントや場づくりを展開。さらに観光事業のリサーチを通じたアートプロジェクトの検証と障害者芸術の再考を行いました。

本事業で実施した内容

1. 共生社会を目指したまちづくりの拡充～障害者の存在を軸としたアートによるまちづくり～

場 所：浜松市中心市街地（ちまた公民館、ちまたパーク、たけし文化センター連尺町）

参加人数：3000人（1月14日時点）

実施内容

①ちまた公民館

開催期間：4月15日～2月28日

講座開催：114回（1月14日時点）

障害のある人もない人も利用できる「ちまた公民館」を運営。市民を対象に各種講座を開催。

②ちまたパーク

開催期間：9月20日～2月28日

浜松の中心市街地（まちなか）にあるレッツの私有地を「パーク」として市民に開放。様々なイベントも開催。

③ちまた文化祭・みんなでつくる凸凹まつり2025

開催期間：9月20日～12月20日（75日間）

まちなかで活動する各種団体やアーティストらとともに準備・開催。参加した市民が主体となるワークショップやトークイベント、まちなかの各種団体や市民で作りあげる「まつり」の実施。

④アーティスト・イン・レジデンス

アーティストの村上慧氏と市民とともにまちなかに井戸を掘った。



市民とつくるパレード当日の様子・繁華街を練り歩く

2. 障害福祉施設から立ち上がるアートプロジェクトの検証～新しい価値創造にむけて～

実施内容

①観光事業リサーチ

2016年度以降のタイムトラベル100時間ツアー参加者を対象にアンケート調査を行った。その中から承諾があった方に追加でインタビューを行った。また、「かしだしたけし」での行き先であった教育機関関係者にもインタビューを行った。インタビュー：25名、アンケート送付：251名、アンケート到達：220名、アンケート回答：35名（福祉関係者20%、学生25%、文化芸術関係者11%、教育関係者17%）

②事例視察（浜松、東北、北海道など/6か所12回、12名参加）

連携先の開拓として、福祉施設への視察とディスカッションを行った。

③プログラム開発

地域活動家の小松理虔氏をアドバイザーとして、新規プログラム開発のための視察（福島）とディスカッションを行った。

④プログラム実施

●タイムトラベル100時間ツアー（12回）

一般の人を対象とした、重度知的障害者と過ごす1泊2日の観光ツアーを行った。

●かしだしたけし（10回）

重度知的障害者が全国各所（大学、小中学校、文化施設、講演など）に出張した。



かしだしたけし：11月エイブル・アートムーブメント・30周年記念フォーラム（京都）

本事業で得られた成果

「共生社会を目指したまちづくり」の拡充～障害者の存在を軸としたアートによるまちづくり～

当法人が2016年から始めた「表現未満、プロジェクト」は重度知的障害者の存在を核として浜松市中心市街地で活動・実践を続けてきました。文化創造拠点「たけし文化センター連尺町（2018）」、地域活動支援センターとフリースペースを融合した私設私営の公民館「ちまた公民館（2022）」そ

して本事業では新たに暮らしや生活がテーマとなる新拠点「表現未満、センター（2028予定）」の建設予定地において、「ちまたパーク」という市民が集う遊び場を実験事業として展開。さらにその場所で「ちまた文化祭」と題して3か月にわたるアートイベントを行い60以上の地域共創事業を展開

しました。同時に、多様な拠点を運営することで重度知的障害者以外にも精神・発達障害・子どもなど様々な方の居場所をつくり、彼らが社会に接続する機会を文化芸術を通じて生み出しています。複数の事業を通じて市民による文化創造の機会を創出し、浜松のまちづくりまで発展させています。

障害福祉施設から立ち上がるアートプロジェクトの検証～新しい価値創造にむけて～

昨年度から「新しい価値創造」をテーマに京都哲学研究所など外部の団体と共に既存の社会的価値観を問う事業を展開しています。今年度は当法人が毎月行っているアートプロジェクト「タイムトラベル100時間ツアー」の検証を行いながら、障害者及び障害者施設におけるアートプロジェクトの可能性と、障害者芸術の在り方の検証を行いました。

アンケート・ヒアリングの分析を通じて、障害者の存在を顕在化するプロジェクトが参加者の社会的価値観を揺さぶり、生産性や合理性が重要視される現在の社会や障害福祉サービス事業そのものを問う事業として機能していることが明らかになりました。

同時にこの手法は作品中心になりがちな障害者の芸術・文化のあり方にも一石を投じ、障害者のありのままの

姿を顕在化させることがアートプロジェクトとして発展しうるということを明らかにしました。また9月に開催された国際会議「第一回京都会議」にも出席。今後は国内外で活動する団体との共創事業の始動など、今回の検証をもとに連携事業の展開を拡大したいと考えています。



ちまたパークによるアートイベントの様子



ちまた公民館講座の様子



タイムトラベル100時間ツアー：全国から多様な人が参加

事業実施における工夫

多様な地域ステークホルダーと連携した福祉施設の社会資源化

障害者施設を拠点として障害のある人が中心市街地で活動し、25年間の実績を通して培われた様々な地域のステークホルダーと協働することを重視しています。それは福祉施設の可能性を広げ、多様な人が共に生きる新しいコミュニティづくりへの布石となっています。

障害のある人を核としたアートプロジェクトの開発

今回検証の対象となった「タイムトラベル100時間ツアー」「かしだしたけし」といった障害者のありのままの姿を社会に顕在化していく事業は「アートプロジェクト」として全国的に注目されていると同時に芸術分野においても評価を得ています。こうした強みを活用して事業を展開しています。

社会の価値観を問う障害者芸術の再考

障害者の作品作りや鑑賞の機会の拡大とは違う、障害者の存在そのものをアートの手法を通して多様に関く当法人の事業は、障害者及び障害者施設、さらに障害者芸術の可能性を拡張する事業として注目されました。

大学から地域の障害児者に音楽を普及するモデルの構築 —オーダーメイド・アウトリーチを通して—

団体名

国立大学法人滋賀大学

所在地：滋賀県彦根市

団体URL：https://www.shiga-u.ac.jp/

事業URL：https://www.otosapo.com/

事業概要

障害児者の音楽教育を目的とした滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センターを拠点として、①特別支援学校・特別支援学級等を対象とした音楽のオーダーメイド・アウトリーチ、②音楽や特別支援学級の教員研修会、③ホールでの誰もが楽しめるコンサートを実施しました。どのプログラムも参加者のニーズや希望に添って、オーダーメイドで制作していることが特徴です。今年度から療育センターなどにも訪問の場を広げ、プログラムの種類も増やし、約1,000名の子どもたちやご家族、教職員に音楽をお届けしました。大学センターから地域の学校等にアウトリーチを派遣する体制は、大学の資源を活用して音楽を普及するひとつのモデルになると考えます。

本事業で実施した内容

【取組1】特別支援学校・特別支援学級等へのオーダーメイド・アウトリーチ(音楽)

開催期間：2025年9月～2026年2月

- ①9月10日 大津市立大石小学校「世界の音楽プログラム」
- ②9月17日 湖南市立三雲東小学校「世界の音楽プログラム」
- ③9月24日 大津市立中央小学校「打楽器プログラム」
- ④9月29日 甲賀市立雲井小学校「音楽療法プログラム」
- ⑤10月8日 草津市立玉川小学校「打楽器プログラム」
- ⑥10月14日 甲賀市立甲南中学校「世界の音楽プログラム」
- ⑦10月15日 甲賀市立伴谷東小学校「打楽器プログラム」
- ⑧10月15日 大津市立志賀中学校「世界の音楽プログラム」
- ⑨10月29日 湖南市立石部小学校「打楽器プログラム」
- ⑩11月10日 大津市立比叡平小学校「和楽器プログラム」
- ⑪11月18日 守山保健医療センター「音楽療法プログラム」
- ⑫11月19日 大津市立真野小学校「打楽器プログラム」
- ⑬12月1日 大津市立富士見小学校「歌プログラム」
- ⑭12月9日 滋賀大学教育学部附属特別支援学校「まもうたプロジェクト」
- ⑮12月11日 滋賀県立長浜養護学校「打楽器プログラム」
- ⑯2月6日 滋賀県立守山養護学校「打楽器プログラム」

実施内容

滋賀県内の特別支援学校と、滋賀県大津市、草津市、甲賀市、湖南市の小中学校の特別支援学級、療育センターを対象に公募し、オーダーメイド・アウトリーチを15校、1施設で実施しました。ニーズや希望に沿ったプログラムを制作していることが特徴です。打楽器・和楽器・世界の音楽など、内容は学校が選択できるようにしています。リクエスト曲以外はある程度プログラムが決まっているセミオーダーメイドと、子どもの実態に合わせて全てを作り上げるフルオーダーメイドのプログラムがあります。



打楽器プログラムの様子

【取組2】教員研修会

開催日：①7月31日

対象：滋賀大学教育学部附属特別支援学校夏季実践ワークショップ

開催日：②9月29日

対象：京都市音楽教育研究会 総合育成支援教育研修会

実施内容

京都市の音楽教育研究会や滋賀大学教育学部附属特別支援学校の教員研究会と連携して、音楽療法士や特別支援教育に豊富な経験を持つ音楽の教員による実践的な研修を実施しました。

【取組3】ホールでの誰もが楽しめるコンサート

開催日時：2月1日 おとさぼファミリーコンサート

①13:00開演 ②15:00開演

対象：障害のある方とご家族、一般の方(各回80名募集)

場所：栗東芸術文化会館さくら 小ホール

参加費：入場無料

実施内容

「広場のようなコンサート」をイメージし、マットなどをつかった自由な席、出入りも自由、楽器コーナーへ行って一緒に音楽に参加、歌う、踊る、跳ねる、手拍子する、歩くなど、自由に楽しめる少人数制のコンサートを提案しました。当事者のアーティストの出演やホワイエでのアール・ブリュット展も同時開催しました。



おとさぼファミリーコンサート

本事業で得られた成果

多様なニーズや希望に対応するオーダーメイド・アウトリーチ

特別支援学校・特別支援学級等を対象に実施したオーダーメイド・アウトリーチとは、対象者の障害や発達を考慮するだけでなく、ニーズや希望に寄り添ったアウトリーチです。学校と

演奏者やスタッフが丁寧な打ち合わせをし、プログラムを作り上げることが特徴です。今年度は15校、1施設で実施しました。一から作り上げるフルオーダーメイド・プログラムと、リク

エスト曲などで学校の希望に対応するセミオーダーメイド・プログラムがあります。公演では踊り出す子どももよく見られ、充実した体験ができたという好評です。

音楽や特別支援学級の教員を対象とした教員研修会

教員養成大学がもつ教員研修の経験や教員研究会とのつながりを活かして、音楽や特別支援学級の教員を対象に研修会を実施しました。講師

は、音楽療法士や特別支援教育に豊富な経験を持つ音楽の教員で、実践的な内容となっています。日々多くの子どもたちと接する教員に研修の機

会を提供することによって、障害のある子どもたちへの音楽教育の波及効果が期待できると考えます。

ホールでの誰もが楽しめるコンサート

「広場のようなコンサート」をイメージし、マットなどをつかった自由な席、出入りも自由、楽器コーナーへ行って一緒に音楽に参加、歌う、踊る、跳ねる、手拍子する、歩くなど、自由に楽し

める少人数制のコンサートを実施しています。学校等でのアウトリーチに参加するだけでなく、ホールへ家族とコンサートに出かける経験につなげることを目指しています。2年度目となり

ましたが、毎回募集からすぐに満席となっています。コンサートでは歌ったり、踊ったりして、音楽に入り込む子どもの姿が見られます。



世界の音楽プログラムの様子



和楽器プログラムの様子



教員研修会の様子

事業実施における工夫

ポイント

教員養成大学の知的・人的資源を活用した音楽アウトリーチ、地域の学校とのつながりを活かした教員研修を実施しました。教職員への丁寧な打ち合わせで、参加者の希望に寄り添うオーダーメイド・アウトリーチでは、全てを作り上げるフルオーダーメイドに加え、リクエスト曲などでカスタマイズするセミオーダーメイドで、より多くの子どもたちに普及できるよう工夫しています。さらに、誰もが自由に楽しめるコンサートを提案し、学校等でのアウトリーチに参加するだけでなく、ホールへ家族とコンサートに出かける経験につなげることを目指しています。

団体名

一般社団法人HAPS

所在地：京都府京都市

団体URL：https://haps-kyoto.com/

事業URL：https://haps-bunka.space/（R7年度までの情報を掲載）

事業概要

本事業は、公立美術館における障害者等の関わる文化芸術活動（発表、鑑賞）に関する多面的な手法を大きく発展させ、積極的に活動に取り組める状況を創出することを目指しています。公立美術館の学芸員、教育・普及担当員等の職員、アーティスト、現代美術のキュレーターらとともにその基盤を作ることを目的とし、カンファレンス（交流・共有・学びの場づくり）、未来の美術館構想講座（ミーティング・展覧会）、アーカイビング、リサーチ（～2023年度）、パイロット事業（～2024年度）に取り組んでいます。

本事業で実施した内容

カンファレンス

障がいのある人の「作品」について考える研修会
〈「作品」が生まれる現場から見えてくるものはなにか〉

美術館等で勤務する学芸員を対象に、障がいのある人の「作品」について考える機会を設けました。

開催日：2025年8月29日（金）

会場：やまなみ工房（滋賀県甲賀市）

対象：美術館等の文化施設に勤務する学芸員

参加費：無料

実施内容

- ・やまなみ工房で創作活動を行う西橋直樹、森雅樹、山本愛の作品を鑑賞
- ・アトリエ見学
- ・ラウンドテーブル：プログラムの振り返りなど

ゲスト：山下完和（やまなみ工房施設長）、藪前知子（東京都現代美術館学芸員）、奥山理子（Social Work / Art Conference、本事業ディレクター）

未来の美術館構想講座—Meeting

「もぞもぞする現場 4 芸術と障害にかかわるひとたちの、アセンブリー」

過去3年間の取組で育成されてきた市民コミュニティ「もぞもぞさん」が展覧会で実施するプログラムを考案し、実践しました。

実施日：①2025年8月30日 ②10月5日

③11月15日 ④12月20日

⑤2026年1月11日/17日 ⑥2月7日

場所：京都市立芸術大学、アトリエみつしま（京都市）

未来の美術館構想講座—展覧会

「もぞもぞする展覧会 しつづける あいだに」

奥村一郎（和歌山県立近代美術館）氏をゲストキュレーターに迎え、〈たんぼの家アートセンター HANA〉の所属作家と会場となる〈アトリエみつしま Sawa-Tadori〉のオーナー／美術家の光島貴之氏の作品を展示しました。会期中は「もぞもぞさん」による多様な鑑賞アプローチの実践を試みるほか、トーク、ワークショップも開催しました。

会期：2026年1月6日～1月18日 会期中無休

会場 アトリエみつしま Sawa-Tadori（京都市）

入場料 無料

出展作家：荒井陸、中村真由美、福岡左知子、舟木花、宿利真希、山野将志、光島貴之

アーカイブ

将来的に有効な資料を保存することを目指し、事業全体を包括するデジタルアーカイブを設計。各事業に関するデータベースを関係者間で適切かつ効果的に記録、管理できる仕組みをつくっています。今後、障害のある人の文化芸術活動を推進するため、公開可能な資料については、慎重に検討を重ねたうえで公開しました。

事業評価

外部の評価者を設定し、1年を通してプログラムへの参加、ヒアリング、評価を行いました。

本事業で得られた成果

「作品」が生まれる現場を訪ね、「作品」を取り巻く人々・環境・仕組みを考える

過去3年間の取り組みを発展させる機会として、カンファレンス。会場には充実した制作環境で国内外から注目を集める障がい福祉施設・やまなみ工房を選定しました。参加対象を美術館等の文化施設に勤務する学芸員へと広げたことで、全国各地からの参加があり、活気ある研修会となりました。

研修では、異なる方法で制作する3名の作家の作品を並べて鑑賞した後、多くの障がいのある人が制作するアトリエを見学しました。これにより、これまでのカンファレンスで顕在化してきた、障がいのある人の「作品」を扱うことの難しさについて、参加者それぞれが考えるための手がかりを持ち帰ることができました。また、本研修会の記録映像を公開することで、同様の研修会の開催を後押しするとともに、各地域で活動する学芸員の知見がさらに広がっていくことを期待しています。

展覧会を企画・実施し、多様な鑑賞方法を試みる

今年度は、和歌山県立近代美術館の学芸員である奥村一郎氏を招聘し、過去3年間にわたり議論と実践を重ねてきた試みを、展覧会の開催を通じてさらに推し進めることを目標としました。「もぞもぞさん」と名付けた市民コミュニティによるMeetingは、展覧会を挟んで計6回開催し、奥村氏との対話を軸に、展覧会のプログラムを構想することに多くの時間を費やしました。

展覧会は、視覚障がいのある美術家・光島貴之氏が運営する「アトリエみつしま Sawa-Tadori」を会場とし、「たんぼの家アートセンター HANA」と光島氏の作品を展示しました。「寝ころがる」「触れる」「踊る」「着る」「休む」「音を出す」といった行為を会場に持ち込むことで、通常の展覧会に伴う堅苦しさを解きほぐし、障がいのある方にもない方にも、これまでと

は異なるかたちで美術作品にアプローチできる場をつくりました。会期中は、もぞもぞさんによるワークショップやトーク、制作体験、さらに障がいのある方の支援に関わる人々と語り合う場づくりなども行いました。来年度以降は、公立美術館との協働を目指して取り組みを発展させていきます。

「美術館」と「障がい」のあいだを繋ぐ思考や実践をまとめる

カンファレンスや未来の美術館構想講座など、それぞれの事業を実施するきっかけとなった問いとその応答

として取り組んできたプログラムの数々を相関図としてまとめることができ、アーカイビング資料への誘導を高め

る工夫を行いました。



撮影 平居紗季



撮影 中谷利明



撮影 中谷利明

事業実施における工夫

本事業は「美術館」と「障害者等の芸術文化活動」の関係性の進展・改善に焦点をあて、学芸員らによる学びの場であるカンファレンス事業、市民鑑賞者グループの育成を試みる講座事業、展覧会事業、アーカイブ、外部評価といった多様なレイヤーで同時進行していることが特徴です。これらの成果は過去3年間の記録と併せ、類似事業に携わる方々への活用を目的として、デジタルアーカイブにて公開しています。

団体名

株式会社京都新聞ホールディングス

所在地：京都府京都市

団体URL：https://www.kyoto-np.co.jp/

事業URL：https://connect-art.jp/

事業概要

「CONNECT ⇄」(コネクト)は、アートを通して、多様性や共生社会のありかたについて、障害のある方もない方も共に考え、語り合い、実践するプロジェクトです。

京都の文化ゾーンである岡崎公園エリアの美術館、図書館、劇場、動物園、展示会場など6つの文化施設が連携。障害者週間(12月3日～9日)を含む17日間、展示やワークショップ、トークなど、総計22のプログラムを展開しました。6年目を迎えた今年のテーマは、「こちこちの こちを こちあう」。あなたと私の「こちこち」を解きほぐしあう＝「こちこちあう」体験の場をつくります。

本事業で実施した内容

全体概要

取組名：CONNECT ⇄ こちこちの こちを こちあう
会 期：2025年11月28日(金)～12月14日(日)
会 場：京都国立近代美術館、京都市京セラ美術館、京都府立図書館、
ロームシアター京都、京都市動物園、京市勤業館 みやこめっせ
来場者数：約5200名(京都国立近代美術館のみ)
実施プログラム：CONNECT ⇄ プログラム5件、施設プロ
グラム14件、連携プログラム3件を実施。

CONNECT ⇄ プログラム

CONNECT ⇄ の全体コンセプト、参加文化施設が連携して発信するプログラム。

●「こちこちの こちを こちあう」展示

会 場：京都国立近代美術館1Fロビー、ロームシアター
京都 プロムナード、京都市動物園 図書館カフェ

実施内容

「共生って何?」をテーマに、CONNECT ⇄ のコンセプトや制作プロセス、インタビューなどを、図解展示と参加型のアクティビティで展開。展示内容の検討段階から障害を持つ当事者の方による「相談会」を実施しインクルーシブな展示を目指しました。

●共生・多様性・アクセシビリティについて考えるトーク

日 時：12月14日(日) ①11:00～、②14:30～
会 場：京都国立近代美術館 1階講堂
募集人員：各回70名
参加人数：①35名 ②35名

実施内容

6年目を迎えたCONNECT ⇄ の5年間を振り返り、CONNECT ⇄ の目指す共生についてゲストと考えるトークイベント。

第一部では京都国立近代美術館、京都市京セラ美術館、ロームシアター京都、京都市動物園の担当者が振り返りと今後についてトークを展開。第二部では河合翔(立命館大学生存学研究センター 客員研究員)、竹内利夫(徳島県立近代美術館 上席学芸員)、田中みゆき(キュレーター、アクセシビリティ研究、社会福祉士)、塩瀬隆之(モデレーター/京都大学総合博物館 准教授)をゲストに文化施設における「共生」について再考しました。

施設プログラム

参加施設による、独自実施のプログラム。10種14回のプログラムを実施。

●なんでもOKなダンスパフォーマンス

日 時：12月13日(土) ①10:30～、②14:00～
会 場：ロームシアター京都 ノースホール
参加人数：①40名 ②80名
振付・構成：大谷悠(ダンサー、振付家、グランパレーダンス代表)

実施内容

鑑賞マナーを取り払うことで、参加のバリアを下げたダンスパフォーマンス。おしゃべりOK、泣いても笑ってもOK、一緒に踊るのもOK。



なんでもOKなダンスパフォーマンス・ロームシアター京都

連携プログラム

期間中に、会場エリアで障害当事者による作品や表現に触れられるプログラム。

●第31回京都とっておきの芸術祭

期 間：12月12日(金)～14日(日)
会 場：日図デザイン博物館
連 携：京都障害者芸術祭実行委員会

●エイブル・アート・ムーブメント 30周年記念展示

期 間：11月28日(金)～11月30日(日)
会 場：京都市京セラ美術館 光の間
連 携：一般社団法人たんぼぼの家

●なづな展 2025

期 間：12月12日(金)～14日(日)
会 場：京都市勤業館みやこめっせ 美術工芸ギャラリー
連 携：社会福祉法人なづな学園

本事業で得られた成果

障害当事者、アーティスト、地域との連携

6年目の実施を迎え、主催施設からの発信、障害当事者の参加を募るだけでなく、プログラム段階から、障害当事者やアーティスト、地域の関連機関との連携を進めました。

「こちこちの こちを こちあう」展示においては、初めての取り組みとして、企画段階から複数の障害当事者に入ってもらい、CONNECT ⇄ におけるインクルーシブな展示とは何か、を模索しました。



特別支援学校でのアウトリーチ

また、社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会に協力団体として参画してもらい、各プログラムに手話通訳を派遣するとともに、「共生・多様性・アクセシビリティについて考えるトーク」、「なんでもOKなダンスパフォーマンス」、「みる、をつたえる」などのプログラムでは企画運営段階から、手話通訳のプログラムにおけるありかたや、運営方法などについても協力いただきました。

各プログラムには基本的に参加者と

ともに感想を語り合う時間を設け、プログラムの企画者やアーティストが会場参加の障害当事者と、感想を語り合うことでCONNECT ⇄ の場を越えて同様のプログラムを参加施設やアーティストがブラッシュアップしていくために役立てもらうようにしました。

2023年から引き続き京都市内の5つの特別支援学校に対して、CONNECT ⇄ 会場での現地解説と、現地でのアウトリーチを実施しました。



こちこちのこちをこちあう展示・ロームシアター京都



動物園でさわってみよう・京都市動物園

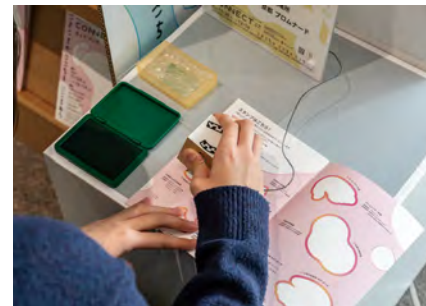
参加者巡回と参加施設間の連携を強化

参加者巡回を促すために、各会場にオリジナルスタンプを設置してスタンブラリーを実施。4施設以上を回った参加者には連携プログラム「京都とっておきの芸術祭」の今年度受賞作品などから缶バッジを提供。約200名の参加を得ました。

また、参加施設の課題解決と連携向上のための勉強会を実施。今年度はNPO法人日本ユニバーサルツーリズム推進

ネットワーク理事の鞍本長利氏を講師に「インクルーシブ防災ーだれも取り残さない防災ーについて学ぶ」ワークショップを実施。ロームシアター京都サウスホールにて災害時の誘導実践のワークショップを開催しました。勉強会には各参加施設の担当者以外にも多く参加いただきました。

各施設間の連携では、展示標記についての相談をお互いに行うなど、今後につながる情報交換も見られました。



スタンブラリー

事業実施における工夫

各参加施設の連携の潤滑油に

同一エリアにあるとはいえ、性格の異なる文化施設間の連携プロジェクトのため、それぞれの施設の事情に合わせつつ、実務運営者会議を実施するなど、文化庁及び各施設間での情報共有、進捗確認を定期的に行いました。

CONNECT ⇄ はアートと福祉、作品発表と鑑賞、各施設での合理的配慮のあり方など複雑な領域に隣接して実施しているため、それぞれの参加施設が持つ情報やネットワークを活用、拡大して人的ネットワークを広げていくことが今後の継続に求められます。そのため、新聞社グループのネットワークも活用しながら、単純な進捗共有にとどまらない、関連情報やテーマに隣接するイベントなどの共有も行いました。

鑑賞支援サービス 地域スモールモデル構築事業

鑑賞
機会創造
機会発表
機会作品
評価権利
保護販売
支援交流
促進相談
体制人材
育成情報
収集連携
協力

団体名

一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構

所在地：大阪府大阪市

団体 UR：https://jdp-arts.org

事業概要

地域によって劇場や文化芸術のあり方はさまざまです。地方劇場の場合、都市部のような事業予算や最新の情報を持っていないところもあれば、貸し館や買取公演が中心というところもあります。地方劇場にも障害のある人たちが参加できる環境づくりを広めていくためには、これまでの方法ではなく、その地域や劇場にマッチした方法を模索しながら、地域と一緒にスモールモデルをつくっていくプログラムが必要です。

本事業は令和5年度からスタートした「地方に鑑賞支援サービスを普及させる」ことを目指したものです。特に、「地域格差」と「地域人材育成」に焦点を当て、地方の劇場でも鑑賞支援サービスを導入し、障害のある方々を迎える取り組みが開始されることを支援します。

本事業で実施した内容

令和7年度は、継続劇場としてあきた芸術劇場ミルハスと北上市文化交流センター さくらホール feat.ツガワ、新規劇場としてまつもと市民芸術館、松本市波田文化センター、松本市音楽文化ホール、JMS アステールプラザ、新日本造機ホールと連携して事業に取り組みました。なお、松本市音楽文化ホールについては、連絡調整が困難な状況が継続したため8月2日に連携を解除しました。

北上市文化交流センター さくらホール feat.ツガワとの連携事業

事業名：「宮澤賢治朗読劇 手話と音楽と語りで綾なすライブセッション2025」

開催日：2025年9月20日（土）

会場：さくらホールfeat.ツガワ 小ホール

参加人数：93人

チケット料金：一般/3,000円、高校生以下/1,000円、4歳児以上入場可、介助者無料チケットあり

実施内容

宮澤賢治作品「よだかの星」「注文の多い料理店」をものがたりグループ☆ポランの会が上演。全盲のヴァイオリニストやろう者とコーダの手話パフォーマーも参加しました。視覚障害者向けに舞台上での説明会と音声ガイドを、聴覚障害者向けに手話パフォーマンスとオープン字幕、舞台・受付の手話通訳を実施。衣装を触れる人形や台本貸出なども含め、充実したアクセシビリティの整備に取り組みました。

その他の連携事業

さくらホール feat.ツガワ

- 公演主催者向け「アクセシビリティ講座 ～より多様なお客様に文化芸術を届けるために～」(2025年7月11日)
- 聾者体験会 (2025年8月8日)

あきた芸術劇場ミルハス

- サービスお試し会 (2025年9月23日)
- 「あきた吹奏楽の日 ～大いなる秋田定期公演～」(2025年12月21日)
- K-バレエ・オプト「踊る。遠野物語」(2026年1月12日)
- 舞台「飛び立つ前に」(2026年1月24日、25日)

まつもと市民芸術館との連携事業

事業名：まつもと市民芸術館プロデュース「チェーホフを待ちながら」

開催日：2025年11月6(木)～9日(日) うち、対象公演は8日(土)

会場：まつもと市民芸術館 小ホール

参加人数：総観客数 約210人

チケット料金：一般/4,500円、U25/2,500円、障がい者割引/4,000円、未就学児入場不可、移動に介助が必要な方は介助者1名につき一般料金の50%

実施内容

土田英生が2003年、2009年に MONO 特別企画として上演した作品を松本の地で創作。演劇通はもちろん、普段あまり演劇に馴染みのない方にも楽しんでいただける大人のユーモアが光るコメディ作品。鑑賞サービスでは、劇場初となる音声ガイドとポータブル端末によるアイコン字幕を実施しました。その他、舞台事前説明会の実施や音声補聴サービスの提供にも取り組みました。

まつもと市民芸術館

- ひらく古典のトピラ 其の5「みんなのための古典芸能」(2026年2月14日)

松本市波田文化センター

- 「うたの楽しみ」(2025年11月13日)

JMS アステールプラザ

- 演劇引力広島 第22回プロデュース公演「はぐらかしたり、もてなしたり」(2026年2月21日)

新日本造機ホール

- お試し会 (2025年12月12日)
- 「ここに響く音楽会 ～ホールで感じる音のひととき～」(2026年2月15日)

本事業で得られた成果

地方における鑑賞支援サービスの実装定着と自立的発展

本事業により、鑑賞支援サービスの

実施対象が拡大し、地方劇場における実装モデルの構築が進展しました。

新規実施劇場では、まつもと市民芸術館、松本市波田文化センター、JMS アステールプラザ、新日本造機ホールの4劇場が連携事業に取り組みました。このうち3劇場は障害のある観客を対象とした鑑賞サービスの初実施であり、地方における実施率向上に直結しました。各劇場では、それぞれの地域特性や劇場規模に応じた鑑賞サービスの方法を模索しながら実施し、事業終了後には課題の共有と次年度以降の継続方策について協議を進めました。この過程を通じて、地方劇場における実装モデルの第一

歩を踏み出すことができました。

継続劇場では、支援プログラムの枠を超えた発展的な取り組みが実現しました。さくらホール feat.ツガワでは、当事者との対話の必要性に気づき、年間ラインナップの全公演に鑑賞サービスを配置し、公表することで、すべての観客が参加できるインクルーシブな劇場としての劇場ブランド形成につながりました。あきた芸術劇場ミルハスでは、ボランティア人材の組織化と運営研修を実施し、劇場と地域が協働する持続可能なモデルの構築に成功しました。

より注目すべきは、支援プログラム終了後の劇場における継続性です。いわき芸術文化交流館アリオスは鑑

賞サービスを事業化し、予算計上することで継続実施体制を確立し、段階的に実施公演を増やしながら事業を発展させています。荘銀タクト鶴岡では、教育機関やアーティストとの連携へと取り組みが広がるなど、地域全体への波及効果が見られました。

これらの成果は、本事業が一過性の取り組みに留まらず、地方劇場における鑑賞支援サービスの定着と自立的な発展を促進したことを示しています。地方それぞれの実情に合わせたスモールモデルの構築と、継続的な実施体制の整備により、障害のある人たちが参加できる文化環境の拡大が実現しました。



北上市文化交流センター さくらホール feat.ツガワとの連携事業
「宮澤賢治朗読劇 手話と音楽と語りで綾なすライブセッション2025」



まつもと市民芸術館プロデュース「チェーホフを待ちながら」

事業実施における工夫

ポイント

都市部の一律なアプローチを押し付けるのではなく、地方劇場との対話を最優先としました。各劇場が抱える課題、実施したいこと、実施できることについて丁寧に話し合い、試行錯誤のプロセスを通じて成果と課題を共有しました。その対話の中で、私自身が約25年間の実践から蓄積したノウハウと経験をもとに、地域特性に合わせた適切なアドバイスを提供しました。このように、外部からの指導ではなく「地方劇場との協働」を基本姿勢とすることで、継続可能な実装モデルの構築につながりました。

団体名

公益財団法人茨木市文化振興財団

所在地：大阪府茨木市

団体URL：https://www.ibabun.jp/

事業概要

障害の有無や年代を問わず参加者を募り、ダンスを通じて相互理解を深めながらステージを作り上げていく市民参加型のプロジェクト。3か月の稽古を経てステージでダンスを披露する「みんなでつくるダンス公演」と、月1回気軽に参加できる「単発ワークショップ」の2本立てで年間を通してプロジェクトを運営している。

2025年度は新たな試みとして①美術家と市民ボランティアで「舞台美術」制作②ダンス公演にワンシーンだけ客席から参加できるワークショップの実施③市民と共にプロジェクトについて語り合い、共に評価・検証を試みた「カタリの間」の実施等にも挑戦。「踊る」という手段以外で本プロジェクトに関わる人の裾野を広げている。

本事業で実施した内容

【取組1】みんなでつくるダンス公演
「そこから、これから、はぐくまれしもの」

公演：2025年12月6日（リハーサル12月5日）
稽古期間：2025年9月7日～2025年11月29日計12回
会場名：大阪府茨木市 茨木市市民総合センター（クリエイティブセンター）

■参加者

対象：小学生以上
人数：一般公募22名、近隣大学学生3名・（連携）アシスタント3名、救護2名
参加費：5,000円（通し）

■観覧

観覧者：125名 入場料：500円

実施内容

子どもから96歳まで、障害の有無に関わらず多様な出演者、総勢28名によるダンス公演を開催。今年度は美術家・井上唯氏監修のもとボランティアサポーター20名が舞台美術制作を実施。また市民参加型部活動である「ibabun 手芸部」部員11名がダンサーの衣装制作を担当するなど、「踊る」以外での関わりを拡大した。



【取組1】公演 撮影：井上嘉和

【取組2】単発ワークショップ「障害のある人もない人も一緒に踊ろう！」

<インリーチ>

開催日：2025年6月～8月、2026年1月～2月 各月1回
会場名：大阪府茨木市 茨木市市民総合センター（クリエイティブセンター）ほか

対象：どなたでも
参加費：無料
一般参加者：6月21日20名、7月19日17名、8月30日21名、1月12日24名、2月23日20名

<アウトリーチ>

開催日：2025年8月23日
会場名：茨木市南市民体育館
対象：茨木市内の障害者福祉施設Kの利用者46名および支援員8名
参加費：無料

実施内容

「公演」を目指すのではなく、気軽に集う「居場所」となることを目的に、毎月1回単発ワークショップを実施。昨年に引き続き福祉施設利用者に向けたアウトリーチ型のワークショップも開催。

【取組3】「カタリの間」

開催日：2026年1月12日
会場名：大阪府茨木市 茨木市市民総合センター（クリエイティブセンター）204号室
対象：行政・文化庁・市民・当事者・支援者・アーティストなど26名
参加費：無料

実施内容

「ダンスを通じて誰もが集える場」をテーマに、参加者とともに考え、未来へつなげるための参加型評価の実践の場。多様な立場がフラットに対話し、これまでの活動の価値・課題・次のアクションを共創する機会とした。

本事業で得られた成果

参加者同士が支えあう、一人ひとりにとって大切な「居場所」ができた

今年度の公演は小学生～96歳まで、幅広い年代の方総勢28名にご参加いただいた。過去の公演に参加したリピーター参加も7割と年々多くなってきており、参加者間、スタッフ間の良好な関係性が相互理解を益々活性化させている実感がある。

今年度は5年目の節目ということもあり、第三者の視点で本事業を客観的に評価していただきたいとの思いから、NPO法人CASKに評価・検証を依頼。過去5年分のアンケートの集計のみならず、参加者や関係者へのインタビュー調査など、量的・質的両方から多角的にとらえていただいた結果、下記

のような成果を整理することができた。

①参加者にとって居心地の良い、大切な「居場所」ができた【インタビュー調査抜粋▼】

- ここに来ると「癒される」「心地よい」。縛りがなく自分を解放できる
- 関係性が親戚のように感じられるようになった
- ここに来たことがきっかけで自分から進路を言えた、本当に光というか奇跡を与えていただいた場

②参加者同士が自然に支えあう場が醸成されている【インタビュー調査抜粋▼】

- 障害の理解、同じにするのが難しい時でも「どう共有するか」を

一緒に工夫してくれる

- 障害の有無に関わらず子どもたちが交流するようになり、親子で参加していて母親としか話さなかった子が、最近他の子と話すようになった
- アシスタントとして「自分が楽しむ」視点への転換で、監視的な役割から共に参加するスタイルへ移行した
- 参加者同士も次第にコミュニティを形成し、自然に支え合う関係が生まれている

今後も、地域の様々な人が集い、繋がり、ともに活動する場を提供することで、共生・共感の意識が芽生える機会をつくっていきたいと考える。



【取組1】公演に向けたダンス稽古 撮影：茨木美術協会



【取組1】市民ボランティアによる舞台美術制作



【取組1】公演 撮影：井上嘉和



【取組2】単発ワークショップ 撮影：茨木美術協会

事業実施における工夫

■大学との連携

5年目を迎えた今年度も稽古運営を地域の大学生と協働で取り組んだ。

■ワンシーンのみ参加できるワークショップの開催

公演に向けた長期間の稽古が肉体的にも精神的にも負担であるという声を受け、客席に座ったまま公演のワンシーンに参加できる単発ワークショップを開催し15名が参加した。

■鑑賞サポート

鑑賞サポートの一環として、公演前に舞台上に上がっていただきダンサーの気持ちを体験する公演前ツアーを開催し10名が参加。また、情報保障として公演中のダンサーのセリフを投影するスクリーンの配置、トークセッション時の手話通訳、要約筆記等の配備も行った。

障がいのある児童や成人の身体的芸術活動(ブレイクダンス等)の創造と発表の機会を確保・充実させる取り組み

団体名

一般社団法人日本アダプテッドブレイキン協会

所在地：大阪府大阪市

団体URL：https://yozigenz.com/jaba

事業概要

本事業は、障がいのある人が文化芸術活動に参加する際の心理的ハードルを下げることを目的とし、家族支援を含むダンス教室やセミナーを通じて、参加者が志向に応じて表現方法を選択できる環境を整備し、「振付発表会」と「即興ソロバトル」という複数の発表形式から挑戦の幅を広げられる構造で実施しました。事業内で完結するではなく、本事業を経て健常者中心のダンスシーンへと自然につながる段階的な導線で、社会的活躍への発展を目指しました。

本事業で実施した内容

「みんなのダンス教室」および UNIQUE ZONE COMMUNITY

開催期間：2025年5月～2026年2月

会場：主に、大阪府立障がい者交流促進センター

対象：障がい児者とその家族

実施回数：17回

参加者平均人数：約41名(のべ約700名)

発表会参加者：障がい児者44名と、その家族17名

発表会観覧者：約100名

実施内容

ジャンルの異なる複数名のプロダンス講師をはじめ、横断的な様々な専門スタッフとともに継続的なダンス教室および発表会を実施しました。また並行して、同一の対象層に対してセミナー形式で保護者同士の情報共有や相談の機会を提供しました。すでに健常者のダンスシーンに子どもを送り出している保護者が登壇し実体験に基づく判断の過程を共有し、参加者が将来的な進路に具体的なイメージを持つための学びの場となりました。



当事者の親御さんが登壇者のセミナー

UNIQUE ZONEシリーズにおける4つの催事

開催期間：2025年9月15日～2026年1月12日

会場：主に、大阪市立長居障がい者スポーツセンター

対象：障がいのあるダンサーおよび健常者ダンサー

出場人数合計：約120名

実施内容

「UNIQUE ZONE(以下、UZ)」シリーズとして、特性の異なる4つのダンスイベントを平行実施。

「UZ Breaking」では、比較的自由度の高いブレイキンに限定し、多様な特性を持つダンサーが同等に表現できる場を創出しました。

「UZ DEAF」では、司会進行など会場内での第一言語を日本手話で行うなど、聴覚障害者が主体となる運営体制で実施しました。

「UZ JAM」では、障がい者ダンスシーンに健常者が混ざる形でインクルーシブな空間を形成しました。

さらに既存の健常者中心のイベント「ManiaXzone」においては、今年度より弊協会が主催代行を行い、UZシリーズと同系列の位置づけで実施しました。本イベントは、評価基準の中でも特に独創性を重視する特性を持っていたため、身体特性から独自スタイルが生まれやすい障がい者ダンサーにとっても、健常者と同等に評価されやすい親和性の高い場となった。告知段階においても障がいの有無を強調する表現を用いずに実施できた結果、多数の健常者の中に少数の障がいのあるダンサーが自然に溶け込み共演する場を実現できました。



手話のみによる司会進行(ユニークゾーンデフ)

本事業で得られた成果

家族の生きづらさにも同時に向き合うダンス教室と相談支援の実践

障がい者本人の生きづらさは、その家族の生きづらさから直結しているという課題認識のもと、当事者と家族の双方に働きかける催事を実施しました。自分に合った身体表現を参加者自ら選択できる環境が当事者の自己肯定感に繋がり、発表会では44名

の当事者に対し17名の家族がステージに共に立ち体験共有することで当事者の安心感にも繋がりました。子どもの世話に追われ趣味を持つ時間がなかった保護者が、子どもと一緒に踊るという新たな楽しみを見出すなど家族単位でのQOL向上が実感され

ました。

当事者の自信向上に伴う保護者の行動変容により通常のダンススタジオへ通い始めるケースや、本事業を参考に依頼された新たな教室が関東圏で開始されるなど、地域を越えた波及効果も確認されました。

ソロバトル形式による段階的インクルージョンの拡張と社会的波及

障がい者ファーストで安心して参加できる場の形成を主目的とし、初めから無理な混在をせず当事者の主体性を確保したうえでイベントごとに参加条件を段階的に展開するインクルーシブモデルを構築しました。点数化しない相対的な評価構造のソロバトル形式を採用することで、身体特性や障害特性が参加への制限要因とならず、他者と動きを合わせる必要のない個々の表現が評価される環境を実現しました。

UZシリーズの知名度向上に伴い、北海道および沖縄から導入希望が寄せられ、依頼事業として沖縄ではすでに自主開催で実施でき、全国への各地域展開が着実に進んでいます。2026年度以降、日本各地での導入についても弊協会主催事業として本格的な展開を図っていく予定です。また、フェスティバル主催者からの依頼を受けフェス内でUZを実施する機会も生まれ、多くの来場者の目に触れることで、これまで障がい者のダンスに

関心のなかった層を含む幅広い来場者へ認知させる成果が得られました。

段階的インクルージョンの導線設計により、UZシリーズをきっかけに健常者向けの大会へ挑戦する障がい者も多数生まれ、中には日本大会を通過し、健常者中心の世界大会で入賞する事例までも現れました。「障がい者ダンサーの特性の評価」という新たな可能性を健常者のダンスシーンへ提示する成果となりました。



親子で共に立つ発表会のステージ



健常者の中に溶け込む障がい者ダンサー

事業実施における工夫

本事業のような行政補助による文化芸術活動と並行し、民間企業との連携によるエンターテインメント性の高い催事とも関連づけて実施している点は弊協会の強みであり、双方に共通して、「当事者の家族を含めた支援」「参加形態の選択肢の提示」「評価方法の選択肢の提示」を重視しています。

こうした取組は、大学病院や医薬企業、義肢装具エンジニアなど医療分野との連携や、出演・指導をプロダンサーに依頼している点、さらにダンス専門用語に精通した手話通訳士の起用や育成を行っている点など多角的な専門知見によって支えられています。

このような多分野連携を一体的に行ってきた本取組は、その強みとノウハウにより、類似の文化芸術事業を検討する団体にとっても参考となる事例であります。

団体名

川村義肢株式会社

所在地：大阪府大東市

団体URL：https://www.kawamura-gishi.co.jp/

事業概要

パントマイムやブレイクダンスや和太鼓の専門家が、文化芸術に触れる機会の無い病院やリハビリテーションセンターや療育園や支援学校に訪問レクチャーに出向き、文化芸術の鑑賞と体験の機会を確保・充実させる取組みを行います。

訪問レクチャー後に公的施設（国際障害者交流センター“ビッグ・アイ”）にて、全体ワークショップを行います。参加者はダンスと和楽器とパントマイムのワークショップに参加し最後に発表会を行い披露することで自己肯定感を育み、障がい当事者が文化芸術活動に主体的に参加し創造活動を行う自信を持たせます。

本事業で実施した内容

“全体ワークショップ”

開催日：2025年11月15日（土）
会場名：国際障害者交流センター“ビッグ・アイ”（大阪府堺市）
対象：障がい（肢体・精神・発達）を持つ児童とそのご家族
募集定員：特に無し
参加人数：約50名
参加費：無料

実施内容

大阪府堺市にある公共施設のビッグアイにて全体ワークショップを行いました。「ダンスと和太鼓とパントマイムの3つのワークショップを開き、参加者はそれぞれ好きなワークショップに参加し最後に発表会を行いをお披露目する。」催事です。訪問レクチャーの開催の際に医療施設・療育園・支援学校に案内し参加募集しました。11月15、16日の両日で開催される大阪府の催事である「ともいき」のプログラムに組み込んでいただけたのは事業を継続してきた信頼から得られた成果の一つです。肢体・精神・知的・発達・内部・重複などの種類を限定しない当日参加の障がい児・者対象にして、3種類の身体表現や楽器演奏の講師8名のデモ演技の後、好きなパートに分かれて練習を行いました。ワークショップの最後にそれぞれの練習内容を発表する時間を設け大勢の前で発表できるように誘導しました。



全体ワークショップ参加者

訪問レクチャー（ダンス、パントマイム、和楽器）

開催日：2025年7月24日
会場名：ボバース記念病院（大阪府大阪市）
対象：入院している障がい（肢体）児者とそのご家族、先生方
募集定員：特に無し（入院病棟）
参加人数：約50名、他病院スタッフと職員
参加費：無料

実施内容

募集や案内した関西圏の医療施設・療育園・支援学校に、訪問して文化芸術を伝える活動です。約20ヶ所の施設へ訪問しました。ボバース記念病院では出かける事が困難な入院病棟の児童と通院する児童を対象に、3種類（ダンス・パントマイム・和楽器）の身体表現や楽器演奏の講師8名のデモ演奏の後、好きなパートに分かれて練習を行いました。心身障害の症状によって立位可能、座位可能、重度肢体不自由の3種類に指導を行います。例えばダンスであれば、上肢で踊る、座って踊る、寝転がって踊る、立って踊る、など「障害が文化芸術のバリアにはなりえない、誰でもダンスはできて楽しい」をベースに指導しています。レクチャーの最後に各パート毎に発表会を行い病院職員や入院仲間の前で自分が演じて拍手をもらうことで自信を持つ、また仲間が演じているのを見て応援する意識付けにも効果があります。



ボバース記念病院訪問レクチャー講師

本事業で得られた成果

障がいにより閉鎖的にならざるおえない施設へ文化芸術に触れる機会を提供できました

パントマイマー・ブレイクダンサー・和楽器奏者を、入院病棟、病院やリハセンター、支援学校や療育園へこちらから訪問して、文化芸術の鑑賞と体験の機会を確保・充実させる取組みを行いました。ダンスは足を動かすステップはできなくても座って踊る（手だけ、指だけ）、寝転がって踊るなど、パント

マイムも複数の芝居形式や、1名で行う身体表現など、個々の障害と身体状況に合わせリハビリ医の指導から個々の動作に合った動作を実現できました。施設から出て文化芸術に親しむことが難しい各種の障害を持つ児童に、アーティストが訪問して3種類を見ざるおえない状況と体験せざ

るおえない状況に誘導して成功体験を得させることができたのはプロのアーティストたる所以です。訪問レクチャーの最後に発表会を行い、自由な表現を参加者同士で見せ合い、介護者や先生方に見てもらうことで自己肯定を促すことができました。

医療・リハビリ・教育とアーティストの両方に表現の可能性を知ってもらえました

本事業を始めて直ぐに教育委員会や医療従事者の横のつながりで活動を知ってもらい、府外からの問い合わせや開催依頼もいただきました。令和6年度の活動で伺った重度障害を持つ児童が居る養護学校の先生による教育委員会への報告で本事業を知って、今年度は同じ県内の養護学校より依頼があるなど、心身障害の症状の種類と重度の度合いに関係なく文化芸術を楽しめることを医療と教育の関係者に

知っていただけたのは大きな成果です。またアーティスト側のダンサーやパフォーマーや楽器奏者も、彼らが障がいの種類や内容に理解が乏しいため心身の障がい児者にレクチャーする方法やきっかけが無かったのが、監修をリハビリ医師にした本事業により安心して安全に楽しくレクチャーが可能となり、彼らアーティスト自身が活躍できるステージを広げることができました。アーティストのネットワークからも

複数施設の申し込みがありました。文化芸術を提供する側、享受する側の両方を拡大できたのはこれも本事業の大きな成果です。

今回の事業によって関西の支援学校と医療施設に、文化芸術が能動的動作の獲得につなげることを広められました。今後も全国の医療関係や文化芸術関係者に障がい当事者のダンスや身体表現の啓蒙活動を続けます。



全体ワークショップ太鼓体験



全体ワークショップ講師

事業実施における工夫

本事業の取り組みにも掲げていますが、より多くの人々や団体や施設に事業を周知するべく学会団体の学会発表を行いました。学会HPの記載、配布抄録集の記載、当日の発表と質疑応答、フロアでの問合せなど多くに我々の活動を知ってもらえました。

令和6年度より継続して発表している8月11月の学会発表では前年度の事業の発表との違いを聞く質問などがあり、事業を周知・認知してもらうには最大に有効な手段となっています。このようなアカデミアでの活度は、ハードルの高い支援学校や医療施設での開催に比べて、認知さえされれば話題の拡がり早く、文化芸術活動の少ない医療福祉施設や支援学校での周知は大きいと感じます。

団体名

日本センチュリー交響楽団
所 在 地：大阪府豊中市
団体 URL：https://jcso.or.jp/

事業概要

本事業は、日常的にコンサートホールでオーケストラの生演奏を聴く機会が少ない、大阪府下の特別支援学校の児童生徒および教職員を対象としたコンサートです。当団の自主事業として15年以上継続して実施しています。学校形態や児童生徒の特徴に制限はなく、様々な障害のある児童生徒の参加が可能で、聴き馴染みのあるクラシック作品から指揮者体験コーナーなどの参加型まで幅広い内容を組み込み、オーケストラを身近に感じられる内容をお届けいたします。また、病院分校などの学校から移動することが難しい支援学校に向けては、別途訪問希望を募り、学校に出向く形で室内楽コンサートを行います。

本事業で実施した内容

学校訪問型アウトリーチ室内楽コンサート

2025年6月4日(水) 大阪府立生野聴覚支援学校
編 成：クラリネットとハープの二重奏
参加人数：小学部1～6年生、中学部1～3年生 70名
演 奏 曲：リード/ヴィクトリアキッチンガーデン組曲、ドレミの歌 他

2025年6月17日(火) 大阪府立和泉支援学校
編 成：チェロとコントラバスの二重奏
参加人数：小学部1～6年生 124名
演 奏 曲：日本歌曲「春が来た」「めだかの学校」、
ロッシェニ/チェロとコントラバスのための二重奏曲より 他

2025年6月18日(水) 大阪府立交野支援学校
編 成：ファゴット二重奏
参加人数：小学部1, 4～6年生20名、中学部1～3年生
30名、高等部1～3年生40名 90名
演 奏 曲：モーツァルト/ファゴットとチェロのためのソナタ
Part of Your World、ぼよん行進曲 他

2025年6月30日(月) 大阪府立摂津支援学校
編 成：ヴァイオリン三重奏
参加人数：小学部3～6年生 80名
演 奏 曲：ミーチャム/アメリカンパトロール、
サン＝サーンス/動物の謝肉祭より 他

2025年7月2日(水) 大阪府立茨木支援学校
編 成：トロンボーン三重奏
参加人数：中学部1～3年生 21名
演 奏 曲：校歌、みんなで一緒に!リズムメドレー
他

計5校 385名

対 象：大阪府下の特別支援学校の児童生徒・教職員
参 加 費：無し(事前申し込み制)

実施内容

公演1か月前を目安にスタッフが各校に伺い、会場の下見・打ち合わせを行い、趣向を凝らしたプログラム内容を検討しました。生徒・児童からのリクエスト曲を募集したりと、各校の希望に沿ったプログラムを準備し、予定どおりすべての学校で開催することができました。

オーケストラコンサート

開 催 日：2026年2月9日(月)
会 場 名：国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)
対 象：大阪府下の特別支援学校の児童生徒・教職員
参加人数：延べ1,241名
参 加 費：無し
演 奏 曲：(60分プログラム・休憩なし)
ビゼー/歌劇「カルメン」より 第1幕への前奏曲
楽器紹介コーナー
ブラームス/ハンガリー舞曲 第6番
指揮者体験コーナー
オッフェンバック/喜歌劇「天国と地獄」序曲
アンコール) シュトラウスI/ラデツキー行進曲

実施内容

各楽器の音色を一つずつ紹介する「楽器紹介コーナー」や、代表生徒が舞台上でオーケストラを指揮する「指揮者体験コーナー」など、鑑賞に加えて参加型の内容も取り入れ、オーケストラをより身近に感じていただけるよう工夫しました。また、メインプログラムでは、オーケストラのサウンドを全身で体感していただけるよう、聴き馴染みのあるクラシックの名曲を選曲しました。アンコールのラデツキー行進曲では、指揮者主導のもと来場者が手拍子で参加し、会場全体が一体となって盛り上がりました。



オーケストラコンサート(楽器紹介コーナー)

本事業で得られた成果

学校訪問型アウトリーチ室内楽コンサート

演奏者が各校へ出向き、学校の体育館や教室等を会場にして演奏会を行うため、子どもたちにとっては慣れ親しんだ環境で安心して楽しんでいただけます。また室内楽という2～4名の小さな編成のため、ホールで鑑賞するよりも身近な距離で楽器を観察で

き、音の振動や迫力をより間近で体感することができます。また、関連事業として実施しているオーケストラコンサートでは、会場(国際障害者交流センター ビッグ・アイ)の立地的に大阪北部からの参加校が少ない傾向にあります。この室内楽コンサートで

直接学校へ伺うことにより、立地の都合や、障がいの程度によりオーケストラ公演に出向くことが難しい児童生徒の皆さんへも音楽を届けることができています。

オーケストラコンサート

年に1回の学校行事として当事業を捉えていただいている学校が増え、今年度は過去最多の延べ1,241名の参加者となりました。

各学校は団体バスで来場するため、混雑を避けて円滑に入館できるよう動線を確保することが毎年の課題となっています。今年度は降車場所を4か所設けたうえで、重度の障害のある

児童生徒が多い学校については正面入り口を優先的に使用することとしました。また、その他の学校については事前に降車場所を固定せず、当日の混雑状況を踏まえて警備会社の判断により誘導を行う方式を採用しました。その結果、例年よりも円滑にホールに入館していただくことができました。

学校訪問型アウトリーチ室内楽コンサート
(チェロとコントラバスの二重奏、御礼の手紙)

オーケストラコンサート(会場全体写真)



オーケストラコンサート(演奏写真)

学校訪問型アウトリーチ室内楽コンサート
(トロンボーン三重奏)

事業実施における工夫

室内楽コンサート

事前にスタッフが学校に伺い、児童生徒の特徴をヒアリングし、より楽しんでいただける工夫(演奏会場のレイアウト、演奏者の入退場動線、公演内容など)について担当教員の方々と綿密な打ち合わせを行っています。肢体不自由の交野支援学校では、立って角度を変えながら演奏できるというファゴット二重奏の特性を活かし、児童生徒の車椅子で演奏者を360度囲む形で演奏しました。演奏者2名が曲によって様々な方向を向いて演奏し(前、後、横並び、対面など)、あらゆる角度から演奏の様子を観察することで、音楽だけでなく演奏の動きや表情も存分に楽しんでいただけました。

オーケストラコンサート

演奏会場の多目的ホールは、中央通路より前方の座席において床面の段差を調整できるオート座席を備えており、車椅子やバギー、ベッドを利用している児童生徒も客席内で鑑賞することができます。また、視覚障害のある生徒については可能な限りステージに近いエリアに配席し、舞台の様子を視覚的に捉えやすくするとともに、音の振動を身体で感じられるよう配慮しました。

団体名

特定非営利活動法人ダンスボックス

所在地：兵庫県神戸市

団体 URL：https://db-dancebox.org/

事業 URL：https://diversity.db-dancebox.org/

事業概要

文化芸術を通して、関わる人すべてが新たなビジョンや価値観を見出し、社会的弱者に対する理解を深めるとともに、社会における真の共生とは何かを考える機会となることを目的に、障害の有無、経済状況や家庭環境、ルーツ、性別等、一人一人の＜差異＞を優劣という物差しではなく独自性にとらえ、幾重にも循環していける関係性を生み出す事業を展開しています。障害者を含むダンスカンパニーの活動を通じて、表現者の育成と、障害の有無混在の創造活動・発表の場を拡充し、障害者による舞台芸術シーンのクオリティと環境の向上に取り組むほか、障害がある人もない人も、多世代の人がダンスを通じて「生きる一人」として集い出会う場を、劇場を拠点に形成しています。

本事業で実施した内容

<ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi>
レパートリー創作と国際共同制作

- ①2025年5月～9月
レパートリー作品『少年少女』の創作・上演（振付：紅玉）
- ②2025年11月
Resident Island Dance Theatre(台湾)とのコラボレーションとレパートリーの上演
- ③2025年12月
Cane & Movement/TRUST Dance Theatre(韓国)とのコラボレーション公演

会場：ArtTheater dB KOBE、商店街（神戸市長田区）

Mi-Mi-Biメンバー：KAZUKI、福角幸子、三田宏美、も、森田かずよ



レパートリー作品『少年少女』写真：岩本順平



Resident Island Dance Theatre(台湾)とのコラボレーション



Cane & Movement(韓国)とのコラボレーション 写真：岩本順平

やさしいコンテンポラリーダンスクラス
& 出張やさコン(やさコンプラス)

開催日：2025年5月～2026年3月 ※月1回実施
会場名：ArtTheater dB KOBE(神戸市長田区)
対象：踊りたい人はどなたでも
参加人数：各回20～35名(のべ約300名)
ナビゲーター：西岡樹里



やさしいコンテンポラリーダンスクラス 写真：鈴木優

盲学校でのダンスワークショップ

開催日：2025年10月2日
会場名：兵庫県立視覚特別支援学校(神戸市垂水区)
参加人数：23名+教師
ナビゲーター：アダム・ベンジャミン



ワークショップ風景

本事業で得られた成果

海外の障害者を含むダンスカンパニーとMi-Mi-Biのコラボレーションが実現。表現の深化と活動の拡がり。

今年度は、Mi-Mi-Biにとって、様々な振付家やダンサーとの協働により、個人としてもカンパニーとしても表現の幅が広がる1年でした。個々の身体に対するまなざしや可能性の引き出し方、問題や課題が出たときの対応など、経験を積んだ彼らから学ぶことは多く、常に対話をしながら進めていきました。短い期間の集中したクリエイションの中で、手話を含む多言語間の通訳はとても大きな役割を果たしました。

Resident Island Dance Theatre(台湾)との共同制作

- 2024年に神戸でエクステンジワークショップを行ったカンパニーとのプロジェクトが発展。Mi-Mi-Biとのコラボレーション作品と、彼らのレパートリー作品を、屋外にて上演しました。
- アフリカのトーゴ出身で神戸在住のAlain SINANDJAがディレクションを行う「HAPPY AFRICAN FESTIVAL」の一環で実施したことにより、まちの様々な方に見ていただくことができました。
- インスタライブも行い、会場に来ることのできない人にも見てもらうことができました。

Cane & Movement/TRUST Dance Theatre(韓国)との共同制作

- 2019年度に来日し共同制作を行ったカンパニーと、6年ぶりのコラボレーション。当時はまだMi-Mi-Biが結成する前で、そのカンパニーのあり方は、私たちに大きく影響を与えました。
- 今回は、Mi-Mi-Biのメンバー以外にも、障害の有無様々な20代～40代のダンサーが出演。
- 相互に刺激を与えあいながらの密度のあるクリエイションが展開されました。

初めての盲学校でのダンスワークショップ

近年、ダンスのナビゲーターなど、指導者のためのワークショップを依頼してきたアダム・ベンジャミン氏に、今年度は視覚障害の学生に向けたワークショップを依頼。これまで、手掛けようとしつつも一歩を踏み出せなかったところを、知識も経験も豊富なアダ

ム・ベンジャミン氏の力を借りて、実施することができました。会場の県立視覚特別支援学校の高校生だけではなく、神戸市立盲学校の中学生や、卒業生も参加。新たな世界を発見し楽しかったという感想も多く、ニーズを感じました。盲学校の生徒が外部の人と

つながり、新たな感覚や表現に出会う機会としても、今後につなげたいと考えています。今回は、指導者のためのワークショップを受講したメンバーがアシスタントとして参加。個々が各自の現場にこの経験を持ち帰ることのできる、有効な実践の場となりました。

「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」豊かさを裏付ける時間の蓄積

肩書も役割も外して一人一人が自分自身としてその場にいることを大事にした、月1回のダンスクラス。障害の有無や世代を超えたゆるやかなコミュニティは、安心できる風通しの良い居場

所にもなっています。2020年に始まり6年目。継続して参加しているメンバーは、必要に応じて相互にサポートしたり、様々な面でクラスを共につくりあげる存在にもなっています。出張ク

ラスや、出前パフォーマンスの依頼も増え、継続することによる定着と拡がりが見られます。

事業実施における工夫

NPO法人DANCE BOXは、コンテンポラリーダンスの公演事業を手掛けてきた団体です。商店街の中にある阪神・淡路大震災の復興再開発ビル(神戸・新長田エリア)の4階に位置する「ArtTheater dB KOBE」という小劇場を拠点としています。再開発エリアにあるため、まちは基本的にバリアフリーで、アーティストが多く出入りする場所、ということも特徴で、いわゆる事業の枠組みを超えて様々な交流が生まれました。また、地域コミュニティとのつながりも深く、近隣の福祉事業所に一週間車椅子を貸りたり、広報面でも様々な面で協力を仰ぎ、地域の多世代の観客にも公演を鑑賞していただきました。劇場を出て、屋外のパブリックスペースでの上演や、鑑賞料金任意制の公演の設置など、多様な観客に向けて、舞台芸術をひらく工夫を重ねています。

2019年から当事業を行ってきたため、公演やワークショップ・クリエイションの際の手話通訳士の配備や、字幕投影、受付時などノウハウが蓄積し、スタッフワークもスムーズになってきました。

また、クリエイションやワークショップ時の障害のあるメンバーへの配慮として、会話内容をゆっくりとかつ簡単な言葉に言い換えたり、ホワイトボードに書いたり、近隣の参加者には、自宅から稽古場への移動補助など、個別の対応にも取り組みました。

Art for Well-being 障害福祉の現場におけるアート×テクノロジー活用人材の育成プログラム開発と普及

団体名

一般財団法人たんぽぽの家

所在地：奈良県奈良市

団体URL：https://tanpoponoye.org/

事業URL：https://art-well-being.site/

事業概要

心身の状態に関わらず、誰もが生涯を通じて文化芸術活動を継続できる社会をめざし、アート・ケア・テクノロジーの領域をつなぐ人材育成プログラムを実施した。主な取組は以下の3点。
 ①公募で選定した(技術者)と、障害福祉現場およびコーディネーターとのマッチングと伴走支援
 ②現場導入を目的とした、ハッカソン形式によるワークショップ開発と実践
 ③知見の共有とネットワーク拡大を図る研究会の開催
 これらのプログラムを通して、テクノロジーを活用した表現活動の導入プロセスや課題を整理した。領域横断的な連携を促進することで、福祉現場における持続可能な表現支援の基盤構築と、社会的な普及を推進した。

本事業で実施した内容

①育成プログラムA「障害福祉の現場と技術者の連携推進のための公募と伴走支援」

実施内容

障害福祉現場でのアート×テクノロジーの実践を希望する(技術者)を全国公募し、2件を選定。福祉現場とコーディネーター、および過去の参画技術者(アドバイザー)をマッチングし、各現場での活動を伴走支援した。報告会もあわせて開催し、実践事例のモデル化と普及を図った。

[i] 公募と伴走支援

期 間：2025年4月30日募集開始→6月15日〆切→2026年2月まで実践

実施件数：2件

参 加：16名(技術者：2名、福祉現場：8名、コーディネーター：2名、アドバイザー：4名)

場 所：(1) 社会福祉法人関西中央福祉会ココロネ板橋(東京都板橋区)
 (2) NPO 法人幸せつむぎ(愛知県名古屋市)

[ii] 発表・発信

(1) 東京：2026年1月23日@カフェねね 30名・無料
 (2) 愛知：2026年2月7日@SLOW ART CENTER NAGOYA 20名・無料
 (3) 京都：2026年3月1日@京都経済センター 80名・1,000円(学生無料)

②育成プログラムB「障害福祉の現場でテクノロジーを活用した表現活動に取り組むためのワークショップ開発プログラム」

実施内容

2日間のハッカソン形式の集中講座を開催。施設見学と講義を経て、多職種混成チームでワークショップを試作・相互評価し、計5つのプログラムを開発した。開発後は内容を公開し、実際の現場での導入可能性や課題をヒアリングした。

開 催 日：ハッカソン形式の集中講座(9月6日～7日)
 オンライン相談会(9月30日、10月14日)
 中間発表会(12月2日、1月27日)
 成果発表会(2月24日)

場 所：わたぼうしホール(奈良県奈良市)

参加人数：25名 参加費：3,000円

③育成プログラムC「アート×ケア×テクノロジーの取り組みを深めてひろげる研究会」

実施内容

「遊びと成果のあいだを考える」をテーマに計3回のオンライン研究会を開催。また、昨年度制作した映像をもとに上映会を開催し、プログラムA・Bの参加者以外の幅広い層も対象に、テクノロジー活用のお考え方や可能性を学ぶ機会をつくった。

[i] オンライン研究会

期 間：(1)2月20日、(2)2月25日、(3)3月10日
 参加人数：のべ255名 参加費：無料

[ii] ドキュメンタリー映像上映会&トーク「とけていくテクノロジーの縁結び」

・大分県立美術館

開 催 日：11月15日

参加人数：20名 参加費：1,500円

・北とぴあ・ドームホール

開 催 日：3月27日

募集定員：80名 参加費：1,500円

また、プログラム全体を通して、活動成果の共有・展開における適切なライセンス設定等の知財支援や、AIやVR等の新技術活用における知的財産権の取り扱いについても、これまでのノウハウに基づき専門的な知見から普及・啓発を行い、領域横断的なネットワーク構築を図った。



「Art for Well-being 研究会(オンライン開催)」

本事業で得られた成果

1. 現場実践と伴走支援による「協働プロセス」のモデル化

東京都板橋区と愛知県名古屋市の異なる特性に深く関わり、対話を重ねるプロセスを重視した。と支援者、技術者の三者が相互に変容しながら表現を持つ現場において、技術者が福祉現場の日常その結果、単なる機材導入に留まらない、当事者現をともにつくる協働プロセスをモデル化した。

2. 導入のハードルを下げる「ワークショップ」の創出

短期間で5つのワークショップを開発した。特筆のなか?」を主眼に置き、試作と評価を繰り返した点でノロジーに心理的・物理的ハードルを感じていた福祉現場にとって入口となるプログラムを提示できた。すべきは、参加者が「なぜそのテクノロジーが必要なのか?」を主眼に置き、試作と評価を繰り返した点である。専門知識がなくても参加できる内容とし、テクノロジーを人と人のつながりや表現を再

3. 社会的波及効果と今後の活用方法

福祉現場と技術者が協働するネットワークを構築した。開発したプロセスは汎用性が高く、全国への普及が可能である。今後は人材育成の展開や政策提言への活用を通じ、テクノロジーを人と人のつながりや表現を再発見するためのメディアとして再定義し、誰もが表現活動を継続できる持続的な支援体制の構築を推進する。



公募と伴走支援1 東京「伴走型実践プログラム(東京)活動の様子」



発表・発信「伴走型実践プログラムの報告会(京都で合同開催)」



公募と伴走支援2 愛知「伴走型実践プログラム(愛知)活動の様子」



「ハッカソン・ワークショップの様子」

事業実施における工夫

[1] 過去の成果を土台にした環境づくり

プログラムAでは、全国の専門家ネットワークから福祉とアート双方に精通したコーディネーターを最適に配置した。また、制作済みの教材を導入ツールとして活用し、背景の異なる専門家同士がスムーズに共通目標を持てるよう配慮することで、協力体制を素早く整えた。

[2] 関心層を実践へと導くステップ設計

過去のセミナー等に参加した約340名に対し、知識習得に留まらず、実際にワークショップを企画・試行する場を地続きで提供した。新しい技術が実際のケアにどう役立つかを共に考える構成にすることで、参加者が活動を自分事として捉えられるよう工夫した。

[3] 知的財産権等の知見を活かした誰もが安心して挑戦できる環境づくり

当団体の強みである知的財産権の知見を全体に組み込み、権利上の不安を事前に解消することで、誰もが安心して挑戦できる環境を整えた。異なる分野の人たちが互いを尊重し高め合える場の空気づくりを重視した点も、本事業の大きな特徴である。

令和7年度 戯曲表現が開く障害者の表現と障害理解<劇作家による伴走支援と各地公演>事業

団体名

特定非営利活動法人鳥の劇場

所在地：鳥取県鳥取市

団体URL：http://www.birdtheatre.org

事業URL：https://www.birdtheatre.org/gikyoku-disability/

事業概要

鳥の劇場は地域の舞台芸術の拠点として、障害のある人のための表現活動の場の提供、作品の上演による社会的な障害理解の推進等に取り組んできた。2013年から障害のある人とない人がともに演劇創作を行う事業を毎年継続し、そこでの成果・課題を土台として、障害を主題とした短編戯曲の全国公募、優秀作品の顕彰を実施している。令和5年度からの実施で本年7年度で3年目。2年目からは、一次選考通過作品を対象にプロの劇作家による伴走支援を行い、作品の完成度と応募者の表現力向上をねらった。さらに今年度は、全国5か所で行った過去の入選作を上演する公演プログラムを実施、事業成果の可視化と全国的な認知拡大を図った。

本事業で実施した内容

選考委員会の設置

実施日：2025年5月23日

選考委員会：設置、公募条件やスケジュールの確認

一次選考委員および伴走支援担当

大岡淳氏（劇作家・演出家・批評家）

坂本鈴氏（劇作家・演出家・劇団だるめしあん代表・劇作家女子会。リーダー）

吉田小夏氏（劇作家・演出家・青☆組 主宰）

最終選考委員

大澤真幸氏（社会学者）

岡部太郎氏（一般財団法人たんぽぽの家理事長）

森田かずよ氏（義足の女優・ダンサー）

永山智行氏（演出家・劇作家・劇団こぶく劇場代表）

ロブ・ウルピナーティ氏（劇作家・クイーンズシアター（アメリカ・NY）

中島諒人（演出家・鳥の劇場芸術監督）

戯曲コンテストHP公開・エントリー受付開始

開催日：6月25日～

各種映像の公開

実施日：6月25日～

戯曲の書き方のチュートリアルビデオ（日本語字幕・音声ガイド付き）

・劇作家 永山智行氏：事業HP上で公開

・劇作家 ロブ・ウルピナーティ氏：参加エントリー者に限定公開

戯曲の書き方ワークショップ記録映像

・劇作家 大岡淳氏：参加エントリー者に限定公開

公募作品受付

開催日：8月1日～9月30日

「入選作品リーディング各地公演」開催

全国5カ所（茨城、東京、静岡、鳥取、宮崎）でそれぞれ活動する演出家・俳優が、過去の戯曲コンテスト入選作品をリーディング（朗読）形式で上演を行う「各地公演」を実施。

茨城公演（7月20日）来場者数41名

東京公演（9月5日・6日）来場者数52名

鳥取公演（9月27日・28日）来場者数51名

*「日米 短編戯曲リーディング」開催に詳細を記載

静岡公演（9月28日）来場者数70名

宮崎公演（12月6日）来場者数48名

「日米 短編戯曲リーディング」開催

開催日：9月27日～28日

鳥の劇場が共催する「BeSeTo 演劇祭29+鳥の演劇祭18」のプログラムとして、鳥の劇場の俳優が昨年度コンテスト入選3作品およびクイーンズシアターにおいて昨年実施された短編戯曲公募事業の最終選考に残った3作品をリーディング上演。来場者数51名。

一次選考・伴走支援作品決定

開催日：10月20日

選考委員会：一次選考通過作決定

エントリー数：325 作品数合計：191

応募者数：168名（うち、障害者手帳交付のある人が75名）

伴走支援

開催日：11月1日～12月15日

対象：一次選考を通過した伴走支援対象者9名

作品をより良くするための助言を行うzoomミーティング（伴走支援）を各自2回実施。伴走支援を行なったのは大岡淳氏、坂本鈴氏、吉田小夏氏（いずれも劇作家）の3名。

選考委員会：受賞作の決定

開催日：2026年1月30日

入選作品5作品程度を予定。入選作品は、次年度のクイーンズシアター、鳥の劇場でのリーディング上演の上演候補作となる。

表彰式・リーディング発表会

開催日：2月23日

受賞作を掲載した記録誌・音声を記録したCDを制作・関係者に配布

鑑賞
機会創造
機会発表
機会作品
評価権利
保護販売
支援交流
促進相談
体制人材
育成情報
収集連携
協力

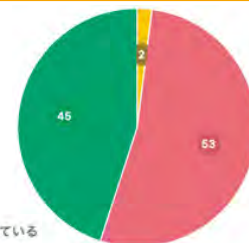
本事業で得られた成果

応募作品数が安定して多く、障害のある作家の割合が向上

初年度の令和5年度の応募数は244作品、二年目以降応募数が激減することを危惧したが、6年度192作品、7年度191作品と安定して応募が多い。応募者の中での障害のある人の割合が昨年度は38%、今年度は45%であった（初年度はデータなし）。

三年目の実施ということでコンテストが障害のある人の現場にも浸透してきている。今年度は障害当事者の書いた戯曲が全国から100本集まった。

● 応募用紙に記載なし ● 交付を受けていない ● 交付を受けている



全国各地でのリーディング公演の実施、高評価

令和5年度6年度のコンテストで入選以上となった優れた作品をもっと世に知ってもらうために、全国各地でリーディング上演会を行った。鳥の劇場に加えて、静岡、茨城、東京、宮崎で各地の俳優と演出家がそれぞれの趣向で上演を実施、多様な観客が集まり大きな感動の輪を広げた。以下、観客の声と主催者の声の一つずつ紹介する。

観客の声

ああ～面白かった！同じ条件で5作品すべて違った様相。腫れ物に触るようにやさしくするのではなく、同じ目線で競ったり闘ったりぶつかったりするのが大事。全部良かった、全部良かったんですけど最優秀賞の「予言」が面白すぎました。（東京公演）

主催者の声

初舞台の10代から退職後の60代、熱海から浜松まで、オール静岡の市民で担う「みんな」の座組を設えた。障がいではなく「普通」を問うのが静岡会場のスタンスで、チームも演出も公演順もそれに沿うものとなった。（静岡公演）



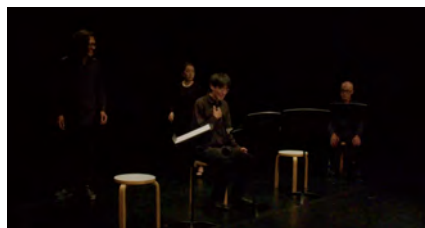
事業チラシ



「入選作品リーディング各地公演」茨城公演（7月20日）



伴走支援担当者による談話会



BeSeTo 演劇祭29+鳥の演劇祭18「日米 短編戯曲リーディング」開催



今年度表彰式

事業実施における工夫

ポイント

- ・短編戯曲は、比較的誰でも取り組みやすい表現です。極端な事を言えば、自分が社会で体験した困ったことや、うれしかったことをそのまま書けば、それで戯曲作品となります。それによって、障害当事者と周囲の人がつながるきっかけが生まれます。
- ・書かれたものを、リーディング形式（役者が戯曲を手にとって、大きな動きをつけることなく読む）で発表するというのは、演劇としては、誰でもやりやすい表現です。表現活動（発表）に多くの人が参加できます（障害のある人も参加が容易です）。
- ・リーディング上演により、観客も作品の多様な世界を短い時間の中で楽しみ、体験することができます。これがもっと普及していくことは、障害理解・他者理解のために非常に有意義です。
- ・これらのプロセスに劇作家や俳優が加わることで、戯曲や発表の質が上がります。地方にも人材はありますし、ネットを使った遠隔支援も有効に機能しやすいと思います。演劇をやっている人といわゆる福祉分野の人の新しいつながりも生まれます。

地域と共につくる島根インクルーシブシアター・プロジェクト2025

団体名

公益財団法人しまね文化振興財団
所 在 地：島根県松江市
団体 URL：https://www.cul-shimane.jp/

事業概要

障害の有無に関わらず芸術文化に触れ、自ら表現する喜びにふれる機会と場づくりを目的に島根県全域で行うプロジェクトです。地域状況やニーズに応じて実施をしています。県東部では、ダンス・ワークショップとバリアフリー公演のオープニングアクトへの参加や、公立文化施設を対象とした社会包摂事業の研修会を実施しました。県西部では、市内福祉事業所への出張音楽会の実施や、音声ガイドへの理解促進を図る上映会&トーク、誰もが安心して参加できるイベントを開催しました。本事業を起点にして地域全体への活動理解の促進と、ユニバーサルな場と地域作りへの機運醸成を図るため、開かれた取り組みになるよう心がけました。

本事業で実施した内容

「映画をとどける言葉たち ～バリアフリー音声ガイドをめぐって～」

実施日：2025年5月25日
会場名：Shimane Cinema ONOZAWA
対 象：どなたでも
参加費：有料
参加人数：75名

実施内容

短編アニメ「押絵ト旅スル男」の音声ガイドを制作した音声ガイドディスクライバー和田浩章氏とナレーションを務めた声優の佐々木望氏を招請し、音声ガイドへの理解促進を図る機会としてトークセッションと短編アニメの音声ガイド付き上映会を開催。

ドキュメンタリー映画「音の行方」上映会&トーク、音遊びの会LIVE「音のグラングラン」

実施日：2025年11月29日(上映会&トーク)、30日(LIVE)
会場名：Shimane Cinema ONOZAWA(上映会&トーク)、いわみ芸術劇場大ホール 舞台上舞台(LIVE)
対 象：どなたでも
参加費：有料
参加人数：49名(上映会&トーク)、90名(LIVE)

実施内容

誰でも楽しめるユニバーサル公演。今回は「音遊びの会」を招請し、伸びやかに表現する即興楽団の音楽的魅力を住民へ届け、障害や社会について捉え直す意味合いも込めて開催。また、「音遊びの会」を知る機会として、前日には音遊びの会ドキュメンタリー映画の上映会とトークセッションも開催。

お届け! にぎやかな日々

実施日：2025年11月5日
会場名：障害者支援施設 希望の里
対 象：施設入居者
参加費：無料
参加人数：65名

実施内容

地元の音楽療法師と演奏家による、公共文化施設等への来場が難しい市内福祉事業所利用者への出張音楽会を開催。

インクルーシブ・ダンス事業

対 象：どなたでも
参加費：無料
(1)ダンス・ワークショップ「からだで話そう!」～障がいのある人もない人もいっしょに踊ろう!～
【劇場外インリーチ】
2025年7月8日(火):障がい者支援施設「授産センターよつば」(21名)
2025年7月9日(水):生活介護事業所「さくらの家」(20名)
【劇場内ワークショップ】
2025年9月20日(土):島根県民会館(17名)
講 師：田畑真希(ダンサー・振付家)、米田沙織
音 楽：多久和千絵

実施内容

これまで継続的に実施している、障害の有無に関わらず誰もが参加できるダンス・ワークショップ。参加者の広がりにも繋げるため、7月は市内福祉事業所にて、9月は劇場内にて体験ワークショップを開催。

(2)ダンス作品発表・稽古
実施日：2025年12月6～7日、2026年1月16～18日、22～23日[WS稽古]
2026年1月24日(土)[本番日]
会場名：島根県民会館
参加人数：22名
講 師：田畑真希(ダンサー・振付家)、城俊彦
音 楽：ハブヒロシ、多久和千絵
参加費：無料

実施内容

ワークショップと稽古を経て、1月24日のバリアフリー公演にてオープニングアクトとして出演。

公立文化施設を対象とする社会包摂事業研修とネットワーク形成

実施日：2025年12月17日
会場名：島根県民会館多目的ホール
対 象：公立文化施設スタッフ、当事者、実演者、福祉関係者等
参加費：無料
参加人数：23名

実施内容

「『わからない』から『わかりあう』へ～障がいのある人との文化芸術の“場”をつくる～」と題して、国際障害者交流センタービッグ・アイの鈴木京子氏を迎え、研修を開催。

本事業で得られた成果

継続実施が生んだ多様な出会いと協働の広がり

2016年から継続実施してきたダンス事業では、ここ数年、初参加者が増え、裾野の広がりを実感しています。年齢層も幅広く、また参加される障害者の方の種別も多様化してきました。継続参加者と、初参加者が相互に支え合う関係性の形成など、ダンスを通じたコミュニティの醸成という

成果も生まれています。また、本事業を通じて蓄積された、障害の種別や多様なニーズに応じたワークショップ運営のノウハウは、スタッフの経験値を高め、劇場におけるアクセシビリティ向上への意識を組織全体へと広げています。参加者の障害の種別が多様化する中、対応するスタッフには専

門的な知識やスキルが必要となる場面が以前にもまして増えつつあります。そのため、これまでも関係性を構築してきた専門知識を持つアドバイザーの方など、専門家や外部の方との連携も重視しており、本事業を通して、新たな協働への広がりにも繋げていきたいと考えています。

関係者との連携と地域への理解促進

「お届け! にぎやかな日々」では、過去開催してきたユニバーサル公演「にぎやかな日々」の関係者と協力し、劇場に来場しづらい福祉事業所への出張型音楽会を実施しました。作り上げてきた関係性や個々の経験を活かし、施設利用者や職員へ音楽を楽しんでいただく機会を創出することがで

きました。普段の事業所の活動にはなかなか参加しない利用者も参加され、良い刺激になった事が伺えました。地域の声に耳を傾け、引き続き、実演芸術のアクセシビリティへの確保へ努めていきたいです。“関係ない”から“関係ある”への意識変革のため、バリアフリーやユニバーサル公

演への理解促進となるようなイベントの開催を心掛けました。来場者にバリアフリーの可能性を感じてもらうことで、理解促進へ繋げ、普及に繋げていきたいと考えています。すぐに結果が表れるものではないため、今後も同取り組みを行っていききたいと思います。



音遊びの会LIVE「音のグラングラン」



お届け! にぎやかな日々



インクルーシブ・ダンス事業



インクルーシブシアター・プロジェクト研修会

事業実施における工夫

東部でのダンス事業は、昨年度から福祉事業所に出向き、劇場外でダンスのワークショップを体験してもらう取り組みを続けています。当事者だけでなく施設関係者にもご参加いただき、事業後には「ぜひまた実施したい」等の要望も寄せられています。参加前は不安そうだった方からも楽しさを実感したとの声があり、こうした取り組みは、劇場内でのワークショップを知っていただく機会となり参加者層の拡大にもつながっています。

西部では、これまで一緒に作り上げてきた関係者と協力し、いままで劇場で行っていたユニバーサル公演「にぎやかな日々」を外部の福祉事業所に持ち出す「お届け! にぎやかな日々」を開催しました。演奏者だけでなく、多様な人が集まってできた「にぎやかし隊」も参加をしてくれ、これまでの活動から一歩先へ進んだ取り組みができました。

四国・中国・近畿ブロックの重度障害児者を対象とした文化芸術活動「クレッシェンド@愛媛大学」

団体名

国立大学法人 愛媛大学

所在地：愛媛県松山市

団体URL：https://www.ehime-u.ac.jp/

事業URL：https://ehimeuniv-cie.jp/syogai_gakusyu_bunkageijutsu/

事業概要

四国・中国・近畿ブロックの重度の運動障害と重度の知的障害を併せ有する重症心身障害児者および重度知的障害児者を対象に、個別の活動機会を提供するとともに、地域の文化施設等に集まって活動する参集型のワークショップの企画・運営をしました。個別活動においては、居住地やニーズにあわせて、スタッフが自宅等に訪問する訪問型と教材を送付する遠隔型の2種類の方法で実施しました。参集型の活動では、愛媛大学の学生による民族音楽のワークショップやえひめ愛顔の子ども芸術祭で行われた音楽のワークショップに参加しました。個別支援を含んだ多様な活動を通じ、重度の障害があっても、主体的に文化芸術活動に参加できる機会の拡充を目指しました。

本事業で実施した内容

個別活動

〈訪問型〉

開催日：2025年5月から2026年2月において、利用者の希望日を調整の上、2～3ヶ月に1回程度実施

場所：愛媛県を中心とした受講生の希望する場所（ご自宅や利用施設）等

〈遠隔型〉

開催日：2025年5月から2026年2月において、受講生の希望に応じて、1ヶ月に1回程度教材送付

場所：愛媛県外の四国ブロック・近畿ブロックを中心とした受講生の希望する場所（ご自宅や利用施設）等

対象：四国・中国・近畿ブロックの重度の運動障害と重度の知的障害を併せ有する重症心身障害児者および重度知的障害児者を対象に、随時「入学」受付をしています。

参加費：無料

実施内容

○訪問型：制作活動や音楽活動などの表現活動を行いました。筆や刷毛などの画材に加え、スイッチや視線入力装置などのICT機器を活用して、受講生一人ひとりの表出に合わせた方法で表現できるようにしました。

○遠隔型：制作活動の教材セットを送付し、自宅等における日中活動の場で取り組んでもらいました。愛媛県の伝統産業である砥部焼の絵付けや、県内の秋祭りで多く使用される提灯の絵付けなど、地域の文化や伝統に触れられる教材を届けました。

参集型活動

①クレッシェンドwith愛大おんがくくらぶ

開催日：2025年10月25日

会場：愛媛大学（愛媛県松山市）

実施内容

愛媛大学の学生サークル「愛媛大学おんがくくらぶ」に依頼し、民族音楽のワークショップを行いました。ドラや太鼓、メタルフォンなどの楽器の演奏を通して、同世代の大学生との交流も深めました。太鼓の中に手を入れて、振動を感じるなど、五感を使って音楽を体感しました。



スイッチを操作して太鼓を演奏

②クレッシェンドwithえひめ愛顔の子ども芸術祭

開催日：2025年10月26日

会場：えひめこどもの城

実施内容

えひめ愛顔の子ども芸術祭のワークショップ「音や動作で鼓動＝BEATを体感」に、サポーターとして参加しました。このワークショップは、障害の有無に関わらず全ての子どもに向けて開講されており、受講生はサポーターとしてオリジナルのマラカス作り、ICTを活用した音楽表現を行いました。講師や受講生、参加者が一体となって音楽を作っていました。

360°カメラ映像を用いたオンラインコンテンツ作成

撮影施設：松山市立子規記念博物館

実施内容

愛媛県松山市にある松山市立子規記念博物館の常設展を360°カメラで撮影し、車椅子視点で展示物を鑑賞できるコンテンツを作成しました。施設映像に加え、学芸員による展示解説動画も作成し、専門的な知識に触れながら鑑賞する機会を創出しました。

本事業で得られた成果

「支援」を超えて「表現者」として繋がる ～共生社会に向けた交流の新たな形～

昨年度までの参集型活動では、制作活動や音楽活動、ワークショップを通じて、受講生同士が出会い、交流する機会を創出してきました。今年度においては、受講者の出合いをさらに広げ、受講生同士の交流のみならず、地域の大学生や子どもたちとも交流することができる参集型活動を企画しました。「クレッシェンドwith愛大おんがくくらぶ」では、受講生と同世代の

大学生と交流し、「クレッシェンドwith えひめ愛顔の子ども芸術祭」では、地域の子どもたちと一緒に活動しました。これらのワークショップでは、参加者全員が対等な「表現者」として音を楽しんでおり、「支援する側」「支援される側」という役割ではなく、対等な表現者として繋がっていくことができました。今後は、地域ですでに実施されている文化芸術活動において、重度

障害児者がより主体的に参加しやすくなるよう、得られた知見やノウハウを活かして取り組み、繋がりを拡充していく予定です。



クレッシェンドwith愛大おんがくくらぶ



タブレットのDJアプリを操作



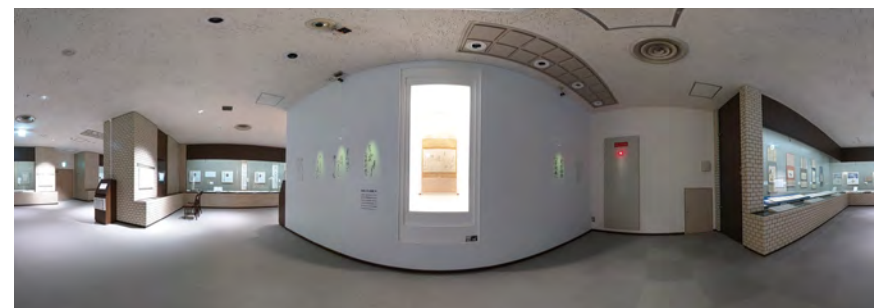
クレッシェンドwithえひめ愛顔の子ども芸術祭

360°カメラを活用した「体験型」オンライン鑑賞の実現

受講生の中には、地域の美術館や博物館に出かけていくことが困難であり、芸術鑑賞の機会を十分に確保できていない実態があります。本学では、過去に山間部に立地し車椅子等でのアクセスが難しい美術館や博物館の展示資料を360°カメラで撮影し、自宅にいながら施設内を見学できるコンテンツを作成しました。その知見を鑑賞活動に応用し、松山市立子規記念博物館と連携し、常設展示の360°カメラ撮影を行いました。さらに、より充実した鑑賞体験を提供するため、一部の資料については学芸員

による解説動画も作成しました。今後は地域の他の施設も同様にオンラインで鑑賞できるよう連携を進めると

ともに、受講生の作品を鑑賞できるコンテンツやホームページの整備等を進めていく予定です。



体験型オンラインコンテンツの一部のスクリーンショット

事業実施における工夫

自宅や愛媛大学内での活動実施だけではなく、地域のイベントに参加する参集型のワークショップを実施しました。また、鑑賞活動を充実させるため、360°カメラ映像および資料解説動画を作成しました。これらの取組を通じて、受講生が地域の中で文化芸術活動に取り組む際に、多様な方法から選んで活動する機会を提供することができました。

団体名

NPO 法人シアターネットワークえひめ

所在地：愛媛県松山市

団体 URL：http://tne-ehime.org/

事業概要

精神障がい当事者がアーティストや市民、「YouPark」と協働し、実体験を基にした人形劇を上演。自らの体験を「詩」として昇華させ、人形に「声」を託して表現しました。当事者の発信を周囲が支える創作プロセスは、孤立を超えた共生の可能性を提示しています。

あわせて「CIL 星空」等と連携し、観劇バリアフリーの実現に向けた環境整備にも注力しました。

本事業で実施した内容

①表現ワークショップ

開催日：2025年9月～2026年2月：計11回

場所：地域活動支援センターステップ、CIL 星空、他

対象：主に精神疾患・精神障がいのある人及び関心のある人

参加人数：271名

実施内容

人形劇グループの当事者や関係者、アーティスト等の表現ワークショップ。

- ・10月18日、1月4日は「観劇バリアをぶっ飛ばせ」として、「誰もが共に表現を享受できる場」を目指し、重度障害者の方々等との対話によって環境整備等の具体的な配慮を一つずつ試行。
- ・2/7は、研究者のファシリテーションによるプロジェクトの振り返りワークショップ

②人形劇の製作・公演

開催日：2025年8月30日、11月22日、2026年1月24日

人形劇制作期間：2025年7月～2026年1月

製作者：精神疾患・精神障がいのある人、アーティスト、福祉医療従事者、市民

製作関係者：74名

公演場所：松山市男女共同参画推進センター、愛媛県男女共同参画センター

観客対象：一般

観劇人数：463名

観劇料：無料

実施内容

・8月30日 ミニイベント太陽は笑っていますか

1部：朗読、気配とダンス

2部：こころ不思議発見(精神疾患についての疑問を探る対話)

・11月22日 人形劇「トラジと僕、世間の隙間をドライブしたら」第1回公演

人形劇(劇中、当事者の方々の体験が朗読される)とアフタートーク

・1月24日 人形劇「トラジと僕、世間の隙間をドライブしたら」第2回公演

1部：人形劇(劇中、当事者の方々の体験が朗読される)

2部：ココロ不思議発見(精神疾患についての疑問を探る対話)



公演第2部こころ不思議発見



人形劇公演

③松山×横浜活動報告

開催日：2025年12月5日、12月6日、12月7日

場所：あかいくつ劇場(横浜市)

参加者：太陽が笑うからねプロジェクト関係者12人、OUTBACK プロジェクト関係者

実施内容

精神疾患・精神障がいという同じ悩みを持つ OUTBACK プロジェクトメンバーと交流し、OUTBACK の横浜演劇公演に朗読出演(横浜に行けなかった当事者はオンラインで出演)

本事業で得られた成果

1. 表現の解放：当事者の思いを声として社会へ繋ぐ試み

当事者が内側に留めてきた想いを、言葉を「詩」として整え、人形劇の「声」を担うことで社会へ緩やかに差し出す場を創りました。地域の放送局のご協力によるラジオ出演も、日常の延長線上で社会との接点を確認する大切な機会となりました。人形に声を託

し、周囲が黒衣として支える協働の舞台は、当事者が「表現者」として社会に一步踏み出す確かな足掛かりとなりました。

表現活動を介して当事者とアーティスト、観客が場を共有することで、属性を超えた「人」としての出会いが生

まりました。対等なパートナーとしての創作過程で磨かれた表現は、既存の啓発活動とは異なる形で人々の心に届きました。「知ること」から始まる共生社会への地道な歩みとなりました。

2. 共創の基盤：対話から生まれる多様な連携と持続的な共有

福祉、アート等の専門家が知見を持ち寄り対話を重ねたプロセスは、単なる協力関係を超えた信頼を育みました。「OUTBACK プロジェクト」等の外部交流も、自らの価値を再発見する貴重な機会となりました。この繋がりを、互いを尊重し合える息の長い連携へ育てていきたいと考えています。

「CIL 星空」の皆様等と「何が必要か」を話し合い、音声ガイドや環境整備など、今の私たちにできる配慮を一つずつ試行しました。この「正解のない中で調整し合う」プロセス自体が、異なる特性を持つ主体同士が協働するための実践的な学びとなりました。一年の歩みを記録集にまとめ、研

究者の榎原氏とのワークショップでその意味を見つめ直しました。これらの記録は、紡がれた言葉を社会の共有知とするためのものです。福祉とアートが響き合う中で得た気づきを、持続可能な対話の種として社会に還元していくことが、本事業の縁を未来へ繋ぐ誠実な方法だと考えています。



OUTBACK プロジェクト(横浜)との交流



観劇バリアをぶっ飛ばせ

事業実施における工夫

- ・「表現」の工夫：当事者の体験を「詩」に紡ぎ、人形劇として構成。人形という媒介を通して、多くの支援者・協力者が製作に関わる「協働の場」が生まれ、切実な想いを普遍的な物語として社会へ届けることができました。
- ・「対話」の工夫：劇の後に、当事者と観客が直接言葉を交わす時間を設置。人柄が伝わるやり取りを通じて、劇だけでは届かない背景を補い合い、観客一人ひとりが自分事として捉え、心の距離を縮める機会としました。
- ・「環境」の工夫：「CIL 星空」等との対話を軸に、音声ガイドや座席配慮、資料の工夫を導入。「何が必要か」を共に探るプロセス自体を重視し、今の自分たちにできる最善の配慮を一つずつ形にしました。
- ・「省察」の工夫：研究者の榎原氏を招き、一年の歩みを言語化するワークショップを実施。現場で生じた戸惑いや変化を丁寧にみつめ直し、個人の気づきを活動の確かな意味へと昇華させるプロセスを大切にしています。



人形劇相関図：クレジット(原案イラスト：tawa, ドリームインポー イラスト制作：アレンジ・富久千愛里)

団体名

一般社団法人パラカダンス

所在地：福岡県福岡市

団体URL：https://www.facebook.com/paracadance/?locale=ja_JP

事業URL：https://pddance.jp/

事業概要

本事業は2019年度から継続してきた「パーキンソン病患者によるダンス活動」を独自に「PDダンス®」と名付け、2024年度からは「PDダンス®の普及事業」として全国展開を進めているものです。パーキンソン病専門介護施設を訪問する「週イチPDダンス」や毎月福岡市内で開催している「月イチPDダンス」では、対面だけでなくオンラインを活用しており、遠隔地からの参加も可能にしています。また、本年は「PDダンスカフェ」の開催地が増加し、計8か所で実施することができました。さらに、全国各地のファシリテーター養成講座修了生が現地スタッフとして参画したことは、人材育成における大きな成果となりました。

本事業で実施した内容

※対象はすべてパーキンソン病と共に暮らす方々です。

【PDダンスカフェアウトリーチ】

6月8日／ミリカローデン那珂川(福岡)／25名参加
 8月30日／札幌大谷大学(北海道)／21名参加
 9月5日／岡山芸術創造劇場 ハレノワ(岡山)／15名参加
 10月18日／住友不動産ベルサール神田(東京)／40名程度参加
 10月19日／桜美林芸術文化ホール(東京)／17名参加
 11月21日／芸術文化観光専門職大学(兵庫)／8名参加
 11月23日／新潟総合福祉会館(新潟)／48名参加
 1月18日／東広島芸術文化ホール くらら(広島)／16名参加
 参加費：1人500円

実施内容

パーキンソン病専門医によるレクチャータイム、PDダンスタイム、交流会の3本立てで実施しました。



PDダンスカフェin豊岡(兵庫) 撮影：泉山 朗土



PDダンスカフェin新潟 撮影：泉山 朗土

【PDダンスアウトリーチ】

9月6日／テイサービス地球の子(富山)14名参加
 11月11日／けやきプラザ(千葉・オンライン)11名参加
 11月20日／但馬長寿の郷(兵庫)5名参加
 1月30日／芸術文化観光専門職大学(兵庫・オンライン)4名参加
 3月20日／芸術文化観光専門職大学(兵庫・オンライン)10名参加
 参加費：無料

実施内容

PDダンスの体験のみを現地およびオンラインで実施しました。

【PDハウスダンスアウトリーチ】

開催日：9月7日(日)
 場所：PDハウス藤江／20名参加
 PDハウス白山／35名参加

実施内容

石川県のパーキンソン病専用入居施設「PDハウス」でのPDダンス体験を実施しました。



PDハウスダンスアウトリーチin白山(石川) 撮影：仲川 あい

本事業で得られた成果

進む全国展開！全国12か所、9つの都・道・県に赴き、当事者・介助者・医療従事者をつなぐ

PDハウスや当事者団体、文化施設をはじめ、札幌大谷大学、順天堂大学、桜美林大学といった大学にもご協力いただき12か所、9つの都・道・県へPDダンスを届けることができました。実施に当たっては、各当事者団体が積極的に企画運営に携わるような密な関係性を築くことができ、新潟では地元紙に大きく取り上げられたこともあり50

名近くの参加者と一つになって開催することができました。遠征先ではPDダンスに初めて出会う方も多いため、地元のお祭りの踊りを取り入れたり、近隣の山々をイメージしたりと、現地の方にとって身近なモチーフを取り入れたダンスを行いました。参加者からは「夜になると心臓が硬くなるを感じていましたが、今日のダンスを体験して

全身がほぐれる感覚を得て、自分は全身をほぐす必要があると実感しました。」「自分の殻から抜け出せて最高だった」など嬉しい声をいただいています。

さらに、近年、医療従事者の中でもPDダンスは広がっており、複数の専門医や理学療法士、作業療法士などが現地参加するなど、新たな出会いも生まれました。

PDダンスカフェから月イチPDダンスを経てPDダンスが日常へ。自宅から本番出演も！

各地で開催したPDダンスカフェの参加者が、その後、月イチPDダンスにオンラインで継続的に参加するようになったり、逆に各地のオンラインの参加者と現地で初対面を果たせたりもしました。特に隣県のPDダンスカフェの会場まで、新幹線など公共機関を乗り継いで遠征してくれた一人のオンライン参加者が、帰り際に3月の舞台本番への出演にも意欲を示しながら、乗って来たはずの車椅子に荷物を載せて帰って行く姿はとて

印象的でした。月イチPDダンスは、福岡のスタジオと各地の個人宅をオンラインでつなぎ、アイスブレイクのな自己紹介とダンスで気軽に参加できる雰囲気やダンスを大事にしています。また、復習動画を参加者へ共有し、個々のペースや時間で日常的にダンス活動ができるようにしており、「入院生活に復習動画があったお蔭で乗り越えられた」などの声も寄せられています。年に一度の発表会(PAP)ではオンライン参加者も自宅から出演

できるのですが、前述のオンライン参加者が仲間を声かけ、当日飛び込みでたくさんの方がオンラインで出演されました。PDダンスカフェがきっかけとなり、ダンスに触れる機会が増え、ダンス活動が日常に取り入れられる動きへとひろがってきていると考えられます。この緩やかなステップアップとひろがり、機能的な仕組みとして定着していくように、今後も一つ一つの事業を丁寧に継続していくことを心がけていきます。



PDダンスアウトリーチin富山 撮影：仲川 あい



PDダンスアウトリーチin千葉 撮影：泉山 朗土

事業実施における工夫

これまで事業を実施する上で、当事者のお声を聴き、丁寧なやりとりを重ね、協働先の自発的な取り組みとなるよう心掛けてきました。その結果、今年度は当事者や協力団体が企画運営に深く関わりながら進めることができ、今まで以上に各地域のニーズに合った内容で実施することができました。遠方での事業実施に関しては、会場の様子や機材設備など、情報収集が難しいところがありますが、協働先の皆様が細やかな調整をしてくださったおかげで、スムーズな進行が可能となりました。参加者からは、終了直後から次回の開催を願う声を多くいただきました。協働団体からも継続的な開催の申し出を受けており、今後の活動も前向きに動き出してくださっています。このように全国の当事者団体や文化施設、大学などと密に連携し、全員で作上げるイベントとなっている点は、本事業の大きな特徴となっています。一方で、本事業の意義や考え方を伝えていくなかで、微細かつさまざまな配慮を行う必要がある場面も多々ありました。今後は、PDダンスファシリテーター養成講座などを通じ、それらのことを伝え、共に学び続けながら、後継者育成にも更に力を入れていきます。

団体名

特定非営利活動法人アートマネジメントセンター福岡

所在地：福岡県福岡市
団体URL：https://amcf.jp/

事業概要

障害の有無に限らず、多様な背景を持つ人々がそれぞれの違いを尊重し、共にある社会をめざすことを目的に、福岡県内各所で演劇やダンスの表現活動に関するワークショップ、および公演事業を実施しました。文化芸術に触れる機会の少ない地域や人々には、体験型のワークショップを通して自己表現や新たな一面と出会う機会を提供しました。また、既に表現活動を体験している参加者とは創作の過程を共有し、公演という発表の場を設けることで、主体的な活動の促進と、来場者の障害や多様性への理解と共感を深める機会となりました。

本事業で実施した内容

文化施設における障がいのある人々を中心としたダンスのWS

開催日：2025年10月10日(金)、24日(金)、11月7日(金)、21日(金)、12月5日(金)
場所：福岡県立ももち文化センター(福岡市)
対象：表現することに興味のある障がいと共に生きる方
募集・参加人数：募集15名程度／参加10名
参加費：無料

実施内容

20～70代まで全世代が揃いました。お題から連想されるイラスト・言葉から、動きや振りが生まれ、その日のダンスが生まれます。最終回は小さな発表会を行い、3月にはPAPに出演。大ホールで発表します。

ピープルアートパフォーマンスvol.7

開催日：2026年3月7日(土)
場所：SAWARAPIA 福岡県立ももち文化センター 大ホール
料金：一般2,000円 6～25才・障害者手帳をお持ちの方1,000円
出演：SMILE PRESENTS・まるダンス部・ももちカラフルダンサーズ・PDダンス～パーフェクトダンス～®



昨年の様子

障がいの創作活動を担う人材の発掘

①ぼんプラザホールから始まる『いろんなきこえかた演劇プロジェクト』

開催日：2025年11月16日(日)、12月6日(土)、7日(日)
場所：福岡市千代音楽・演劇練習場、福岡市民ホール
対象：2023年・2024年の「いろんなきこえかた いろんなつたえかた」ワークショップ参加者
出演者数：20名

実施内容

過去2年間のワークショップで行った内容を中心に、参加者がどのような工夫をしながらコミュニケーションをとり、演劇の創作活動を行っているかを伝える発表の準備を行いました。

②大ホールでの活動紹介の機会

『みえる かんじる 新しい第九～ぼくらはみんなうたうたい～』
主催：(公財)福岡市文化芸術振興財団、(公財)九州交響楽団、福岡市、福岡市民芸術祭実行委員会
開催日：12月7日(日)
場所：福岡市民ホール 大ホール
出演：九州交響楽団・ホワイトハンドコーラス NIPPON・いろんなきこえかた演劇プロジェクト
来場者数：約1,000人

実施内容

- 第一部
 - ・ぼんプラザホールから始まる「いろんなきこえかた演劇プロジェクト」←ここに出演
 - ・みんなでやってみよう!手歌ワークショップ
- 第二部
 - ・ベートーヴェン交響曲第九番「合唱付き」

本事業で得られた成果

表現の場の広がりによる主体性の高まりと、地域社会への波及

障害の有無や年齢、これまでの文化芸術体験の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人々が表現活動に様々な形で関わる機会を作ることが出来

ました。身体性を伴う表現活動で、言語によらないコミュニケーションが生まれ、参加者同士が互いの違いを自然に受け止め合う関係性が育まれま

した。こうした関係性の変化は、参加者が安心して表現できる土台となり、本事業の重要な成果の一つとなっています。

表現活動が学内から社会へ広がった成果

高等聴覚特別支援学校の手話劇の取り組みでは、学内公演の他に、区主催の人権研修での上演が決定。照明演出も加え、生徒達の劇場での発表体験

がより充実するよう努めました。作品は高校生らしい率直で個性豊かなキャラクター表現に加え、学校の存続に対する不安など、ろう者を取り巻く環境や

当事者の思いが反映された内容で、来場者アンケートからも好意的な意見が多く寄せられ、表現活動が教育現場から社会へ開かれたひと時でした。

大ホールでの発表が参加者にもたらした変化

「いろんな聞こえ方」をテーマとしたワークショップは、福岡市文化芸術振興財団からの声掛けにより、財団が主催する『みえる かんじる 新しい第九～ぼくらはみんなうたうたい～』コンサートにおいて、大ホールにて活

動紹介の機会を得ました。作品を発表するというよりも、この活動で大切にしていることや、積み重ねた時間が伝わる構成となりました。参加者が舞台に立つ姿は堂々として、大きな舞台でスポットライトを受ける経験の

たらず意義を実感しました。お客様アンケートには「「いろんなきこえかた」のような活動が福岡市で開催されていることを知らなかった」等、活動に興味を持ってくださる感想が多々あり、活動の周知にもつながりました。

継続実施による主体性と世代間交流の深まり

ももち文化センターで3年目を迎えたダンスワークショップでは、新たに70代の参加者が加わり、20代から70代までの全世代がそろう場へと発展しました。開始当初は発言が少なかった参加者が、継続的な参加を通じて、自身の言葉で感想を伝えたり、動きや振付の提案を行うなど、この活動に主体的になっている変化が見られました。

また、地域の障害者支援センターからイベントへの出演依頼を受け、グループとして出演。来場者も巻き込みながらダンスの輪が広がり、会場全体が一体となる盛況な場となりました。日頃の活動が地域から評価され、外部の発表となったことは、参加者にとって大きな励みとなり、表現活動が地域の中で生きたものとして共有された成果といえます。

これらの取り組みを通して、文化芸術活動が個人の表現や成長にとどまらず、教育、人権、地域といった分野とつながり、社会へと波及していく実感が強まりました。本事業で得られた経験やノウハウは、今後の人材育成や他地域との連携事業にも活用し、誰もが文化芸術に関わり続けられる環境づくりへとつなげていきたいです。



手話指導の様子



大ホールリハーサルの様子



集合写真



障害者支援センター 福祉まつりでの様子

事業実施における工夫

本事業では、参加者の経験値や背景・特性に差があることを前提に、「体験」「創作」「発表」という段階を意識したプログラム設計を行いました。初めて文化芸術に触れる参加者には安心して参加できる体験の場を用意し、継続参加者には創作や発表へと関わりを深める場を設けました。また、アーティストは指導者ではなく伴走者として現場に関わり、参加者一人ひとりの表現を尊重する関係性づくりを重視しました。会場や参加者に応じて柔軟に内容を調整することで、多様な人が共に表現できる場を実現しました。

団体名

一般社団法人 琉球フィルハーモニック

所在地：沖縄県那覇市

団体URL：https://ryukyuphil.org/

事業URL：https://churasoundsconcert.wixsite.com/churasounds2025

事業概要

本事業は「だれもが共にいられる場づくり」を目的に、障害当事者や音楽・福祉分野の専門家が協働する「ゆいまーるミュージックプロジェクト」を組織し、その実践として「美らサ운ズコンサート」を開催するものです。障害のある方や家族が安心して音楽を楽しめる環境を整えるとともに、障害のあるアーティストとの共演や交流を通して相互理解を促進します。さらに来場者アンケート等により成果を評価・分析し、冊子として全国へ発信。2025年度は初の県外公演として関西の演奏家と合同オーケストラを編成し、文化芸術分野における合理的配慮の先進モデルとして共生社会の普及を目指します。

本事業で実施した内容

「美(ちゅ)らサ운ズコンサート 2025 in 大阪」開催

開催日：2025年12月14日

会場名：国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）多目的ホール

対象：全ての障害・難病のある方、ご家族・介護の方等、一般の方（※申込時には障害のある方や関係者を優先）

募集定員：500名

予約人数：425名

参加人数：335名 ※公演当日は寒波の影響で体調を崩してのキャンセルが多かった。

参加費：無料

実施内容

本公演では、「ゆいまーるミュージックプロジェクト」での協議を踏まえ、誰もが安心して参加できるコンサート運営を行いました。申込方法は、障害特性に配慮してWEB・電話・メール・FAXの複数手段を用意し、チラシやポスターも色覚障害に配慮した配色で作成しました。客席前方にはフロアマットを敷いたフリースペースを設置し、車椅子・ストレッチャー利用者や介助犬同伴者席は客席中央と前方に配置し、介助者と並んで鑑賞できるよう配慮しました。また、客席両サイドにはクールダウンスペースを設け、落ち着いて鑑賞できるゾーニングを行いました。聴覚障害のある方にはUDトークによる字幕表示（大型モニター）、手話通訳、赤外線音声補聴システムを提供し、視覚障害のある方には点字プログラムや読み上げアプリ用テキストのQRコードを用意しました。さらに会場には看護師2名を配置しました。演奏家にはリハーサル時に障害特性のレクチャーを行い、視覚障害のあるゲストのため足元で正面位置が分かる「ココテープ」を導入するなど、安心して演奏できる環境づくりにも取り組みました。



演奏中でも出入り自由

公演内容

出演者

指揮／松元 宏康 ナビゲーター／當銘 直美

ゲスト／前川 裕美（メゾ ソプラノ／視覚障害）

演奏／琉球フィルハーモニックオーケストラwith 関西の音楽家
※関西のフリー音楽家と関西のプロオーケストラ（6団体）に所属する音楽家

演奏曲目

- ・「グリーンスリーヴスによる幻想曲」／R.V.ウィリアムズ
- ・交響曲第5番「運命」より第1楽章／L.v. ベートーヴェン
- ・「芭蕉布」／作曲：普久原 恒勇 編曲：長山 善洋
- ・バレエ組曲「くるみ割り人形」より「花のワルツ」／P.I.チャイコフスキー
- ・リラックスタイム リズム遊び 赤羽 一則（打楽器奏者）

ゲストコーナー前川 裕美（メゾ ソプラノ／視覚障害）

- ・映画「サウンド オブ ミュージック」より「ザ サウンド オブ ミュージック」／R.ロジャース
- ・ミュージカル「サンセット大通り」より「ウィズ・ワン・ルック」／A.L.ウェバー
- ・ゲーム音楽「ザ ファイナル タイムトラベラー」／坂本 英城
- ・行進曲「威風堂々」第1番／E.エルガー

アンコール

- ・歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より間奏曲／P.マスカーニ



介助犬と一緒に好きな場所で鑑賞

本事業で得られた成果

合理的配慮を具体化し、他地域へ展開可能な共生型音楽会モデルの構築

本事業では、障害の有無や特性に関わらず、誰もが文化芸術を安心して鑑賞できる環境づくりを目的に、合理的配慮を体系的に整理し、実践に落とし込んだ共生型音楽会のモデルを構築しました。申込方法はWEB・電話・メール・FAXの複数手段を用意し、色覚障害に配慮した広報物の作成や客席ゾーニングの工夫など鑑賞前から鑑賞中までのプロセスに配慮を組み込み、来場者の参加障壁を低減しました。

客席ではフロアマットを敷いたフリースペースを設置し、車椅子・ストレッチャー利用者や介助犬同伴者席を複数箇所に配置しました。さらにクールダウンスペースを含むゾーニングを行い、感覚過敏などの特性を持つ来場者も無理なく鑑賞できる環境を整備しました。これにより従来の客席配置では対応が難しかった多様なニーズへの対応が可能となりました。



ゲストの前川裕美さん

情報保障の面では、聴覚障害のある方へUDトークによる字幕表示、手話通訳、赤外線音声補聴システムを併用しました。加えて視覚障害のある方へは点字プログラムや読み上げアプリ対応のテキストデータを提供しました。看護師の配置も来場者の安心感向上につながりました。

出演者には事前に障害特性や配慮事項のレクチャーを実施し、安心して演奏できる体制を整備しました。視覚障害のあるゲストのため導入した「ココテープ」は、足元で演奏位置を確認できる工夫として有効であり、他団体でも応用可能な手法として有用性が確認されました。

また、本公演では地元ボランティアが受付や誘導、車椅子利用者のサポート、クールダウンスペースの見守りなどを担い、来場者に寄り添った対応を行いました。地域の協力により合理的



ボランティアスタッフと打合せ

配慮が現場で円滑に機能し、安心して参加できる鑑賞環境が実現しました。

本事業は沖縄県外の大阪で地域の演奏家と連携して実施し、共生型音楽会が地域を越えて展開可能であることを示しました。得られた知見は冊子として整理し、全国の福祉・音楽関係団体へ共有します。これらの成果は文化芸術分野における合理的配慮の実装モデルとして、公演企画や人材育成、文化施設との連携に活用でき、福祉・医療・教育・ICTなど多分野と連携した取組として共生社会の実現に向けた波及効果が期待されます。



介助犬と一緒に指揮に挑戦

事業実施における工夫

ポイント

琉球フィルは、これまでの共生型音楽会の実績を基に、障害当事者・福祉専門家・演奏家が対等に協議する「ゆいまーるミュージックプロジェクト」を核とした運営体制を構築しました。企画段階から多様な障害特性を想定し、申込方法の複線化や客席ゾーニング、情報保障、医療的配慮までを一体的に設計した点が特徴です。演奏家には事前レクチャーを行い、安心して参加できる環境と演奏の質を両立させました。さらに、視覚障害者向けのココテープ導入や、来場者アンケートを通じた評価・改善を行い、得られた知見を冊子として共有することで、他地域・他団体でも応用可能な実践モデルとして整理しました。

音楽体験を通した不登校児童生徒の社会的接点を作る音楽プログラムの開発と実践、及びその検証

団体名

一般社団法人 楽友協会おきなわ

所在地：沖縄県那覇市

団体 URL：https://gakuyukyokaiookinawa.jimdosite.com/

事業概要

不登校やひきこもりを経験した子ども・若者たちが、クラシック音楽家と毎月ワークショップで、音楽の楽しみやコミュニケーションを経験しました。人と目を合わせられなかった参加者が挨拶できるようになり会話が生まれるなど、関わりを閉ざした状態から、音楽活動をきっかけにコミュニケーションを取り戻していきました。弊社のファシリテーターと外部講師が連携し、居場所ごとにヒアリング・楽曲調査を行い、参加者が音楽と出会うための仕掛けをそれぞれの居場所に合わせて作りました。

今年度は対象者の拡充にもつとめ、子ども食堂や児童館などに声かけし、9月の合同ワークショップ会、1月の成果発表会で新規の参加者が増えました。

本事業で実施した内容

音楽ワークショップ・楽器指導

開催回数：2025年6月～2026年3月
音楽ワークショップ32回、
楽器指導(ギター、ピアノ、ドラム)25回
場所：那覇市(子どもの居場所 2、就労支援事業所 1)
うるま市(子どもの居場所 3、就労支援事業所 1、子ども食堂 1)
宜野湾市(フリースクール/アメラジアンスクール・イン・オキナワ)
対象：子ども7～18歳、成人23～50歳/
述べ人数370名
ファシリテーター：鶴見幸代(作曲家)、北崎幹大(作曲家)、
他楽友協会おきなわ
参加費：無料

実施内容

それぞれの居場所で、音楽家と作曲家がプログラムをファシリテートしました。参加者の興味関心に沿った内容で、対話を通じて子どもたちの意向を具体的に共有しました。プログラムは居場所ごとに作成され、子どもや利用者の意向をできる限り反映しました。アメラジアンスクールでは、7月・8月に音楽ワークショップを開催しました。



アメラジアンスクール ヴァイオリン体験

合同ワークショップ会「ONEDAY(ワンデイ)合宿」

開催日・場所：2025年9月21日／沖縄市 子ども第三の居場所 E.C.L
9月28日／那覇市 那覇市人材育成センター まーいまいNaha
対象：音楽ワークショップ参加者、居場所のOBOG、子ども食堂利用者など／述べ人数52名
参加費：無料

実施内容

異なる居場所の参加者同士が一堂に集まり、音楽活動を共に実施しました。オリジナル楽曲作りと発表会に向けて意見交換する場を設け交流を深めました。

成果発表会「ゆかいな音楽家と、ときどきひきこもり2026」

開催日：2026年1月31日(土)18:00～20:15
場所：うるま市民芸術劇場 響ホール
入場料：一般 1,500円 高校生以下無料
対象：音楽ワークショップの参加者、居場所の利用者&支援員、居場所のOBOG 他
参加費：無料

実施内容

ワークショップで生まれたオリジナル楽曲の発表や、初めて取り組んだ楽器の演奏、仲間とのアンサンブル、ダンスとのコラボレーションなど、参加者それぞれの思いが込められた多様な表現が舞台に並びました。今年は演奏にとどまらず、舞台衣装や舞台美術・小物、物販などにも関わりが広がり、8事業所・総勢108名が参加しました。初めての大ホール開催ということもあり、参加者のモチベーションも高まり、事業の雰囲気や魅力を広く発信する機会となりました。

鑑賞
機会創造
機会発表
機会作品
評価権利
保護販売
支援交流
促進相談
体制人材
育成情報
収集連携
協力

本事業で得られた成果

子ども・若者の成長を音楽で後押しする ～みんなで楽しむワークショップ～

生きづらさを抱えた子ども・若者たちがクラシック音楽家と出会い、楽器を手にし、「みんなで創る」主体的な音楽体験を届けています。演奏家が企画段階から関わり、外部講師や支援員と連携しながら、参加者のニーズに応じて各拠点ごとにプログラムをカスタマイズし、継続回とゲスト回で年間にメリハリを持たせています。多くの

参加者にとって音楽は「聴くもの」にとどまっていたが、ワークショップを通じて「演奏する」「共に創る」体験へと広がっています。周囲に促されて音を出すことで、新たな感性が引き出される場面も見られます。

支援職員も共に参加することで、教え合い、感じたことを伝え合う関係が生まれ、音楽を通した自己表現の機

会が育まれてきました。継続的な取り組みにより、居場所は「音楽をする場」へと変化し、支援する側とされる側の境界もやわらぎつつあります。月に一度のワークショップは、音楽と出会い直し、表現活動へとつながる機会となり、他者との関わりの中で自己開示やコミュニケーションの力も育まれています。

～人と場が出会い、共に創る発表会～

今年度は初めて劇場の大ホールで成果発表会を開催し、出演者は100名を超え、参加者・支援者ともに大きな盛り上がりを見せました。これまでの取り組みの積み重ねが形となり、活動の広がりを実感する機会となりました。

音楽活動を通して、居場所や事業所にとどまらず、子ども食堂や児童館などへとつながりが広がり、人と人、居場所と居場所が出会う機会が増え

ています。就労支援事業所では、利用者の音楽スキルを活かし、子どもたちに楽器を教える取り組みも生まれ、個々の力が地域の中で活かされ始めています。

また、継続して参加している利用者が、他の子どもたちに楽器を教えたり練習に付き添ったりと、支える側として関わる姿も見られるようになりました。さらに、地域を越えたダンスチームの交流や、同じ施設を利用していた

高齢者との自然なやりとりなど、発表会に向けた活動の中で、多様な人々がゆるやかにつながる場面が生まれています。

こうした積み重ねの中で、普段出会うことのない人や場所が音楽を媒介にゆるやかにつながっていくことこそが、本事業の本質であると感じています。発表会は成果発信の場であると同時に、新たな関係性が生まれる場となりました。



発表会2026 集合写真



成果発表会 チラシ 2026

事業実施における工夫

演奏しやすい楽器と演奏可能な楽譜

本事業では、ウクレレやカリンバ、ピアノ、沖縄三線など視覚的にわかりやすい楽器を用い、レベルに応じて楽譜をアレンジし活用しました。未経験者でも演奏に参加ができ、アンサンブルの導入が円滑に行えました。

・アンケートシェア会

オンラインでアンケート結果のシェア会を実施し、大澤寅雄氏の報告と意見交換を行いました。参加者間で子どもや居場所の変化を具体的に共有し、多様な視点に触れることで実践的な学びが深まり、本事業の解像度が上がりました。移動負担なく気軽に参加でき、新しい発見と改善のアイデアが生まれる場となりました。

令和7年度 障害者等による文化芸術活動推進事業事例集

発行日：令和8年3月

発行：文化庁参事官(生活文化創造担当)付共生社会推進担当
〒602- 8959 京都市上京区下長者町通新町西入藪之内町85番4

編集協力：株式会社ステージ